

浅羽町立浅羽東小学校新設工事に伴う埋蔵文化財調査報告

古 新 田 I

遺 構 編

1992

静岡県浅羽町教育委員会

浅羽町立浅羽東小学校新設工事に伴う埋蔵文化財調査報告

古 新 田 I

遺 構 編

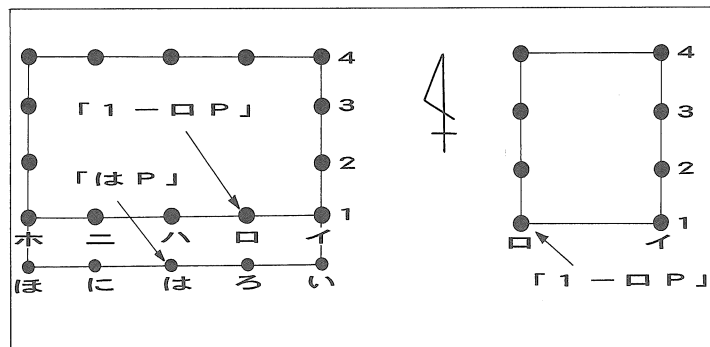
1992

静岡県浅羽町教育委員会

例 言

1. 本書は、古新田遺跡^{こしんでん}の発掘調査報告書（遺構編）である。また、確認調査終了報告書（1988年12月報告）も同時に収載した。
2. 本遺跡は、浅羽町浅羽に所在し、浅羽町立浅羽東小学校の新設工事に伴い、1988年11月1日から同年11月30日まで確認調査を行い、1989年3月1日から1990年3月31日まで本調査を実施した。
3. 測量図面や遺物の整理作業は1990年4月1日以降継続しており、遺物編および考察編は1992年度に刊行予定である。なお、1991年3月30日に概報を発行しているが、その際の記述と本書との矛盾は、本書をもって正式報告とする。
4. 調査の体制は下記の通りである。
調査主体者 浅羽町教育委員会 教育長 岡本幸夫
調査担当者 柴田 稔・柴田 睦
5. 基準杭の設置、遺構などの測量の一部、および遺構図面のトレースは株式会社フジヤマに業務委託した。
6. 発掘調査および本書の発行に係わる事務は浅羽町教育委員会社会教育課が担当した。
7. 本書の編集および写真撮影は柴田 稔が行い、執筆はⅠ・Ⅱ・Ⅳ－柴田 稔、Ⅲ－柴田 睦が担当した。また、遺構図面の整理は柴田 睦が行った。
8. 遺構の略称や番号（遺構編別冊凡例参照）については、遺物整理時の混乱を防ぐため、調査時のものをそのまま使用している。そのため、土坑と溝状遺構の分類など一部不適切なものもある。また、仮番号を付しているものもある。
9. 表内の計測値の単位については、長さは「cm」、面積は「㎡」で、推定値には「()」を付した。柱穴の規模については平均値であるが、掘立柱建物跡で隅柱穴がとくに深いものは、それらを除いて観察の項に別記している。
10. 竪穴住居跡の面積については、周溝の内側を計測している。
11. 棟および主軸方位については、掘立柱建物跡と竪穴住居跡は東西棟の建物を基準とし、南北棟の可能性のあるのは90°変換して東西棟の建物に合わせた。その場合、方位の後に「変換」と記している。竪穴住居跡の主軸方位は主柱穴もしくは壁の向きを計測している。土坑の主軸方位は長径となるラインを主軸として計測している。
12. 掘立柱建物跡についての記述に際しては、宮本長二郎先生の「弥生時代・古墳時代の掘立柱建物跡」『弥生時代の掘立柱建物跡一本編一』1991 埋蔵文化財研究会などを参考にした。また、床束を有する可能性のある建物もまとめて総柱建物跡と記述している。
13. 柱痕下の礫と根石は便宜的に基礎石とまとめて記述している場合がある。また、柱痕を取り巻く礫については根巻石と記述している。

14. 柱穴の位置については、右記のように南東隅柱穴を基点とし、南北列を算用数字で、東西列をカタカナで示し、「1－□P」のように記述している。また、庇柱穴などは、ひらがなで「はP」のように記述している。



目 次

	頁
I 調査の経過	1
浅羽町立小学校建設予定地内埋蔵文化財確認調査終了報告書	1
II 周辺の環境	7
1) 自然環境	7
2) 古新田遺跡出現の歴史的環境	12
III 遺構の概要	16
1) 溝状遺構の詳細	16
2) 掘立柱建物跡の詳細	17
3) 竪穴住居跡の詳細	32
4) 土坑の詳細	42
IV まとめ	58
古墳時代の建物群の検討	58

挿 図 目 次

第1図 位置図	7
第2図 周辺の遺跡分布図	9
第3図 北原遺跡の遺構配置図	12
第4図 第I区画	60
第5図 第1区画	61
第6図 第2区画	62
第7図 第III区画	62
第8図 第II区画	63
第9図 第3区画	63
第10図 第I～III、1～3区画設定状況	64
第11図 各区画の設定状況	65
第12図 I期の集落	69
第13図 II期の集落	70
第14図 III期の集落	71

※ 図版目次は遺構編別冊に添付

表 目 次

表-1 周辺遺跡の概要	10
表-2 古墳時代掘立柱建物跡の方位と群別	58
表-3 建物群の消長	72

写真図版目次

- 図版 1 「コ」字状配置の建物群 (3-1~5 H)
図版 2 「ロ」字状配置の建物群 (1-1~3 H、2-1~5 H)
図版 3 溝に囲まれた竪穴住居跡 (1-3 J) とその周辺
図版 4 上 1-1 H、1-3 D (南から)
下 1-1 H・1-ロ P 柱痕と根巻石 (柱痕は割断)
図版 5 上左 1-1 H・3-ハ P 根巻石
上右 1-1 H・1-ニ P 柱痕、基礎石と根巻石
下 1-1 H・3-イ P 基礎石と根巻石
図版 6 上 1-1 H・1-ハ P 基礎石と根巻石
下 1-1 H・2-イ P 柱痕と根巻石
図版 7 上 1-2 H (北から)
下 1-2 H・1-ホ P 断面 (下半の明るい部分は底面)
図版 8 上 1-3 H (南から)
下 1-5 H (西から)
図版 9 上 1-6 H (南から)
下 1-7 H (南から)
図版10上 1-8 H (南から)
下 2-1 H (奥)、2-2 H (手前、西から)
図版11上 2-2 H (南から)
下 2-3 H (南から)
図版12上 2-4 H (南から)
下左 2-4 H・3-ハ P 遺物出土状況 (須恵器・白玉)
下右 2-4 H・3-ロ P 柱痕内遺物出土状況 (勾玉)
図版13上左 2-4 H・3-ニ P 基礎石
上右 2-4 H・3-ハ P 根巻石
中左 2-4 H・3-イ P 基礎石
中右 2-4 H・2-ロ P 根巻石
下左 2-4 H・2-イ P 根巻石
下右 2-4 H・2-ニ P 基礎石
図版14上 2-5 H (南から)
下 2-6 H (南から)
図版15上 2-10H、2-4 K (北から)
下 2-11H (大型)、2-22H (小型、南から)
図版16上 2-12H (総柱)、2-18H (奥)、2-23H (南から)
下 2-14H (手前)、2-15H (右奥)、2-16H (左奥、南から)
図版17上 2-15H (奥)、2-16H (手前、西から)
下 2-17H (東から)

図版18上	2-19H (東から)
下	2-20H (東から)
図版19上	3-1H (北から)
下	3-1H (南から)
図版20上	3-1H 東側棟持柱柱痕発見状況
下	3-2H (奥)、3-3H (手前、南から)
図版21上	3-4H (西から、奥は3-5~8H)
下	3-5H (中央)、3-6H (手前)、3-7H、(奥、北から)
図版22上	3-8H (東から)
下	3-9H (北から)
図版23上	3-10H (西から)
下	3-11H (中央)、3-31H (西から)
図版24上	3-12H (東から)
下	3-13H (大型)、3-23H (小型、南から)
図版25上	3-23H・4-イP 上面遺物出土状況 (奈良時代須恵器)
下	3-14H (東から)
図版26上	3-15H (南から)
下	3-16H (東から)
図版27上	3-17H (東から)
下	3-18H (西から)
図版28上	3-19H (左)、3-20H (右、西から)
下	3-19H (奥)、3-20H (手前、南から)
図版29上	3-21H (南から)
下	3-22H (東から)
図版30上	3-24H (北から)
下	3-25H (奥は2-19H、西から)
図版31上	3-30H (南から)
下	3-32H・2-ニP 柱穴内遺物出土状況
図版32上	4-1H (南から)
下	4-2H (南から)
図版33上	4-3H (西から)
下	4-4H (東から、手前は4-3D)
図版34上	4-5H (東から)
下	4-5H (奥)、4-6H (中央)、4-7H (手前、東から)
図版35上	4-8H (北から)
下	4-9H (手前)、4-12H (奥、西から)
図版36上	4-10H (手前)、4-11H (奥、北から)
下	4-12H (手前)、4-13H (奥、北から)
図版37上	1-1J (南から)
下	1-1J 遺物出土状況

図版38上	1－2 J（南から）
下	1－3 Jと1－1 K及びその周辺
図版39上	1－3 J（南から）
下	1－4 J（南から）
図版40上	1－5 J、1－4 D（上）、1－5 D（下、南から）
下	1－6 J（南から）
図版41上	2－1 J（南から）
下	2－3 J（中央）、2－9 J（左、南から）
図版42上	2－4 J（南から）
下	2－5 J（南から）
図版43上	2－6 J（南から）
下	2－7 J（北から）
図版44上	2－7 J 排水溝遺物出土状況
中	2－7 J 排水溝と壁溝の関連
下	2－2 J 壁溝の新古関係
図版45上	2－8 J、2－1 H（南から）
中	2－10 J（南から）
下	2－10 J・2－1 P 遺物出土状況
図版46上	3－1 J（南から）
下	3－2 J（南から）
図版47上	3－3 J（西から）
下	3－4 J（東から）
図版48上	3－5 J（南から）
下	3－5 J・P 1 遺物出土状況
図版49上	3－5 J・P 2 遺物出土状況
下	3－6 J（東から）
図版50上	4－1 J（奥は4－2 J、南から）
下	4－2 J 貯蔵穴内遺物出土状況
図版51上	4－1 J 遺物出土状況
下	4－3 J（南から）
図版52上	4－4 J（東から）
下	3－1 K（白いポリ片の下は白玉、東から）
図版53上	1－1 D（南から）
下	1－6 D 遺物出土状況
図版54上	1－8 D（北から）
下	2－3 D（北から）
図版55上	2－4 D（北から）
下	2－20 D（北から）
図版56上	3－1 D 遺物出土状況
下	3－2 D（西から）

図版57上	3-3D (左上)、3-4D a (中央)、3-4D b (手前、東から)
下	3-5D (中央左)、3-6D (中央右)、3-16D (右、南から)
図版58上	3-7D (西から)
下	3-10D (南から)
図版59上	3-10D 遺物出土状況
下	3-10D 遺物出土状況
図版60上	3-10D 遺物出土状況
下	3-10D 奈良時代遺物出土状況
図版61上	3-11D (奥は3-12D、南から)
下	3-12D (手前は3-11D、西から)
図版62上	3-13D (西から)
下	3-14D (西から)
図版63上	4-1D (南から)
下	4-1D 遺物出土状況
図版64上	4-2D a 床面の状況 (東から)
下	4-2D a 上面遺物出土状況
図版65上	4-3D 遺物出土状況
下	4-3D 石製模造品出土状況 (白玉は代替品)
図版66上	4-3D 石製模造品出土状況 (勾玉、白玉)
下	4-4D 北端遺物出土状況 (4-2H 南西隅柱穴と重複)
図版67上	4-10D (西から)
下	4-12D (東から)
図版68上	4-仮3D 白玉出土状況
中	4-仮3D 白玉出土状況
下	4-仮4D 遺物出土状況 (礎、白玉)

I 調査の経過

古新田遺跡の本格調査は1989年3月1日から1990年3月31日までの13か月間行われたが、この調査を開始するまでには、考古学研究の立場からの現地踏査、確認調査、地元での聞き込み調査など、様々な課程を踏んでいる。そして、これらが効果的に作用した部分も多い。

これらの中で、確認調査は1988年11月1日から30日まで行っている。これは、報告書として提出されているが、印刷物としての刊行は行っていない。したがって、当報告書では、調査経過の一部と解釈して掲載する。

なお、原本はB5判で、本文6頁、写真8葉、挿図2枚であるが、これらの内、挿図（位置図）は当報告書と重複するので割愛した。また、原本では、遺構の種別・年代観の誤認や不適切な用語もあるが、経過を示す事実として訂正しないで掲載した。

浅羽町立小学校新設予定地内 埋蔵文化財確認調査終了報告書

遺跡名（仮称）古新田遺跡

調査期間 昭和63年11月1日

から同年11月30日

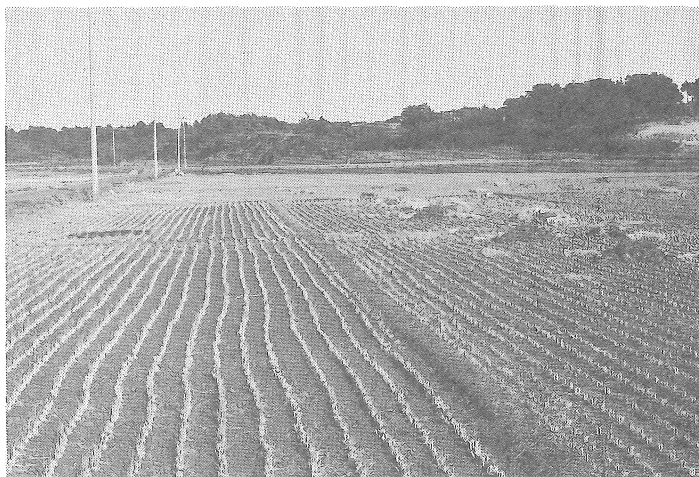
調査主体者 浅羽町教育委員会

教育長 岡本幸夫

調査担当者 柴田 稔

調査面積 約417㎡

写真1

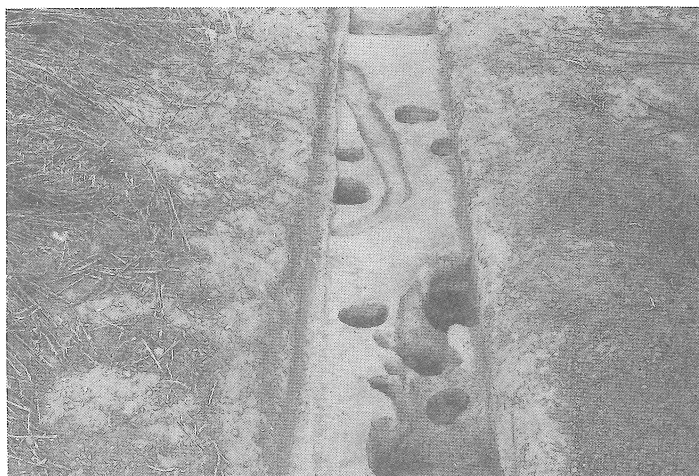


遺跡遠景

調査の経過

昭和62年3月15日に小学校新設候補地4箇所の遺跡分布調査を行った。これは、踏査によるものであるが、その時点で自然堤防を予定地にした2箇所はいずれも遺跡が存在することが判明した。また、今回の確認調査の対象となった地点も含めた段丘上の2箇所は遺跡の所在を確認することはできなかった。しかし、今回調査の対象とならなかった地点は、昭和42年に発掘調査を行った地点に隣接しており、遺跡の可能性が極めて高い場所であった。

今回の調査は、こうした事前の調査に基づいて選定された予定地に対し、なおかつ万全を期するために行ったも



第4トレンチ高床建物、住居跡、小ピット群

のである。

調査は、原則としてトレンチ調査の方法を取り、必要に応じて拡張区あるいはグリットを設定した。また、抜根作業、表土除去作業は重機を用い、包含層、遺構など精査を必要とする部分は人力で行った。

周辺の環境

当地点は浅羽町浅羽大字芝原字古新田に位置し、標高20m前後の段丘上である。平坦地は大半が茶園と成っているが、傾斜面などには山林・竹林などが多く見られる。

この段丘は、小笠山塊西南麓の中位の段丘に属し、大井川礫層を基層としているが、上面には風化の進んだ黄褐色粘土層が数十cmの厚みで堆積している。

段丘は、北東から南西に11%程度の傾斜をもっているが、侵食が進み、大小多数の開析谷を刻んでいる。

周辺には、貫名地、高道遺跡などの弥生時代の集落跡、貫名地古墳群などが見られるが、当地点に限って見れば、昭和22年の分布調査の時点でさえ用地南西隅付近に1基の古墳が記されているだけである。しかし、この古墳は昭和30年代には表面からは観察できなくなっていた。その後の遺跡地図は、この時の位置を地図に移したに過ぎない。

各トレンチの概要

第1トレンチ 2817-1番地に設定。幅約1m、長さ約16.5m。表面下約30cmで地山の黄褐色粘土層に達する。

遺構・遺物は発見されなかった。

第2トレンチ 1795-1に設定。幅約1m、長さ約14.5m。深さ約45cmで地山に達する。西端付近に土師器を出土する浅い凹地が発見された。表土からは少量の土師器、須恵器が出土した。

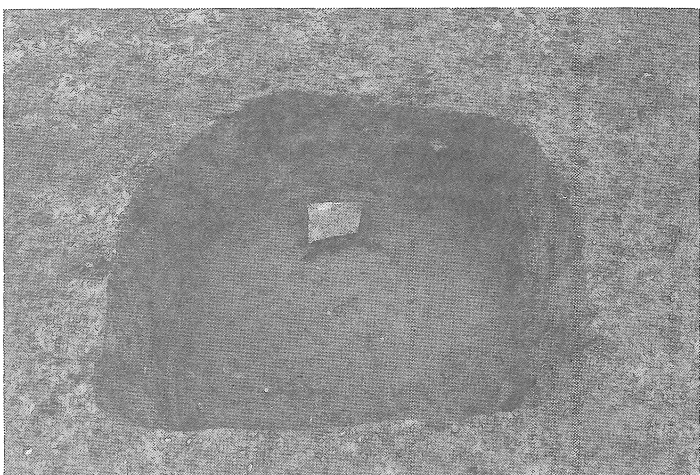
第3トレンチ 2812-1、2810-2、2811-1に設定。幅約1m、長さ約20mのトレンチ北よりの部分を西側に約4×5m拡張し、東側に約0.5×1m拡張した。2811-1、2810-2は深さ約60cmまで攪乱を受けているが、他は表面下約20cmで地山に達する。

トレンチおよび拡張区からは高床建物の柱穴（7個）と土坑（1基）が発見された。柱穴は、その

写真2



第3トレンチ拡張区 高床建物跡、土坑



第3トレンチ拡張区 高床建物跡須恵器出土状況

配置から2棟以上の建物跡を想定できる。また、内部からは須恵器が出土した。

第4トレンチ 2832-1、2832-2、2830-1、2829-1に設定。幅約1m、長さ約37m。深さ約20cmで地山に達するが、2829-1では表面下約60cmまで攪乱を受けている。

住居跡(1軒)、高床建物柱穴(2個)、小ピット群を発見した。住居跡の時期は不明だが、古墳時代前期の可能性が高い。高床建物柱穴は古墳後期、小ピット群は時期不明である。

第5トレンチ 2811-1、2808-1、2807-1、2802-1、2801-1に設定。幅約1m、長さ約39mのトレンチ西よりの部分を南に約5×15m拡張し、東よりの部分に約1.5mのグリット4個を追加して調査した。表面下約20cmで地山に達するが、2801-1では約60cmまで攪乱を受けている。

住居跡(2軒)、土坑(4基)、高床建物柱穴(9個)、小ピット群を発見した。

住居跡は、西よりの部分から発見した例は竪穴状を呈し、古墳時代前期の土器を出土しているが、東端の例は時期不明である。

土坑は、古墳時代前期に属する可能性が高い。

高床建物柱穴は2棟分とみることができ、時期は古墳時代後期であろう。

第6トレンチ 2798-1、2797、2799-1、2793-1に設定。幅約1m、長さ約35m。表面下約25cmで地山に達する。

トレンチ西端から小ピット(2個)、東端から住居跡(2軒)、土坑(1基)、溝状遺構(1条)を発見した。

溝条遺構は古墳時代後期であるが、他は時期を確認できる資料を得ることができなかった。

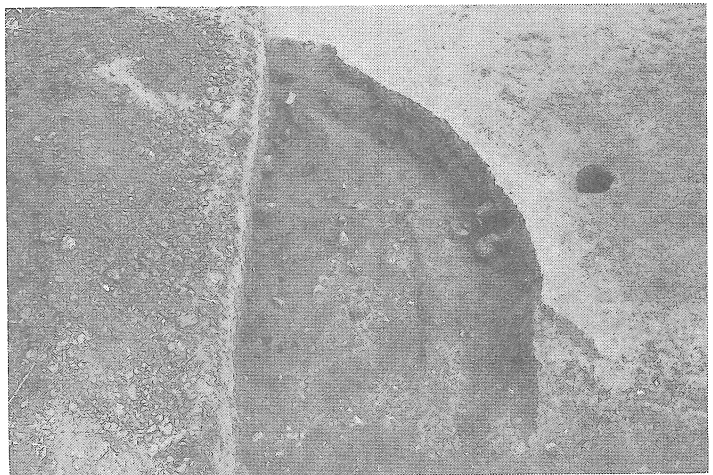
第7トレンチ 3029-1、3026-1、3025-1に設定。幅約1m、長さ約68m。表面下約25cmで地山に達する。

遺構・遺物は発見されなかった。

第8トレンチ 3025-1に設定。第7トレンチと連続。幅約1m、長さ約28m。深さ約25cmで地山に達する。

遺構・遺物は発見されなかった。

写真3



第5トレンチ住居跡



第5トレンチ土坑群

第9トレンチ 3021-1に設定。
幅約1 m、長さ約18 m。深さ約25 cmで地山に達する。

一部に深さ約20 cmの凹地があり、少量の土師器・焼土を発見したが、遺構の可能性は薄い。

第10トレンチ 2788、2785-1、2784-1に設定。幅約1 m、長さ約37 m。深さ約25 cmで地山に達する。

遺構・遺物は発見されなかった。

写真4



第5トレンチ高床建物跡

遺構の概要

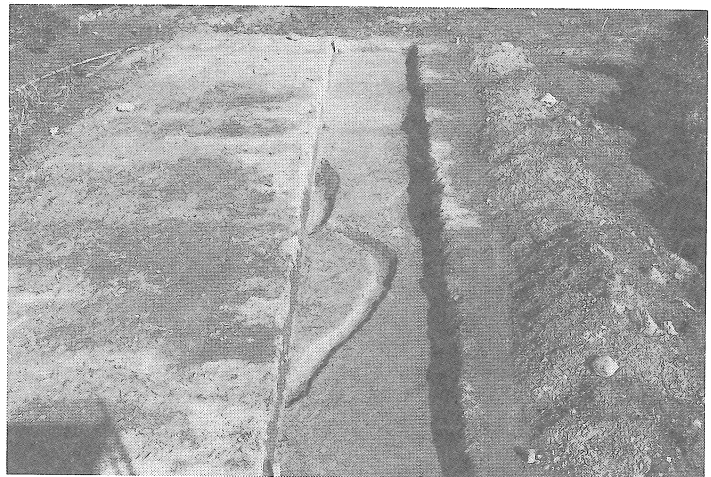
各調査区で発見した遺構は先に記したが、要約すると次のようである。

(竪穴) 住居跡 5軒
高床建物跡 5棟
土 坑 7基
溝状遺構 1条
小ピット群 数箇所

これらの内、住居跡・土坑は、出土遺物を参考にすると古墳時代前期と考えられるが、直上まで須恵器を出土している遺構もあり、古墳時代後期に属する可能性を残したものもある。

高床建物柱穴は、数個で須恵器が伴うことが確認でき、第3・4トレンチの例は古墳時代後期であることが確認できた。しかし、第5トレンチでは古墳時代後期であることが確認できる資料を得ることができなかった。

小ピット群は、時期を明確にはできなかったが、古墳時代前期から後期の住居跡になる可能性が高い。



第6トレンチ住居跡、土坑、溝状遺構

出土遺物

出土遺物は、総量で遺物収納コンテナ1箱分であるが、風化が進んでおり、保存状況は極めて悪い。遺物には土師器・須恵器がある。

土師器は、極度に風化し、時期を判断できる資料は極めて少量であるが、個々に見れば弥生土器とも考えることのできる資料も含まれている。

須恵器は、小破片のため時期を判断できる資料は数点しかないが、6世紀でも古い時期に属するものと考えられる。

町立小学校建設予定地内
遺跡確認調査区配置図



ま と め

遺跡確認調査の結果、小学校新設予定地の一部が遺跡であることは確認できた。したがって、当所の小字名から古新田遺跡とする。

古新田遺跡は、今回の調査で

① 古墳時代前期の集落跡

② 古墳時代後期の集落跡あるいは居館跡

と考えることができる。

古墳時代前期の集落跡は、調査区での観察では、住居跡が散在しており、発見される範囲は相当広いと考えられるが、面積に比較すれば、遺構の数は少ないとみることができる。

古墳時代後期の集落跡あるいは居館跡は、径70～80cm、深さ50～80cmの柱穴を持ち、太さ20cm程度の柱を立てた、高床の倉庫跡と想定できるものが目立っている。これらの内、第5トレンチの2棟が連続的に発見されている点、第5トレンチの建物と第3トレンチの建物との方位が関連性がある可能性を持つ点、周辺の古墳の分布が当遺跡の外側に限定されている点などは、単に集落跡と考えるよりも居館跡と考えた方が良いことを指摘する資料である。

なお、静岡県遺跡地図では、小学校建設予定地内の南東端付近に古墳が1基所在する可能性を示しているが、これは聞き込み調査で2780-1に所在したが、昭和30年代の重機による茶園開墾で消滅していることが判明した。

II 周辺の環境

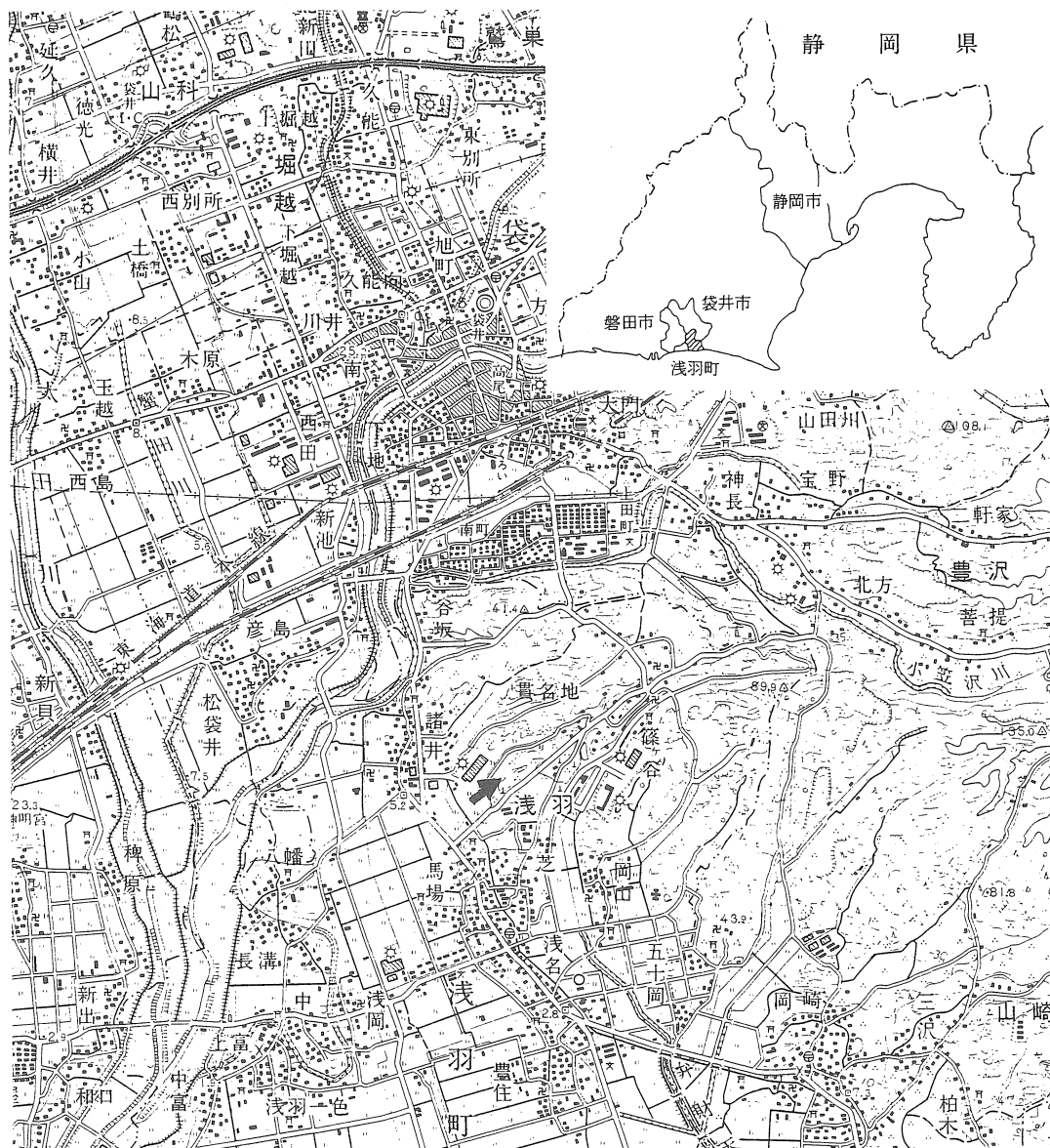
1) 自然環境

浅羽町域を中心にした自然環境は、「青木遺跡」、「権現山遺跡」、「団子塚遺跡」、「大畑遺跡」などの発掘調査報告書において記されている。したがって、それらを参照にして欲しいが、ここでは古墳時代の古新田遺跡成立の背景となり得る浅羽平地について記す。

浅羽町の西縁を区切るように流れる太田川は、周智郡森町と春野町との境界になっている春埜山付近に源を発し、磐田郡福田町の西縁付近で遠州灘にそそぐ、全長約49.0kmの川である。

原野谷川は、太田川の支流で、掛川市八高山付近に源を発し、浅羽町富里付近で太田川に合流する全長約41.3kmの川である。

太田川と原野谷川が合流する付近では、磐田原台地と小笠山塊との間は2.5km程度であるが、この両川はかつては別の川であったという。この川は、1602年に徳川家康の家臣であった伊奈備前守忠次に よって合流工事が行われて現在に至った。工事に関する具体的資料はないが、浅羽町中村、福田町



第1図 位置図 (1:50,000)

大島などでは、この工事に伴う移転などが伝えられている。また、太田川と原野谷川を比較した場合には、自然堤防地帯では、両者は自然堤防を造りながら遠避け合うと考えるのが妥当であることから、事実とみてよいであろう。

この時期の流路は、現在発行している国土地理院の地図でも観察できるが、現在の合流点付近での両河川間は400～500m程度まで接近しており、事実上は半ば合流した川であったともいえる。おそらく厳密な調査を行えば、水運としての連続はあり得ると思う。

第2図は、太田・原野谷川合流工事当時の流路と、遺跡分布から古墳時代前後の両河川を復元したものである。

谷底平野での太田川の流路については、新豊院山墳墓群の調査概報や袋井市史で、現在よりもかなり東にあるのではないかと予測したが、これに従うと、現在は原野谷川の支流になっている蟹田川よりも東を流れることになり、蟹田川もある時期の太田川であったとすることができる。下流は、「掛川誌稿」では福田町塩新田付近で今の浦川と合流してはるか西に流れて海に入ったといわれている。この事実関係は別としても、遠州灘の沿岸流からみれば、西に向かった流れは、砂堤に添って東に流れを変えるのが通例と思えるために、今の仿僧川がここで考えようとしている太田川の下流とみている。

原野谷川は、中世の流路以外にも、中世の流路の左岸を右岸にした程度の流路もあるが、この流路によって形成された自然堤防上には塩口遺跡がある。この遺跡は、遅くとも4世紀後半には集落の形成があったと考えられるため、流路はそれ以前に移動していたと考えなくてはならない。また、【宝水川】も古い原野谷川であろうが、新堀遺跡を始めとした遺跡の立地をみると、塩口遺跡に係わる原野谷川よりもさらに古い流路であろう。この他にも、袋井市新池付近からほぼ直線的に流れて、赤堀池、前川池へと通ずる流路もある。この流路の時期は明確にみることはできないが、第2図に示した流路が弥生時代から古墳時代の流路でないとすれば可能性が高い。

浅羽平地に係わりの深い太田・原野谷川について記したが、両河川共に下流はラグーン（潟湖）に流入しているが、太田川の下流でのラグーンの状況は把握できない。これは基礎的作業である遺跡の分布調査が不十分なためであるが、原野谷川下流よりは埋積が進み、湾状の形態から池沼の形態に進んでいたとみられる。しかし、磐田市二之宮貝塚は、ヤマトシジミを主体とした弥生時代後期の貝塚であり、奥深くまで海水の進入はあったとみられる。

原野谷川の下流は、江戸時代に至ってもラグーンの残存がみられる。江戸時代の絵図面を基にラグーンを復元すると、5km²にも達し、浅羽町の奥深くまで進入している。遺跡はこれらのラグーンに添って広がっている。

また、笠西池とラグーンとを結ぶ【宝水川】は、弥生～古墳時代ころにも、原野谷川の名残川として存続し、小笠山塊の水を集めて流れる弁財天川の前身となっていたと考えられる。この点は「青木遺跡」でも記したが、弥生から古墳時代にはこの川を中心とした水利権が存在し、その水利権に基づく遺跡群が形成されていたと理解できる。

古新田遺跡はこの水利権と、ラグーンを媒体とした舟運とによって成長した首長の集落と理解したいわけであるが、この点については、歴史的環境で記す。

表－１ 周辺遺跡の概要

1	団子塚遺跡 団子塚古墳群	B～G地点まであり、主に弥生時代中期の周溝墓約100基（B・C・D・E地点）、弥生時代後期の集落（D・F・G地点）、古墳などが調査された。 周溝墓は、中期の嶺田式から白岩式が中心で、後期初頭ころまで造られる。集落は、後期が中心で混在型Aの集落（F地点）、混在型Bの集落（D地点）などがある。 古墳には明治時代に六鈴鏡を出土した古墳、金製三角飾り板付き帽、振りり環頭大刀、空玉などを副葬した6世紀前半の円墳（団子塚9号墳）、横穴式石室を埋葬施設とした円墳などがある。後期の群集墳として著明であるが残存するものは少ない。 参考文献：団子塚遺跡－遺構編－ 袋井市教育委員会 1992 団子塚遺跡Ⅰ 浅羽町教育委員会 1992 当報告書
2	谷坂遺跡 谷坂古墳	古墳の墳丘などから弥生時代後期の土器が出土している。また、1号墳北側の溝は周溝墓の可能性はある。 古墳の時期は不明確であるが、1号墳は5世紀後半の可能性が高い。 参考文献：「谷坂第1、2、3号墳」 埋蔵文化財調査報告書 日本国有鉄道 1965
3	北山遺跡 北山古墳	弥生時代中期の白岩式に属する周溝墓6基が調査された。1号墓からは輝緑凝灰岩製の管玉259点、赤色凝灰岩製管玉3点、朱などが出土した。また、白岩式の古い段階に属すると思われる大型の土坑2基も発見された。 古墳は4基発見されたが、いずれも横穴式木芯粘土室を埋葬施設としたもので、6世紀後葉から7世紀前葉に属している。他に小屋掛があったと思われる土坑なども発見された。 参考文献：北山遺跡 浅羽町教育委員会 1987
4	北原遺跡	混在型Aに属する弥生時代中期から後期の集落跡で、竪穴住居跡と掘立柱建物跡との組み合わせが注目できる。 参考文献：北原遺跡 浅羽町教育委員会 1987 当報告書
5	山畑遺跡 山畑古墳	菊川式の新しい段階の土器片が採集されている。集落跡と考えられる。 古墳は5基現存しているが、時期などは不明である。
6	王子遺跡 王子古墳	周溝墓1基が調査されたが、時期は不明確である。周溝から弥生時代後期前葉の土器棺1基が発見されたが、嶺田式の土器片も出土している。 3基が現存し、1基が調査された。調査した4号墳は、木棺直葬の円墳である。埋葬施設からは刀子3点が出土した。墳丘から出土した須恵器は、6世紀末に属する。 参考文献：王子遺跡 浅羽町教育委員会 1983
7	十二所遺跡	弥生時代から中世の複合遺跡 現在までの調査では弥生時代中期にさかのぼる資料は得られていない。また、5世紀後半から6世紀前半も不明確である。弥生後期から古墳前期、古墳後期から奈良・平安・鎌倉時代の資料は多い。 遺跡としてはかなり大型になると思われる。 遺跡内にある心宗院を中心とした範囲は、中世の居館の可能性が高い。 参考文献：十二所遺跡 浅羽町教育委員会 1989
8	貫名地遺跡 貫名地古墳 A群	菊川式の新しい段階に属する竪穴住居跡が1軒調査された。また、6世紀の集落が予測される。 古墳は、3号墳1基が残存する。3号墳は径約30mの前方後円墳であろう。時期を決定する資料は見されていない。 5号墳は、一部丹塗りの模様積み状の横穴式石室で、金銅装の責め金具を持つ直刀などが出土している。築造時期は須恵器から7世紀中葉と考えられる。
9	貫名地古墳 B群	現存する古墳は2基だけであるが、多数が所在していた可能性がある。1号墳は前方後円墳の可能性もある。また、古新田遺跡の東端に所在した2号墳は、改植によって破壊されていたが、6世紀後葉の須恵器、馬具が採集された。
10	古新田遺跡	当報告書掲載
11	観音山古墳	旧名称は五ヶ山古墳。径20～30mの中型の古墳と考えられるが、自然地形の加工の様子を見ると大型になる可能性もある。時期などは不明確だが5世紀の古墳であろう。
12	高道遺跡	弥生時代から中世の複合遺跡

		十二所遺跡に類似した規模を持っているが、段丘と自然堤防の両方に立地し、古新田遺跡と連続する可能性がある。
13	五ヶ山 A-1号	自然地形を利用した円墳と思われる。径は、見掛けでは20m程度である。 木棺直葬で直刀1振が出土している。墳丘から5世紀後葉の須恵器甕片が出土した。
14	五ヶ山 B-1	自然地形を利用し、見掛けの径約22m、高さ約4.5mの中型の円墳である。 埋葬施設は2基あり、いずれも木棺直葬である。第1主体部は、長さ約7.5mで、銅芯金貼りの金環、ガラス玉、勾玉、銀製(?)釧、剣、鏃、鈍、斧、竖櫛などが出土している。第2主体部は、長さ約4.4mで、剣、鈍、斧、鏃、鍬先などが出土している。また、いずれの埋葬施設も上面から土師器片が出土している。築造時期は、5世紀後半であろう。
15	小林遺跡	自然堤防上に立地し、弥生後期から中世までの複合遺跡。
16	常楽寺遺跡	16~18はいずれも浅羽町豊住字居廻に所在し、場合によっては連続する1遺跡の可能性もある。
17	居廻遺跡	弥生中期から中世の複合遺跡で、土器片の他に有孔磨製石鏃が採集されている。
18	石原遺跡	参考文献：王子遺跡 浅羽町教育委員会 1983 資料紹介参照
19	屋敷通遺跡	19・20・31はいずれも浅羽町新堀の自然堤防上に所在することから新堀遺跡とも呼ぶ。しかし、前2
20	黒清遺跡	者は右岸自然堤防、後1者は青木、馬場、西立遺跡へと続く左岸自然堤防に立地している。
31	北ハサマ遺跡	弥生後期の遺物も少量発見されているが、古墳前期になって急速に拡大する遺跡である。 鎌倉時代までほぼ連続的にたどれる。 5世紀後半の遺物も少量出土している。 参考文献：北ハサマ遺跡 浅羽町教育委員会 1991 新堀遺跡 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991
21	青木遺跡	北ハサマ遺跡と連続している。広い意味では新堀遺跡に含めることもできる。 内容は本書に掲載した。 参考文献：青木、馬場第1・第2遺跡 浅羽町教育委員会 1984 青木遺跡 浅羽町教育委員会 1991
22	宮前遺跡	自然堤防に立地する。範囲内の稲荷神社の盛土は古墳の可能性もある。
23	松山遺跡	砂堤上に立地する。縄文時代後期の土器片、弥生時代後期の土器片、太型蛤刃石斧などが採集されている。
24	村前遺跡	砂堤上に立地する。縄文時代の剥片1点の他、弥生土器などが採集されている。
25	宮西遺跡	砂堤上に立地する。縄文時代の剥片1点の他、古墳時代前期の土器、奈良時代の蔵骨器2点などが発見された。
26	法音庵古墳	径20m程度の古墳と思われる。
27	宮の腰遺跡 地蔵山古墳	砂堤上に立地する。7・8世紀代の須恵器少量が発見された他に、中世の貝塚が所在した。 径約40mの円墳で、埴輪円筒列がある。埴輪から5世紀末から6世紀初頭の築造とみられる。 参考文献：地蔵山古墳群測量調査報告書 浅羽町教育委員会 1986 権現山遺跡 浅羽町教育委員会 1987
28	権現山遺跡	砂堤上に立地する。弥生時代に属すると思われる周溝墓1基、縄文から弥生時代の石鏃、奈良時代の蔵骨器・土坑などが発見された。 参考文献：権現山遺跡 浅羽町教育委員会 1987
29	釜下遺跡	自然堤防上に立地する。6世紀以降の遺跡と考えられる。
30	塩口遺跡	福田町内に所在する。自然堤防上に立地する。4世紀代の土器片、5世紀代の土師器甕などが採集されている。
32	大門I遺跡	縄文から近世にかけての複合遺跡。古墳時代とも考えられる総柱式の掘立柱建物跡などが発見されており、居館の所在も予測される。 参考文献：大門遺跡 袋井市教育委員会 1983
33	大門大塚古墳	6世紀中葉の横穴式石室を埋葬施設とした径約26mの円墳で、この時期としては大型に属する。馬具、鏡などを副葬し、磐田市こしき塚古墳などと共に、遠江地方でも有力な後期古墳である。 参考文献：大門大塚古墳 袋井市教育委員会 1987
34	掛之上I遺跡 狐塚古墳	弥生中期の周溝墓の他、7世紀後半代と思われる掘立柱建物跡群が発見されている。掘立柱建物跡群の配置は居館を予測させる。 範囲内にある狐塚古墳は、全長30m程度で5世紀代の前方後円墳である。

		参考文献：袋井市史―通史編― 袋井市 1983
35	高尾向山古墳	9基からなる群の内6号墳は、全長30m程度の前方後円墳で、5世紀末から6世紀初頭頃の築造と考えられる。また、周辺の小円墳は6世紀前半代の築造であろう。
36	長者平古墳群 A群	39基からなる古墳群であり、大半は横穴式石室を埋葬施設とした6世紀後葉以降の群集墳であるが、2号墳は30m弱の前方後円墳で、6世紀前半の築造と考えられる。
37	雲座古墳群 D群	5基からなる群集墳で木棺直葬系の埋葬施設をもち、6世紀前半の遺物を出土する。遠江地方では初期の群集墳である。周辺の他の群もほぼ同時期であろう。 参考文献：袋井市雲座D単位群発掘調査概報 袋井市教育委員会 1972

2) 古新田遺跡出現の歴史的環境

団子塚遺跡の弥生集落

古新田遺跡から北に約1.5kmの地点に団子塚遺跡が立地している。この遺跡は、古新田遺跡と同様に、小笠山塊の高位の段丘面に立地している。また、沖積平野に突出することなく、立地条件としては目立たない場所にあるといえる。この特徴は、古新田遺跡にも指摘できる内容であるが、団子塚遺跡の弥生時代集落についての概要を記すと、次のようである。

団子塚遺跡F地点 1集落を完掘しているが、竪穴住居跡27軒、掘立柱建物跡3棟が発見された。この地点は、SB3以西（西群）と、SB4以东（東群）の2群に分けられるが、掘立柱建物跡はすべて西側の群に属している。また、すべてが倉庫と考えられる。東側の群には掘立柱建物跡はないが、炉を伴わない可能性の高い竪穴住居跡が2軒あり、竪穴式の倉庫ないしは納屋と考えられる。また、掘立柱建物跡は西端部に集中する傾向を示し、共同の倉庫的要素が強い。

遠江地方の弥生時代後期の集落では、掘立柱建物跡を伴わない東群のような集落と少量の掘立柱建物跡を含む西群のような集落とがそれぞれ一般的であり、その観点からすれば極普通の集落といえる。

北原遺跡 F地点と小さな谷を隔てた南側に立地し、広い意味では団子塚遺跡に含まれる。

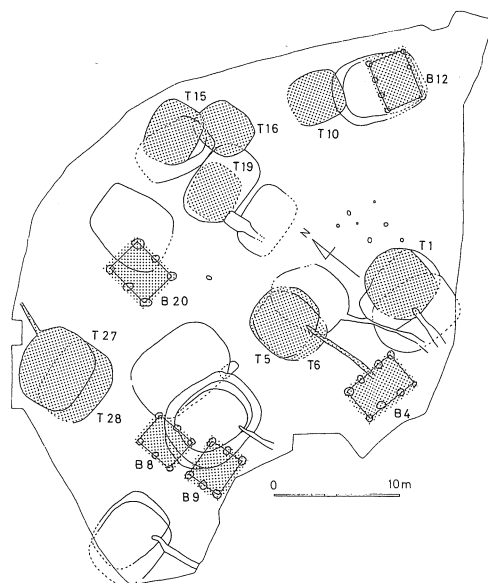
中期の後葉から開始される集落であるが、二之宮式以降の竪穴住居跡は16軒所在する。また、掘立柱建物跡は5棟所在し、いずれも倉庫と考えられる。

竪穴住居跡の数に対して掘立柱建物跡が少ないのは、F地点と同様であるが、掘立柱建物の分布がF地点のように集中しない特徴がある。また、切り合い関係などを参考にすると、すべてが後期後半に属すると考えられる。

後期後半の集落の構成をみると、竪穴住居跡の重複関係から2段階程度に分けられるが、基本的には竪穴住居跡1～2軒と掘立柱建物跡1棟で単位を構成し、団子塚遺跡F地点とは異なった集落構成が考えられる。

団子塚遺跡D地点 調査面積が約1,500㎡で、遺跡の全面積の30%以下である。ここからは、弥生時代後期の掘立柱建物跡20棟、竪穴住居跡13軒、土坑、溝状遺構などが発見された。竪穴住居跡と掘立柱建物跡とでは、掘立柱建物跡の方が多く、これまで知られている弥生時代後期の遺跡とは異なった様相を見せている。出土遺物では、SD5から出土した弥生時代後期の鉄剣2振が目立つ。

遺構の状況をみると、掘立柱建物跡のすべてが倉庫跡とはいえない状況にある。例えば、SB3と重複してい



第3図 北原遺跡の遺構配置(後期後葉)

るSH9～11は桁行3～4間の中型に属する掘立柱建物跡であり、SB3に続く時期に使用された住居と考えることが可能であり、SH3・13などの桁行が3～4間の例も住居と考えたい。これらの建物がどのような構成になるのかは十分に検討できていないが、竪穴住居・掘立柱住居・高床倉庫からなる群を考えることが可能である。

集落の類型化

以上の3集落は、互いに谷を挟んで隣接しており集落群として捉えられる。また、古新田遺跡の弥生時代集落も、これらと遺跡群を構成していると考えてよいであろう。そして、団子塚遺跡D地点に類似した集落構成であるといえる。

このように、互いに近接し同一時期の集落であっても、その集落構成には違いがみられ、ある種の発展段階あるいは階層差を指摘できるものがある。

さて、以上の集落を岩崎氏の集落の類型にしたがってみる。

団子塚遺跡のF地点、北原遺跡は混在型Aに属するであろう。しかし、団子塚遺跡D地点は掘立柱建物跡中に住居となりうる例が含まれると共に、掘立柱建物の数が多くなることから混在型Bに含めた方がよいようである。また、古新田遺跡の場合は、1-6Hや1-17Hのようにやや大き目の建物や所属時期の不明確な1-13Hなどを住居と考える他に、3-18Hのように独立棟持柱の建物などを考慮に入れると、混在型Bとすることができる。また、団子塚遺跡F地点は混在型Aに属しているが、東群だけをとれば単一型Aに属している。

遠江地方での弥生時代集落について少し見てみる。

単一型Aに属する例は菊川町三沢西原遺跡、佐久間町平沢遺跡などがあり、例としては混在型Aと共に少なくない。

単一型Bに属する可能性のある例は、弥生時代中期の掛川市原川遺跡、後期前半の浜松市梶子遺跡などがある。しかし、この類は低地の遺跡を中心にして意外に多いかも知れない。

混在型Aに属する資料は、先に挙げた以外にも浜松市沢上I遺跡、袋井市愛野向山遺跡、同若作遺跡、掛川市女高遺跡など、資料は年々増加している。

混在型Bに属する資料は、現在のところ先に挙げた2例だけである。

この分類における単一型については、弥生時代の集落立地や時期との関連がどの程度まで影響しているかが、現時点では掌握できていないが、台地上の遺跡からは単一型Bは発見されず、低地の遺跡には単一型Aは発見されていないように思われる。

したがって、現時点では岩崎氏の分類に従うとしても、弥生時代に関しては、単一型と混在型A・Bとに分けて考える程度にしたい。

古墳時代前期の集落の動向

浜松市大平遺跡では、掘立柱建物跡76棟、竪穴住居跡60軒が発見されており、遺跡全体としては混在型Bである。しかし、柵や堀による区画にしたがってみれば、北東隅には堀、柵、垣根などに囲まれた単一型Bに属する一角があり、北縁部は竪穴住居跡の多い部分と掘立柱建物跡の多い部分とに分かれている。したがって、この遺跡は基本的には混在型Bであるが、遺跡の中に機能的分化が起きていると考えることができる。

一方、大平遺跡とは谷を隔てて西側に立地する中平遺跡では、竪穴住居跡165軒に対して掘立柱建物跡は4棟しか発見されていない。ここでの小穴の状況をみると、建物自体の数は増える可能性もあるが、同時にその年代にやや問題もあり、結論的には掘立柱建物跡の数は大平遺跡の比ではないであろう。

大平遺跡に類似した可能性を持つものが、袋井市土橋遺跡である。方形の浅い溝によって区画され、たなかに、掘立柱建物跡3棟以上が発見された他、周辺にも数棟の掘立柱建物跡が分布しているが、竪穴住居跡は発見されていない。現時点では単一型Bであるが、この点は、先にも指摘したが低地に立地していることや、遺跡の範囲が明確でないことから結論にはならない。

以上の3遺跡の例からでは十分な予測はできないが、大平遺跡・土橋遺跡のように、掘立柱建物跡が優勢の集落では、おそらく一般的住居ではない特定の区画が存在したり、柵列などがみられるのに対して、中平遺跡のように竪穴住居跡優勢の集落には、特定できるものがない。この違いはやはり、集落を構成する階層の違いとみるべきであろう。

この考えかたにしたがうと共に、古墳時代前期の集落の状況から推察すれば、その前段階である弥生時代後期の集落における掘立柱建物跡の卓越は、より上位の階層の集落であることの証明になるであろう。

このように考えると、古新田遺跡や団子塚遺跡を含む浅羽町北部の一角には弥生時代後期にあって、この地域では優勢な階層を内在した集落群ないしは遺跡群が存在したであろうことがうかがえる。

地理的環境との整合性

このような集落の出現は、地理的環境で指摘したように、広大なラグーンに流入する原野谷川の氾濫による急速な堆積作用が、肥沃な耕作地を提供すると共に耕地を拡大して行ったためと理解できる。したがって、このことは、太田川下流のラグーンにおいても同じように展開していたと考えなくてはならないことにもなる。

浅羽町十二所遺跡や高道遺跡などの低地の遺跡では、現在までの調査では、弥生時代以来継続して集落が営まれていたと考えられるが、団子塚遺跡や古新田遺跡では、古墳時代に入ると集落は廃止されている。古新田遺跡の場合には、連続して立地する高道遺跡などと関連して考えればよいが、団子塚遺跡の場合には、耕地の拡大に伴う移動を考えたい。

古墳時代に入ると急速に集落の増加をみるのが、浅羽町南部を中心とした原野谷川のデルタ地帯と、遠州灘の砂堤地帯である。

浅羽町青木遺跡・新堀遺跡、福田町塩口遺跡などでは、古墳時代前期の遺物が知られている。特に、青木・新堀遺跡では、纏向型祭祀と強い係わりを持つとも考えられる大型の土坑が多数調査されている他に、畿内産とも考えられる土器などが出土している。また、「S字甕」の出土量も遠江地方の他の遺跡に比較すると多い傾向を示している。この遺跡は、当時のラグーンの西縁に添って南に突き出した自然堤防上に立地し、稲作以外の生業も予測されるが、現在までの調査では立証する資料は得られていない。

団子塚遺跡が、浅羽町南部のデルタ・自然堤防・ラグーン地帯に展開していったという確たる根拠はないが、当時の自然地形を復元すると、両者は【宝水川】の上流と下流の関係にあり、共通の水利の上に成立している遺跡として理解でき、あるいは、この時期には【宝水川】に添った集落群が形成されていたのではないかと考えられる。

5世紀になると、浅羽平地とその周辺部での遺跡の数は激減し、浅羽平地の遺跡としては、古墳を除くと新堀遺跡、塩口遺跡及び古新田遺跡の3遺跡が知られているに過ぎない。これは、遠江地方一般にいえることであり、古墳の築造などをみると、必ずしも減っているわけではないので、自然環境の変化に伴う集落の移動とみてよいであろうし、【宝水川】を紐帯とした集落群が消滅したとは理解できない。

古墳時代の【宝水川】は、上流の笠西池から下流のラグーンまで各所で池沼を形成しながら緩やか

に流れた川であろう。この川の流路の大半は、現在も排水路として機能しているが、その勾配は、 $1/1,500 \sim 1/2,600$ 程度の緩やかなものであり、過去にさかのほればさらに緩やかだったといっているであろう。

このような歴史的背景と地理的背景のなかに、古新田遺跡が出現したことは偶然ではないであろう。

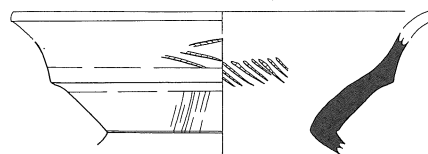
また、南部に展開するラグーンが太平洋沿岸の良港としての機能を果たし得たという前提にたてば、古新田遺跡に当時としては最新の技術が伝わっていたことも理解の外に出るものではない。

参 考 文 献

- 加藤芳朗 「大畑遺跡周辺の地理学的背景と遺跡立地」 『袋井市大畑遺跡』 袋井市教育委員会 1984
- 柴田 稔 『団子塚遺跡Ⅰ』 浅羽町教育委員会 1992
- 岩崎直也 「住居型式からみた集落の一類型」 『滋賀考古』第4号 滋賀考古学研究会 1987
- 水島和弘他 『三沢西原遺跡』 菊川町教育委員会 1985
- 平野和男 『ひらさわ』 佐久間町教育委員会 1971
- 足立順司他 『原川遺跡Ⅳ』本文編 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991
- 漆畑 敏他 『国鉄浜松工場内遺跡第Ⅶ次調査報告書』 浜松市教育委員会 1983
- 辰巳 均他 『都田地区発掘調査報告書』下巻 浜松市教育委員会 1990
- 松井一明他 「静岡県愛野向山遺跡」 『日本考古学協会年報』38 日本考古学協会 1987
- 吉岡伸夫他 『若作遺跡 若作古墳群』 袋井市教育委員会 1990
- 松本一男 『女高遺跡発掘調査概報』 掛川市教育委員会 1985
- 鈴木敏則 「静岡県大平遺跡」 『季刊 考古学』 雄山閣 1990
- 永井義博 『土橋遺跡』一基礎資料編一 袋井市教育委員会他 1985
- 鈴木一守他 『中平遺跡』 浜松市教育委員会 1982

塩口遺跡出土土師器

右に掲載した土器は福田町塩口遺跡（第2図および表1-30）から出土した柳ヶ坪型壺の口縁部である。磨滅が著しいため不明な点も多いが、内外面は櫛による刺突文が施され、外面は羽状に、内面は斜めに左から右の順に施文されている。頸部外面にはハケメが残り、稜部は



塩口遺跡出土土器実測図(S=1/3)

強く横ナデされている。内面は横位にヘラミガキされているようだ。色調は橙色(Hue 5 YR 7/4)で、胎土には橙色粒子と微細な黒雲母を多量に、ローリングを受けた粗砂をわずかに含んでいる。実測図は小片から復元実測したものである。(柴田 睦)

III 遺構の概要

古新田遺跡の遺構には、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土坑と溝状遺構などがある。

掘立柱建物跡 調査区の北縁を除く全域から約80棟が確認された。1・2区では、建物が「ロ」字状に8棟配置されており、その内の6棟が総柱建物である。3区西半では、比較的大型の建物が「コ」字状に配置されている。当遺跡で最大の建物は、4区西半の4-4Hであり、それを中心にして「コ」字状の建物配置がみられる。これらの建物群の所属時期は、古墳時代中期と考えて良いであろう。

その他に、梁間1間で桁行の柱間が比較的狭い例が、弥生時代後期の竪穴住居跡の分布する地区から多く発見されている。また、3-23Hや4-12Hの柱穴からは奈良時代の須恵器が出土し、奈良時代の掘立柱建物跡も少量所在することを示唆している。

竪穴住居跡 弥生時代後期に属すると考えられる例が調査区東半部に位置し、約11軒が確認された。

古墳時代中期の例は、調査区の北縁に多く立地し、基本的には掘立柱建物跡とは重複していない。それらは、約20軒が確認され、建て替えなども数えると約32軒になる。

土坑 小型の靴底形の土坑が弥生時代後期の竪穴住居跡に囲まれているかのように、2区に集中して約19基確認されている。これらは、出土遺物などからも弥生時代後期と考えて良いであろう。その他の土坑の多くからは、古墳時代中期の遺物が多量に出土しており、調査区内に散在しているが、4区の一部のように、「コ」字状配置の建物群を避けるかのように、多数が集中している例もある。総数はおよそではあるが60基程度と考えている。また、3区では、7～8世紀の遺物を出土した土坑も少量存在する。中世の土坑も調査区内に約10基が散在している。

溝状遺構 性格の把握できる例は少ないが、1-1Kのように竪穴住居跡の外周を取り巻いている例などは注目される。

また、調査区全域に幅1～3m、深さ0.4m前後の溝が長方形に巡っている。この溝は、田畑の境界・畦畔などの農地として生産性のない部分を国有の雑種地として登記したもので、この地方では二線引・赤道などと呼ばれている。前者は、主として隣地との境界を示し、後者は作業用道路を示している。当遺跡の場合には、畑の排水を目的とした溝となっているが、機能を停止して時間が経過した例では、還元が進んで暗褐色に近い有機土が堆積していた。本文ではこれらを総称して二線引と表現している。

1) 溝状遺構の詳細

1-1K（深さ18cm）は、1-3Jを取り巻く溝に、1-2K（深さ15cm）は1-5Jの排水溝になる可能性がある。1-3～6K（深さ8・14・16cm）からは、少量の土師器が出土している。1-5Kは、1-7Hの約1m北に位置し、その棟にほぼ平行している。1-7K（深さ5cm）の覆土は暗褐色であったが、二線引にほぼ平行していることから、近現代の遺構と考えた。ちなみに、断面形態は逆台形を呈している。2-2K（深さ7cm）は、2-3Jを取り巻くかのように位置している。また、3-1K（深さ6cm）も類似しているともいえるが、土師器片、白玉や小型の礫がわずかに出土しており、土坑である可能性が高い。2-3K（深さ5cm）も土坑が繋がっているものと考えた方が良いかもしれない。2-3Kからは、弥生時代後期の台付甕片や拳大の礫がわずかに出土しており、2-11Jを避けるかのように位置している。2-4K（深さ22cm）からは、弥生土器片少量と、小型の礫が多く出土している。

2) 掘立柱建物跡の詳細

遺構名	1－1 H	図版番号	10、52	平面形態	総柱・近接棟持柱(両面)
規模(桁×梁)	519×412・3間×2間	棟方位	S－71°－W	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	隅丸方形	柱穴規模(大きさ×深さ)	81×76	柱痕規模	28
重複関係	1－6 J 排水溝(弥生後期)→1－3 D(古墳中期)→当遺構。			位置	C－4 グリッド
観察	東側は二線引により深く攪乱されている。総柱建物の中では大型であり、「ロ」字状配置建物群の東側に位置し、2－4 Hとはほぼ対称の位置関係にあり形態も類似している。西側では2個の柱穴が重複しており、建て替えによるものと考えられる。柱穴底面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がり、断面形態は逆台形を呈している。2－ロ・ニPを除く柱穴下層からは拳大の基礎石や根巻石が多量に確認されている。柱穴内からは古墳時代中期の須恵器片が出土している。				

遺構名	1－2 H	図版番号	17、18、52	平面形態	掘立柱・庇
規模(桁×梁)	689×429・4間×3間	棟方位	S－68°－W	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	83×43	柱痕規模	22
重複関係	1－1 D(古墳時代中期)、1－5 Hと重複している。			位置	D－6グリッド
観察	二線引により北東隅柱穴や西梁側柱穴が深く攪乱されている。「ロ」字状配置建物群の南側に位置し、2－5 Hとは対称の位置関係にあり形態も類似している。約1 m南側には柱穴列が存在し、その柱穴規模は34cm×21cmと側柱穴より小さくて浅く、庇柱穴になると思われる(柱痕規模は12cm)。側柱穴は底面が比較的平坦で断面形態は逆台形に近く、隅柱穴は深さが67cmと他の側柱穴より深い。1－イ P 中層からは拳大の礫が多量に出土している。				

遺構名	1－3 H	図版番号	5、11、52	平面形態	総柱・近接棟持柱(両面)
規模(桁×梁)	347×377・2間×2間	棟方位	S－66°－W(変換)	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	(82)×(70)	柱痕規模	22
重複関係	当遺構→1－10D(中世)。			位置	E－3グリッド
観察	茶園の改植により遺構発见面までかなり深く攪乱されている。「ロ」字状配置建物群の北側東端に位置し、2－1・2 Hと平面形態は類似している。棟持柱穴は柱筋より外側にずれ、棟通りの柱穴は通常より1個多く、桁行を3間に分けている。また、その屋内柱穴は側柱穴よりやや浅い(推定で62cm)。柱穴底面には凹凸があり、柱痕の位置が深い傾向にある。3－ロPは2段掘状になっているが、柱穴断面形態はU字形となっているものが多い。				

遺構名	1－4 H	図版番号	9	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	218×212以上・1間×1間以上	棟方位	S－26°－W？	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	31×24	柱痕規模	14
重複関係				位置	A－4 グリッド
観察	柱間が広く、他の類例から推測すると1間×1間の建物になる可能性が高いと思われる。東端の柱穴中層からは土師器の底部（壺？）が1点出土している。				

遺構名	1-5 H	図版番号	17、52	平面形態	総柱
規模(桁×梁)	396×343・2間×2間	棟方位	S-85°-E(変換)	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	楕円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	52×28	柱痕規模	22
重複関係	1-ハPが1-2Hと接し、2-ハPは土坑を切っている。			位置	C-5グリッド
観察	総柱建物としては柱穴が浅く、1-ロPはとくに小規模である。桁側と梁側の中央柱穴の柱痕は柱筋の内側に接している。3-ハP中層からは根巻石や古墳時代中期の須恵器甕口縁部片が2点出土している。				

遺構名	1-6 H	図版番号	11、18、52	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	384×383・3間×1間	棟方位	S-66°-E	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	34×24(深浅様々)	柱痕規模	17
重複関係	1-9Dと重複、1-6J排水溝(弥生時代後期)→当遺構。			位置	E-5グリッド
観察	桁側の柱間に対して梁側の柱間がかなり広い。2-イPの南側に連続するかのような柱穴が存在するが、対応する柱穴は確認されなかった。2-ハP下層からは拳大の礫が2点出土した。				

遺構名	1-7 H	図版番号	3、4、9、10、52	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	545×436・4間×3間	棟方位	S-78°-W	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	30×30	柱痕規模	17
重複関係	北東部で1-4Kと重複している。			位置	C-3グリッド
観察	中央部を二線引により深く攪乱され、確認できなかった柱穴がある。北桁側の柱穴は柱筋の外側に接するように位置している。確認できた柱痕は柱穴の壁際に寄っている。東梁側の約1m東側に柱穴列が存在し、庇柱穴になる可能性もある。				

遺構名	1-8 H	図版番号	4、10、52	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	344×306・2間×1間	棟方位	S-69°-W	柱穴確認状況	困難
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	25×26	柱痕規模	不明
重複関係	北東隅柱穴が1-5Jと接している。			位置	C-3グリッド
観察	東梁側中央部に小穴が存在するが、かなり浅く、対応する柱穴が確認されなかったことから当遺構には関係しないものと思われる。				

遺構名	1-9 H	図版番号	11、52	平面形態	掘立柱(竪穴住居跡?)
規模(桁×梁)	218×190・1間×1間	棟方位	S-85°-W	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	楕円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	35×27	柱痕規模	不明
重複関係				位置	E-4グリッド
観察	南東隅柱穴がやや外側に位置しており、歪な平面形態となっている。				

遺構名	2-1 H	図版番号	12、13、52	平面形態	総柱・近接棟持柱(両面?)
規模(桁×梁)	422×452・2間×2間	棟方位	S-67°-W(変換)	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	(86)×(79)	柱痕規模	23
重複関係	2-8J(弥生後期)→2-5J排水溝(弥生後期)→当遺構。			位置	G-4グリッド

観察	「ロ」字状配置建物群の北側西端に位置し、東側の1-3Hや2-2Hと平面形態は類似している。南梁側柱穴を残して、他は茶園の改植により約30cm削平され、中央部は二線引により深く攪乱されている。棟通りの柱穴は通常より1個多く、桁行を3間に分けている。また、北側の棟持柱は柱筋の外側に接するように位置している。柱穴の底面は凹凸が著しいものもあるが、多くの柱穴断面形態はU字形を呈している。		
----	---	--	--

遺構名	2-2H	図版番号	12、52	平面形態	総柱・近接棟持柱(両面?)
規模(桁×梁)	411×443・2間×2間	棟方位	S-71°-W(変換)	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形・楕円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	(95)×(75)	柱痕規模	22
重複関係				位置	F-4グリッド
観察	「ロ」字状配置建物群の北側に位置し、平面形態は1-3Hや2-1Hと類似している。南梁側柱穴を残して、他は茶園の改植により約30cm削平され、中央部は二線引により深く攪乱されている。棟通りの柱穴は通常より1個多く、桁行を3間に分けている。また、北側の棟持柱は柱筋の外側に接するように位置している。柱穴底面は凹凸が著しく、深い位置に柱痕が位置する傾向がある。3-IP中層からは古墳時代中期の土師器高環の脚部が1点出土している。				

遺構名	2-3H	図版番号	6、11、12、52	平面形態	総柱・近接棟持柱(片面?)
規模(桁×梁)	352×351・2間×2間	棟方位	S-65°-W(変換)	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	(88)×(76)	柱痕規模	22
重複関係				位置	F-3グリッド
観察	「ロ」字状配置建物群の北側に配置され、2-2Hの東側に位置している。上層部分の二線引により深く攪乱されている。平面形態は東西に並んだ1-3Hや2-1・2Hと異なり、通常の「田」字形の総柱建物跡であり、規模もそれらに比してやや小型である。3-HP中層からは古墳時代中期の土師器高環の脚部が1点出土している。柱穴底面は凹凸が著しいが、柱穴断面形態はおおよそU字形を呈している。				

遺構名	2-4H	図版番号	20、52、53	平面形態	総柱・近接棟持柱
規模(桁×梁)	523×393・3間×2間	棟方位	S-68°-W	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	隅丸方形	柱穴規模(大きさ×深さ)	(87)×(81)	柱痕規模	25
重複関係				位置	G-6グリッド
観察	「ロ」字状配置建物群の西側に位置し、1-1Hとはほぼ対称の位置関係にあり、平面形態も類似している。上層部分は茶園の改植により攪乱されている。柱穴の壁面は垂直気味に立ち上り、底面は平坦で、断面形態は逆台形を呈している。また、1-IPは2段掘り状になっている。隅柱穴は1-IPを除いて基礎石が置かれ、その他の柱穴では、2-IPに基礎石が、2-ロPや3-HPに根巻石が認められている。3-ロP上層からは石製模造品(勾玉1点・白玉1点)が出土し、勾玉は柱痕内より発見されている。3-HP中層からは古墳時代中期の須恵器甕胴部片や白玉が各1点ずつ出土し、その他の柱穴内からも同期の須恵器片が比較的多く出土している。				

遺構名	2-5H	図版番号	18、19、53	平面形態	掘立柱・庇
規模(桁×梁)	630×414・4間×3間	棟方位	S-68°-W	柱穴確認状況	容易

柱穴形態 円形	柱穴規模(大きさ×深さ) (83)×(64)	柱痕規模 24
重複関係		位置 E-6グリッド
観察	「ロ」字状配置建物群の南側に位置し、1-2Hとは対称の位置関係にあり、形態も類似している。上層部分は茶園の改植により深く攪乱を受け、東側は二線引によりさらに深く攪乱されている。約1m南側には柱穴列が存在し、その柱穴規模は39cm×(36)cmと、側柱穴より小さくて浅く、底柱穴になると思われる。また、その柱痕径は18cmである。側柱穴については底面の凹凸が著しいが、断面形態はほぼU字形を呈している。また、梁側の隅柱穴を除く側柱穴は、深さが(48)cmとやや浅い。	

遺構名 2-6H	図版番号 11、12、19、53	平面形態 掘立柱
規模(桁×梁) 不明	棟方位 S-86°-W	柱穴確認状況 困難
柱穴形態 円形	柱穴規模(大きさ×深さ) 30×23	柱痕規模 不明
重複関係 2-11J(弥生時代後期)→当遺構、2-13Hと重複している。	位置 E-5グリッド	
観察	南東部分が二線引や茶園の改植により深く攪乱を受けているため規模は不明であるが、柱穴規模から判断すると、とくに大型の建物になるとは思われない。	

遺構名 2-7H	図版番号 20、28、53	平面形態 掘立柱
規模(桁×梁) 不明	棟方位 S-76°-E	柱穴確認状況 普通
柱穴形態 円形	柱穴規模(大きさ×深さ) 30×26	柱痕規模 18
重複関係 南側で2-9Hと重複している。	位置 H-7グリッド	
観察	西側部分の多くが茶園の改植により深く攪乱され、規模など不明な点が多いが、柱穴規模から判断すると、とくに大型の建物になるとは思われない。	

遺構名 2-8H	図版番号 28、53	平面形態 掘立柱
規模(桁×梁) 1辺228・2間	棟方位 S-84°-W	柱穴確認状況 普通
柱穴形態 円形	柱穴規模(大きさ×深さ) 32×23	柱痕規模 不明
重複関係 2-11D(弥生時代後期)・9Hと重複している。	位置 H-7グリッド	
観察	西側部分は茶園の改植により深く攪乱され、規模など不明な点が多い。東側の柱穴は2-9Hの柱穴と重複しており、その新旧関係は不明であるが、建て替えられている可能性がある。	

遺構名 2-9H	図版番号 28、53	平面形態 掘立柱
規模(桁×梁) 1辺428・3間	棟方位 S-84°-W	柱穴確認状況 普通
柱穴形態 円形	柱穴規模(大きさ×深さ) 37×22	柱痕規模 16
重複関係 2-10・11D(弥生時代後期)・8H(2-8H参照)と重複。	位置 H-7グリッド	
観察	西側部分は茶園の改植により深く攪乱されており、規模など不明な点が多い。	

遺構名 2-10H	図版番号 27、28、53	平面形態 掘立柱
規模(桁×梁) 413×357・2間×1間	棟方位 S-75°-W	柱穴確認状況 容易
柱穴形態 円形	柱穴規模(大きさ×深さ) 33×32	柱痕規模 不明
重複関係 南西部分で2-4Kと重複している。	位置 G-8グリッド	

観察	中央部は二線引により深く攪乱されている。2-4 K出土土器が南西隅柱穴に接するように出土していることから、2-4 Kよりも新しい可能性がある。
----	---

遺構名	2-11H	図版番号	21、53	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	431×364・2間×1間	棟方位	S-85°-W(変換)	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	58×41	柱痕規模	23
重複関係	2-14・16D・22H→当遺構。	位置	H-6グリッド		
観察	中央部は二線引により深く攪乱されており、確実な平面形態は不明であるが、南梁側の中央柱穴が確認されなかったことから、梁間は1間の可能性が高い。南西隅柱穴については他の柱穴より小型で浅い。また、上層から古墳時代中期の高坏脚部が1点出土している。側柱穴の断面形態はほぼU字形を呈している。				

遺構名	2-12H	図版番号	20、53	平面形態	総柱・近接棟持柱
規模(桁×梁)	334×315・2間×2間	棟方位	S-81°-W	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	隅丸方形	柱穴規模(大きさ×深さ)	65×55	柱痕規模	23
重複関係	2-18・23Hと重複している。	位置	H-6グリッド		
観察	東側と南側は二線引により深く攪乱されている。棟持柱は柱筋の外側に接するように位置している。柱穴は壁面の崩落により平面形態が不整円形になっているものもあるが、ほとんどは隅丸方形であったと考えて良い。柱穴底面は平坦で、断面形態は逆台形を呈するものが多いが、一部、2段掘状になっているものがある。1-ロP中層からは須恵器甕胴部片が1点出土している。				

遺構名	2-13H	図版番号	12、18、19、53	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	不明	棟方位	S-69°-E	柱穴確認状況	困難
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	34×23	柱痕規模	17
重複関係	2-11 J (弥生時代後期)・7 D・6 Hと重複している。	位置	E-5グリッド		
観察	東側と南側を二線引により深く攪乱されており、平面形態など不明な点が多い。				

遺構名	2-14H	図版番号	19、53	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	東西1辺(510)・4間	棟方位	S-84°-W	柱穴確認状況	困難
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	33×19	柱痕規模	18
重複関係	2-3 K (弥生時代後期)・15・16Hと重複している。	位置	E-6グリッド		
観察	南側は深く攪乱されており、規模などは不明である。北西隅柱穴は、おそらく2-16Hの南東隅柱穴と重複していると考えられ、北側の隅柱穴を除く側柱穴は柱筋の外側に位置している。				

遺構名	2-15H	図版番号	12、19、53	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	296×239・2間×1間	棟方位	S-88°-W(変換)	柱穴確認状況	困難
柱穴形態	円形・楕円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	50×36	柱痕規模	18
重複関係	南側で2-14Hと重複している。	位置	E-6グリッド		
観察	柱穴平面形態は略円形で、底面は比較的平坦であり、断面形態は逆台形を呈している。				

遺構名	2-16H	図版番号	12、13、19、20、53	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	295×267・2間×1間	棟方位	S-86°-W(変換)	柱穴確認状況	困難
柱穴形態	楕円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	51×42	柱痕規模	19
重複関係	南東隅柱穴は2-14Hと重複している。			位置	E-6グリッド
観察	西側を二線引により攪乱されている。柱穴平面形態は略円形で、断面形態は逆台形を呈している。				

遺構名	2-17H	図版番号	13、20、21、53	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	514×348・3間×1間	棟方位	S-85°-W(変換)	柱穴確認状況	困難
柱穴形態	楕円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	49×38	柱痕規模	17
重複関係				位置	H-5グリッド
観察	南西隅柱穴を除いて、二線引や茶園の改植により深く攪乱されている。柱穴断面形態は逆台形を呈しており、北東隅柱穴下層からは弥生時代後期の壺肩部片が1点出土している。				

遺構名	2-18H	図版番号	20、21、53	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	南北1辺388・3間	棟方位	S-83°-W	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	32×24	柱痕規模	不明
重複関係	南側で2-12・23Hと重複している。			位置	H-6グリッド
観察	攪乱により東側の柱穴が明確には捉えられなかったが、東西の柱間数は3間以上であろう。				

遺構名	2-19H	図版番号	15、53	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	306×279・3間×1間	棟方位	S-83°-W(変換)	柱穴確認状況	困難
柱穴形態	楕円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	60×42	柱痕規模	16
重複関係				位置	J-5グリッド
観察	西側は二線引により深く攪乱を受けている。柱穴断面形態は逆台形を呈している。				

遺構名	2-20H	図版番号	21、22、53	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	407×(305)・3間×1間	棟方位	S-85°-E(変換)	柱穴確認状況	困難
柱穴形態	方形・楕円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	64×47	柱痕規模	20
重複関係	2-19(弥生時代後期)・22(古墳時代中期)・20・21Dと重複。			位置	I-6グリッド
観察	西側は二線引により深く攪乱されており、東側に対応する柱穴がやや不明確であり、また、柱穴形態についても方形のものと楕円形のものが混在している。柱穴断面形態については、底面が平坦な逆台形を呈している。				

遺構名	2-21H	図版番号	21、54	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	454×363・梁間3間	棟方位	S-79°-W	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	29×26	柱痕規模	14
重複関係	南西部分で2-28・30Dと重複している。			位置	I-5グリッド
観察	中央部分は二線引により深く攪乱されており、また、南桁側の柱穴の多くが確認されなかったため、規模などにやや不安要素がある。				

遺構名	2-22H	図版番号	21、54	平面形態	掘立柱(総柱?)
規模(桁×梁)	313×334・2間×1間	棟方位	S-78°-W(変換)	柱穴確認状況	困難
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	67×50	柱痕規模	18
重複関係	当遺構→2-11H・14・17Dと重複している。			位置	H-6グリッド
観察	中央部分を二線引により深く攪乱されており、また、南西隅柱穴が確認されなかったことにより、形態など不確定な点も多い。北東部分の柱穴は重複しており、建て替えにより棟方位がやや西へずれたものと思われる。柱穴断面形態は逆台形を呈している。				

遺構名	2-23H	図版番号	20、21	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	不明	棟方位	S-49°-W	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	28×30	柱痕規模	14
重複関係	2-12・18Hと重複している。			位置	H-6グリッド
観察	南側を二線引により深く攪乱されており、形態や規模など不明な点が多い。				

遺構名	2-24H	図版番号	13	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	1辺280・2間	棟方位	S-81°-W	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	24×30	柱痕規模	不明
重複関係				位置	H-5グリッド
観察	南側を二線引や茶園の改植により深く攪乱されており不明な点が多いが、柱穴規模は小さくて浅く、それほど大型の建物になるとは思われない。				

遺構名	3-1H	図版番号	32、40、41、54	平面形態	掘立柱・屋内棟持柱
規模(桁×梁)	834×692・7間×6間	棟方位	S-58°-W	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形・方形	柱穴規模(大きさ×深さ)	39×45	柱痕規模	14
重複関係	北側で3-24H底?と重複している。			位置	M-9グリッド
観察	3区「コ」字状配置建物群の北側中央部に位置している。柱間は比較的狭く、大型の建物にしては側柱穴の大きさが小さい。柱穴形態はほとんどが円形であるが、棟通りの柱穴に関しては方形に近く、また、屋内棟持柱の柱痕形態は方形(1辺19cm)を呈している。屋内棟持柱穴の規模は51cm×70cmと側柱穴よりも大きくて深く、西側の柱穴中層から白玉が1点発見され、東側の柱穴下層からは拳大の礫が5点出土している。柱穴壁面は垂直気味に立ち上がり、断面形態は逆台形を呈している。				

遺構名	3-2H	図版番号	40、41、47、54	平面形態	掘立柱・庇?
規模(桁×梁)	722×620・5間×4間	棟方位	S-54°-W(変換)	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	42×45	柱痕規模	15
重複関係	西側で4-仮16D(古墳時代中期)と重複している。			位置	M-10グリッド
観察	3区「コ」字状配置建物群の西側に位置している。中央部は二線引により深く攪乱され、西側は緩やかな斜面地にあたり、そのため南隅柱穴は確認されなかった。また、北隅柱穴は深さが17cmと浅く、その他の隅柱穴についてもやや浅い傾向がある。柱穴断面形態は逆台形を呈しているものが多い。約1m南側には梁側の柱穴数より1個少ない柱穴列が確認されている。それらの柱穴規				

模は47cm×69cmで、庇柱穴になる可能性がある。

遺構名	3-3 H	図版番号	40、47、54	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	664×590・5間×4間	棟方位	S-54°-W(変換)	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	(36)×(35)	柱痕規模	23
重複関係					位置 M-11グリッド
観察	3区「コ」字状配置建物群の西側に位置している。中央部は二線引により深く攪乱されているため、梁側の柱穴の状態や屋内棟持柱穴の有無など不明な点がある。東桁側の側柱筋は3-2 Hの柱筋に揃えられている。				

遺構名	3-4 H	図版番号	31、32、39、54	平面形態	掘立柱・屋内棟持柱
規模(桁×梁)	813×619・5間×4間	棟方位	S-51°-W(変換)	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	46×57	柱痕規模	16
重複関係	北西部で3-28Hと重複している。				位置 L-9グリッド
観察	3区「コ」字状配置建物群の東側に位置している。東側上層部は二線引により深く攪乱されている。平面形態は3-5・13・22Hと類似し、西桁側の側柱筋は3-5 Hの柱筋と一致している。北梁側の隅柱穴を除く側柱痕は柱筋の外側に接するように位置している。柱穴断面形態は逆台形を呈している。屋内棟持柱穴規模は61cm×61cmと側柱穴より大きくて深く、また、平面形態は鍵穴状を呈しており、柱が抜き取られている可能性がある。				

遺構名	3-5 H	図版番号	38、39、54、55	平面形態	掘立柱・屋内棟持柱・庇?
規模(桁×梁)	701×582・5間×4間	棟方位	S-53°-W(変換)	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	47×37	柱痕規模	15
重複関係	3-6・7 Hと重複している。				位置 K-9グリッド
観察	3区「コ」字状配置建物群の東側に位置し、身舎部分の平面形態は3-4・13・22Hに類似している。東側と南側の上層部分は二線引により深く攪乱されており、一部確認されなかった柱穴もある。西桁側の側柱筋は3-4 Hの柱筋と一致している。柱穴断面形態は逆台形を呈しているものが多い。屋内棟持柱穴の深さは48cmと側柱穴よりやや深く、平面形態は北側のものが「8」字状を呈し、南側のものが長方形を呈している。これらは、3-4 Hと同様に柱が抜き取られている可能性がある。また、南側の棟持柱穴は3-7 Hの西側隅柱穴と重複しており、新旧関係は不明であるが、棟持柱穴の方が先に確認されている。約1.5m南側には柱穴列が存在し、庇柱穴になる可能性もある。その柱穴規模は32cm×21cmと側柱穴よりやや浅い。				

遺構名	3-6 H	図版番号	31、39、55	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	449×342・2間×2間	棟方位	S-51°-W(変換)	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	57×40	柱痕規模	20
重複関係	3-5 Hと重複している。				位置 K-9グリッド
観察	西側を除き二線引により深く攪乱されている。西桁側の側柱筋は3-5 Hの棟通りと3-6 Hの側柱筋とほぼ一致している。柱穴断面形態は逆台形を呈しているものが多い。				

遺構名	3-7H	図版番号	38、39、55	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	472×378・3間×2間	棟方位	S-53°-W(変換)	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	44×40	柱痕規模	17
重複関係	3-5Hと重複している。(3-5H参照)			位置	K-10グリッド
観察	大部分は二線引により深く攪乱されている。西桁側の側柱筋は3-5Hの棟通りと3-6Hの側柱筋とほぼ一致している。柱穴断面形態は逆台形を呈しているものが多い。				

遺構名	3-8H	図版番号	38、55	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	467×274・梁間2間	棟方位	S-56°-W	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	35×16	柱痕規模	15
重複関係				位置	J-10グリッド
観察	西側を除き深く攪乱されているため、桁行の柱間数など不明な点も多い。				

遺構名	3-9H	図版番号	32、33、55	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	444×280・2間×1間	棟方位	S-64°-W	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	42×40	柱痕規模	13
重複関係				位置	M-8グリッド
観察	北桁側の柱筋に平行して3-26Dが位置している。				

遺構名	3-10H	図版番号	40、41、55	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	560×360・5間×2間	棟方位	S-61°-W	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	円形・方形	柱穴規模(大きさ×深さ)	33×36	柱痕規模	12
重複関係	4-6D(古墳時代中期)・2Hと重複している。			位置	N-10グリッド
観察	中央部は4-6Dと重複し、東側と南側は二線引により攪乱されているため不明な点が多い。				

遺構名	3-11H	図版番号	39、40、55	平面形態	掘立柱・近接棟持柱
規模(桁×梁)	562×403・3間×2間	棟方位	S-64°-W	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	52×42	柱痕規模	18
重複関係	3-31H・25Dと重複している。			位置	M-10グリッド
観察	3区「コ」字状配置建物群の中央部に位置しているが、他の建物とは棟方位をやや異にしている。隅柱穴は他の柱穴よりやや深い傾向にある。棟持柱は柱筋の外側に接するように位置している。				

遺構名	3-12H	図版番号	24、32、55	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	242×324・2間×1間	棟方位	S-46°-W	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	30×26	柱痕規模	11
重複関係				位置	M-7グリッド
観察	桁側の柱間に比して梁間がやや広い。				

遺構名	3-13H	図版番号	30、55	平面形態	掘立柱・屋内棟持柱
規模(桁×梁)	772×629・5間×4間	棟方位	S-67°-W	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	42×38	柱痕規模	17
重複関係	3-14・23Hと重複している。			位置	J-8グリッド
観察	中央部を二線引により深く攪乱されている。平面形態は3-4・5・22Hと類似している。棟通りの柱穴平面形態は方形に近いものがある。柱穴の深さについては深浅様々であるが、とくに屋内棟持柱穴が深いということでもない。1-ロ・ホP下層からは拳大の礫が出土している。				

遺構名	3-14H	図版番号	29、30、55	平面形態	掘立柱・庇？
規模(桁×梁)	636×361・3間×2間	棟方位	S-88°-W	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	方形	柱穴規模(大きさ×深さ)	63×42	柱痕規模	不明
重複関係	3-6J(弥生後期)→3-22H→当遺構。3-13H・13・27Dと重複。			位置	I-8グリッド
観察	中央部を二線引により深く攪乱されている。約1.7m北側に柱穴列を伴い、両端の柱穴がやや浅い点を除けば、形態や規模(61cm×43cm)など側柱穴と大差はなく、北側に対面している3-21Hに関連する施設の可能性もある。柱穴は底面が比較的平坦で、断面形態は逆台形を呈している。				

遺構名	3-15H	図版番号	29、55	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	474×387・2間×2間	棟方位	S-81°-W	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	53×47	柱痕規模	24
重複関係				位置	H-8グリッド
観察	東側上層部は深く攪乱されている。1-ロP、2-イ・ロP下層からは拳大の礫が出土し、とくに2-ハP下層からは根巻石が多量に出土している。				

遺構名	3-16H	図版番号	22、23、55	平面形態	掘立柱(総柱？)
規模(桁×梁)	375×328・2間×1間	棟方位	S-75°-W	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形・長方形	柱穴規模(大きさ×深さ)	47×56	柱痕規模	22
重複関係				位置	K-6グリッド
観察	中央部を二線引により深く攪乱されており、平面形態など不明な点が多く、中央部の小穴も当遺構に伴うものであるかもしれない、柱穴形態については長方形のものが混在している。				

遺構名	3-17H	図版番号	22、56	平面形態	総柱
規模(桁×梁)	東西341・2間×南北(2)間	棟方位	S-88°-W	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	楕円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	44×40	柱痕規模	19
重複関係	北側で3-26Hと重複している。			位置	J-6グリッド
観察	北側と東側を二線引により深く攪乱されており、規模など不明な点が多い。柱穴断面形態は逆台形を呈している。				

遺構名	3-18H	図版番号	22、30、56	平面形態	掘立柱・独立棟持柱
規模(桁×梁)	359×482・3間×1間	棟方位	S-73°-W	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	40×42	柱痕規模	16

重複関係	東側で3-19Hと重複している。	位置	K-7グリッド
観察	中央部を二線引により深く攪乱されている。柱穴の形態や規模は様々で、独立棟持柱穴は深さ32cmと側柱穴より浅い。また、桁側の柱間に比して梁間がやや広い。		

遺構名	3-19H	図版番号	21、22、56	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	743×448・3間×1間	棟方位	S-73°-W	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	38×43	柱痕規模	16
重複関係	3-18・20・21H・28・29Dと重複している。			位置	J-7グリッド
観察	中央部を深く攪乱されている。桁側の柱間に比して、梁間がやや広い。				

遺構名	3-20H	図版番号	22、30、56	平面形態	掘立柱・屋内棟持柱
規模(桁×梁)	534×436・3間×3間	棟方位	S-71°-W(変換)	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	43×40	柱痕規模	17
重複関係	3-19・21H・28Dと重複している。			位置	J-7グリッド
観察	多くの部分が攪乱され、東側で3-21Hと重複しているが、当遺構の方が後で確認された。平面形態は3-28Hと類似している。棟持柱穴の規模(42cm×41cm)は側柱穴と大差はない。				

遺構名	3-21H	図版番号	21、22、56	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	495×264・3間×2間	棟方位	S-88°-W	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	方形・長方形	柱穴規模(大きさ×深さ)	49×37	柱痕規模	17
重複関係	3-19・20・32H・28・29Dと重複している。(3-20H参照)			位置	I-7グリッド
観察	東側と西側を深く攪乱されている。北桁側の柱穴の平面形態は長方形を呈しており、調査当時は2個の柱穴が重複しているものと思われたが、1個の可能性もありうる。柱穴底面は比較的平坦で、断面形態は逆台形を呈している。				

遺構名	3-22H	図版番号	29、56	平面形態	掘立柱・屋内棟持柱
規模(桁×梁)	710×635・5間×4間	棟方位	S-70°-W(変換)	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	45×41	柱痕規模	18
重複関係	3-6J→当遺構。3-14・32H・13・27Dと重複。(3-14H参照)			位置	I-7グリッド
観察	東側と西側を深く攪乱されており、東桁側の柱穴のほとんどは確認されなかった。平面形態は3-4・5・13Hと類似している。屋内棟持柱穴の形態は楕円形を呈し、規模は66cm×48cmと側柱穴より大きくてやや深い。北東隅柱穴下層から多量の炭化物が確認された。				

遺構名	3-23H	図版番号	30、56	平面形態	掘立柱・庇
規模(桁×梁)	549×389・4間×3間	棟方位	S-79°-W	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	60×56	柱痕規模	20
重複関係	3-13Hと重複している。			位置	J-8グリッド
観察	中央部を二線引により深く攪乱されている。北側柱穴の覆土は化学薬品により変質しており、その形態などに明確さを欠く。建物構造については庇付建物と考えて記述しているが、身舎の西側柱穴が他の側柱穴より小さくて浅い(32cm×14cm)。庇柱穴は身舎の桁側柱穴より1個分少なく、規				

模は39cm×31cmと側柱穴より小さくて浅く、はPからは白玉が1点出土している。4-イP上層からは奈良時代の須恵器坏底部片が1点出土し、4-ニP下層からは拳大の礫が2点出土している。1-イPや4-ロ・ホPは柱穴が重複しているものと考えられ、建て替えられている可能性もある。

遺構名	3-24H	図版番号	33、40、41、56、57	平面形態	掘立柱・屋内棟持柱
規模(桁×梁)	662×540・6間×5間	棟方位	S-59°-W(変換)	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	31×34	柱痕規模	14
重複関係	南側の柱穴列が3-1H、4-10Dと重複している。			位置	H-9グリッド
観察	西側と南側を深く攪乱されており、南梁側の柱穴の多くが確認されなかった。また、1.6m南側には柱穴列が確認され、その柱穴の規模は40cm×31cm(柱痕径19cm)で、側柱穴より大きい。側柱の柱間は他の遺構に比して狭く、棟持柱穴の規模は43cm×42cmと側柱穴より大きくて深い。				

遺構名	3-25H	図版番号	15、22、57	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	437×213・3間×1間	棟方位	S-46°-E	柱穴確認状況	困難
柱穴形態	楕円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	48×48	柱痕規模	16
重複関係				位置	J-5グリッド
観察	柱穴断面形は逆台形を呈しており、段掘り状をなしているものもある。				

遺構名	3-26H	図版番号	22、57	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	(520)×(496)・4間×4間	棟方位	S-61°-E	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	30×23	柱痕規模	14
重複関係	南側で3-17Hと重複している。			位置	J-6グリッド
観察	東側と西側を深く攪乱されており、形態など不明瞭な点がある。				

遺構名	3-27H	図版番号	31、32、57	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	不明	棟方位	S-42°-W	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	30×29	柱痕規模	15
重複関係	3-10・19D(古墳時代中期)・28・29Hと重複している。			位置	L-8グリッド
観察	攪乱や土坑との重複により、形態など不明な点が多い。柱間は他の遺構に比して狭い。				

遺構名	3-28H	図版番号	31、32、40、57	平面形態	掘立柱・屋内棟持柱
規模(桁×梁)	509×456・3間×3間	棟方位	S-54°-W	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	42×45	柱痕規模	18
重複関係	3-4・27・29Hと重複している。			位置	L-9グリッド
観察	西側を二線引により攪乱されている。平面形態は3-20Hと類似している。棟持柱穴の規模は32cm×40cmで、側柱穴よりやや小規模である。				

遺構名	3-29H	図版番号	31、32、57	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	南北432・3間	棟方位	S-58°-W	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	39×41	柱痕規模	16

≡重複関係	3-27・28Hと重複している。	位置	L-8グリッド
≡観察	西側を二線引により深く攪乱されており、平面形態など不明な点が多い。北側の3-10・19 ○(古墳時代中期)は当遺構を避けるかのように位置している。柱穴平面形態は方形に近いものも ある。		

≡遺構名	3-30H	図版番号	24、57	平面形態	掘立柱(竪穴住居跡?)
≡規模(桁×梁)	326×363・1間×1間	棟方位	S-50°-W	柱穴確認状況	普通
≡主穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	38×57	柱痕規模	24
≡重複関係				位置	M-6グリッド
≡観察	緩斜面に位置し、上層部は厚く暗褐色土が堆積していたため不明確であるが、竪穴住居跡で あった可能性もある。西側の柱穴底面からは拳大の礫が2点出土している。				

≡遺構名	3-31H	図版番号	40、57	平面形態	掘立柱?
≡規模(桁×梁)	不明	棟方位	S-49°-W	柱穴確認状況	困難
≡主穴形態	楕円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	48×26	柱痕規模	20
≡重複関係	3-11H・25Dと重複している。			位置	M-10グリッド
≡観察	掘立柱建物跡と仮定して何度かプラン確認を行なったが、南側の柱穴は確認されなかった。				

≡遺構名	3-32H	図版番号	21、29、57	平面形態	掘立柱
≡規模(桁×梁)	650×450・3間×1間	棟方位	S-78°-W	柱穴確認状況	容易
≡主穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	38×38	柱痕規模	14
≡重複関係	3-21・22Hと重複している。			位置	I-7グリッド
≡観察	二線引により深く攪乱されている部分が多い。桁側の柱間に比して梁間が広い。北西隅柱穴 下層からは古墳時代中期の須恵器甕の破片が出土している。				

≡遺構名	4-1H	図版番号	41、42、57	平面形態	掘立柱
≡規模(桁×梁)	637×432・3間×3間	棟方位	S-73°-W	柱穴確認状況	容易
≡主穴形態	楕円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	77×31	柱痕規模	22
≡重複関係				位置	O-10グリッド
≡観察	東側を二線引により深く攪乱されている。柱穴底面は凹凸が著しく(段掘り状)、隅柱穴は深 さが43cmとやや深い。2-ニP底面からは拳大の礫が1点出土している。				

≡遺構名	4-2H	図版番号	41、57	平面形態	掘立柱
≡規模(桁×梁)	758×410・4間×3間	棟方位	S-84°-W	柱穴確認状況	容易
≡主穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	56×50	柱痕規模	不明
≡重複関係	4-4・6D・3P(古墳時代中期)、3-10Hと重複している。			位置	N-10グリッド
≡観察	東側と南側を二線引により攪乱されている。南桁側の隅柱穴を除く側柱穴は柱筋の外側に接 するように位置している。1-ニ・ホPについては、2個の柱穴が重複しているかのような状況で、 北側の柱穴は段掘り状を呈しているものがある。柱穴内からは古墳時代中期の須恵器片が出土して いる。北西コーナー付近に位置している4-3Pは深さ14cmで、白玉が9点発見されている。				

遺構名	4-3 H	図版番号	43、57	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	388×316・2間×1間	棟方位	S-70°-W(変換)	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	42×47	柱痕規模	18
重複関係	4-4・8 Hと重複している。			位置	Q-10グリッド
観察	桁側の柱間は広狭が著しい。				

遺構名	4-4 H	図版番号	42、43、49、50、57、58	平面形態	掘立柱・屋内棟持柱・庇?
規模(桁×梁)	890×749・6間×5間	棟方位	S-89°-E	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	50×56	柱痕規模	18
重複関係	4-3・8 Hと重複し、南側では4-5 H確認後に当遺構を発見。			位置	P-11グリッド
観察	東側と西側を二線引により攪乱されている。4区「コ」字状配置建物群の北側中央部に位置している。東梁側の柱穴は2個の柱穴が重複しているかのような状況を呈しており、その1.4m東側には4-3 Dに平行しているかのように柱穴列が存在している。その柱穴の規模は42cm×49cmで、側柱穴の規模と大差はない。棟持柱穴の規模は70cm×29cmで側柱穴より大きいが浅く、平面形態も楕円形と異質である。また、西側の棟持柱穴下層からは白玉数点が、3-トPからは白玉1点が出土している。南西コーナー付近からは焼土や長方形の小穴が確認されているが、これらは別の遺構と考えられる。				

遺構名	4-5 H	図版番号	49、58	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	(508)×360・3間×2間	棟方位	S-87°-W(変換)	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	不明	柱穴規模(大きさ×深さ)	(60)×59	柱痕規模	不明
重複関係	4-6 Hと重複、当遺構確認後に4-4 Hを発見。			位置	P-11グリッド
観察	柱穴形態は鍵穴状を呈しており、柱が抜き取られたものと考えられる。南西隅柱穴底面からは拳大の礫が3点出土し、3-ハP柱抜き取り穴からは刀子が1点出土している。(4-6 H参照)				

遺構名	4-6 H	図版番号	49、58	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	722×430・4間×2間	棟方位	S-82°-W(変換)	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	70×68	柱痕規模	不明
重複関係	4-7 H→当遺構、4-5 Hと重複している。			位置	O-12グリッド
観察	中央部を二線引により深く攪乱されている。隅柱を除く側柱が柱筋の外側に接するかのよう に柱穴が位置している。柱穴断面形態は逆台形を呈しており、4-5 Hに伴う可能性もあるが、3-ハPから須恵器甕胴部片が出土している。				

遺構名	4-7 H	図版番号	48、49、58	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	625×500・3間×2間	棟方位	S-87°-E(変換)	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形(他混在)	柱穴規模(大きさ×深さ)	81×66	柱痕規模	28
重複関係	当遺構→4-6 H。			位置	O-12グリッド
観察	中央部を二線引により深く攪乱されている。4区「コ」字状配置建物群の東側に位置している。柱穴平面形態については円形のものが多いが、様々な形態のものが混在しており、断面形態は逆台形を呈している。				

遺構名	4-8H	図版番号	43、58	平面形態	総柱
規模(桁×梁)	396×375・2間×2間	棟方位	S-72°-W	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	方形	柱穴規模(大きさ×深さ)	68×67	柱痕規模	20
重複関係	4-3・4・9Hと重複している。	位置	Q-10グリッド		
観察	西側を二線引により深く攪乱されている。柱穴平面形態については楕円形のものも存在するが、ほとんどは方形であったと思われる。梁側の中央柱穴はやや柱筋より外側に位置しており、近接棟持柱になる可能性もある。柱穴の壁面は垂直気味に立ち上がり、底面は凹凸が著しい。				

遺構名	4-9H	図版番号	43、58	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	694×590・5間×4間	棟方位	S-87°-E	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	47×54	柱痕規模	24
重複関係	4-8・12Hと重複している。	位置	Q-11グリッド		
観察	4区「コ」字状配置建物群の北側に位置し、東側を二線引により深く攪乱されている。				

遺構名	4-10H	図版番号	43、44、58	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	531×404・5間×4間	棟方位	S-72°-E(変換)	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	38×34	柱痕規模	20
重複関係	4-11Hと重複している。	位置	R-11グリッド		
観察	棟通りの屋内に2個の小穴が確認されているが、南側の小穴は4-11Hの柱穴であり、北側の小穴は小規模で、棟持柱穴になるとは思われない。柱間は他の掘立柱建物跡に比してやや狭い。				

遺構名	4-11H	図版番号	43、44、58	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	450×318・2間×1間	棟方位	S-68°-W(変換)	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	楕円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	40×35	柱痕規模	不明
重複関係	4-10Hと重複している。	位置	R-11グリッド		
観察	柱穴平面形態は円形に近い。				

遺構名	4-12H	図版番号	43、50、58	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	東西628・4間	棟方位	S-72°-W	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	長方形	柱穴規模(大きさ×深さ)	62×48×51	柱痕規模	16
重複関係	4-9・13Hと重複している。	位置	Q-11グリッド		
観察	南側は調査区外にあたるため、規模など不明な点が多い。隅柱穴は90×66×64(北西柱穴)と他の側柱穴よりやや大きくて深い。ニPからは奈良時代の須恵器坏蓋片が1点出土している。柱穴断面形態は逆台形を呈している。				

遺構名	4-13H	図版番号	50、58	平面形態	掘立柱
規模(桁×梁)	不明	棟方位	S-86°-E	柱穴確認状況	容易
柱穴形態	円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	49×36	柱痕規模	14
重複関係	4-12Hと重複している。	位置	Q-11グリッド		
観察	4区「コ」字状配置建物群の西側に位置している。南側は調査区外にあたるため、規模など				

不明な点が多い。南側の柱穴は木根があったため完掘はしていないが、2個の柱穴が重複しているかのような状況を呈していることから、西側の大型の柱穴と関連して、他の掘立柱建物跡が存在している可能性が高い。

遺構名	4-14H	図版番号	32、34、41、42、59	平面形態	総柱
規模(桁×梁)	693×357・2間×2間	棟方位	S-46°-W	柱穴確認状況	普通
柱穴形態	楕円形	柱穴規模(大きさ×深さ)	(53)×(40)	柱痕規模	18
重複関係					位置 O-9グリッド
観察	上層部は茶園の改植により深く攪乱されており、平面形態などやや不明確な点がある。梁側の中央柱穴は他の側柱穴よりやや浅い。				

3) 竪穴住居跡の詳細

遺構名	1－1 J a	図版番号	4、5、59	平面形態	不整形	排水溝の有無	有
規模(大きさ×深さ)	664×(540)×16	面積	(26.8)	棟方位	S－86°－W(変換)	炉跡形態	不明
主柱穴数	4 ?	規模(大きさ×深さ)	37×26	貯蔵穴形態	無 ?	規模	――
重複関係	中央部で1－12Dと重複、当遺構→1－1 J b。					位置	D－3グリッド
観察	西側と南側を二線引により深く攪乱されている。北西部には周溝状の小溝が確認されており、その内側の覆土中層からは古墳時代中期の須恵器坏身片が1点出土し、また、外側のようには床面上からは弥生時代後期の土器が出土しておらず、別の竪穴住居跡（b住居跡）が重複しているものと考えられる。覆土内からは炭化物が多量に発見され、床面上からは焼土が散在して確認されており、焼失家屋の可能性もある。また、土器や拳大の礫も多量に出土し、なかには、周溝内から出土しているものもある。主柱穴はC－D断面ライン上に2個確認されている。						
遺構名	1－1 J b	図版番号	4、5、59	平面形態	不明	排水溝の有無	不明
規模(大きさ×深さ)	深さ16	面積	不明	棟方位	S－73°－E	炉跡形態	不明
主柱穴数	不明	規模(大きさ×深さ)	不明	貯蔵穴形態	不明	規模	不明
重複関係	東側で1－12Dと重複、1－1 J a→当遺構(1－1 J a参照)。					位置	D－3グリッド
観察	南西部を深く攪乱されており、不明な点が多い。東側床面では焼土が確認されている。						
※1－1 Jについては2軒の竪穴住居跡が重複しているものと思われるため、a・b住居跡に分け、西側の住居跡をb住居跡として記述している。							

遺構名	1-2J a	図版番号	4、59	平面形態	方形?	排水溝の有無	不明
規模(大きさ×深さ)	534×(516)×14	面積	(24.5)	棟方位	S-75°-W	炉跡形態	不明
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	(34)×(33)	貯蔵穴形態	楕円形	規模	92×56×16
重複関係	1-2J b・3Jを取り巻く溝(1-1K)と重複している。					位置	D-2グリッド
観察	b住居跡の覆土内より炉跡などが確認されなかったことから、当遺構の方が古いものと思われる。周溝は部分的にしか確認されず、東側の壁は周溝の外側に大きく張り出している。主柱穴はE-F・G-H断面ライン上に4個確認された。貯蔵穴(1-6D)は南壁際中央部に位置し、古墳時代中期の土師器高坏脚部と坏2点出土している。						

遺構名	1－2 J b	図版番号	4、59	平面形態	方形	排水溝の有無	不明
規模(大きさ×深さ)	456×(426)×34	面積	(15.7)	棟方位	S－81°－W	炉跡形態	無
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	31×25	貯蔵穴形態	楕円形	規模	48×40×12
重複関係	1－2 J a (1－2 J a 参照)・3 J を取り巻く溝(1－1 K)と重複。					位置	D－2 グリッド
観察	北側を二線引により深く攪乱されている。主柱穴はA－B・C－D断面ライン上に4個確認され、貯蔵穴は北東コーナー付近に位置し、底面から土師器壺底部が1点出土している。						
※1－2 J についても2軒の竪穴住居跡が重複しているものと考えられるため、a・b住居跡に分け、北側のものをb住居跡として記述している。							

遺構名	1-3 J	図版番号	4、59	平面形態	長方形	排水溝の有無	有
規模(大きさ×深さ)	492×294×10	面積	10.8	棟方位	S-73°-W(変換)	炉跡形態	観察参照
主柱穴数	無?	規模(大きさ×深さ)	—	貯蔵穴形態	不明	規模	不明
重複関係	1-2 K(1-5 J 排水溝)と重複、取り巻きの溝は周辺の竪穴と重複。					位置	C-2 グリッド
観察	南側を二線引により深く攪乱されているため、南西コーナーを明確に捉えられなかった。小穴は4個確認されているが、どれも浅く、主柱穴になるとは思われない。中央部床面上からは1-2 Kに切られているかのように焼土が確認された。覆土下層からは古墳時代中期の土師器高坏が1点出土している。北東コーナー付近からは幅広の浅い溝が北側へ伸びており、排水溝になると思われる。周囲には細溝(1-1 K)が巡っており、周堤帯を取り巻いていたものと思われる。その溝の断面形態は逆台形を呈している。						

遺構名	1-4 J a	図版番号	3、4、59	平面形態	方形	排水溝の有無	不明
規模(大きさ×深さ)	(460)×(450)×10	面積	(19.4)	棟方位	S-74°-W	炉跡形態	不明
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	(32)×(31)	貯蔵穴形態	不明	規模	不明
重複関係	1-4 J c・1・2 Kと重複、当遺構→1-4 J b。					位置	C-2 グリッド
観察	b・c住居跡と重複し、東側を二線引により深く攪乱されているため、不明な点が多い。主柱穴はI-J・K-L断面ライン上に存在し、南壁際中央部には浅い落ち込み(深さ12cm)が存在し、周溝はその付近で一部確認された。覆土中層からは古墳時代中期の須恵器坏蓋片が2点出土している。						
遺構名	1-4 J b	図版番号	3、4、59	平面形態	長方形?	排水溝の有無	不明
規模(大きさ×深さ)	(560)×408×20	面積	(21.4)	棟方位	S-72°-W	炉跡形態	観察参照
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	33×40	貯蔵穴形態	観察参照	規模	観察参照
重複関係	1-4 J c・1・2 Kと重複、1-4 J a→当遺構。					位置	C-2 グリッド
観察	東側を二線引により攪乱されている。主柱穴はE-F・G-H断面ライン上に位置している。炉跡、貯蔵穴や出土遺物はc住居跡に伴う可能性もあるが、ここに記す。炉跡は地床炉で中央部に位置し、その北側からは古墳時代中期の土師器甕が拳大の礫と共に、西側からは同期の土師器坏が出土している。貯蔵穴は北西コーナー付近に楕円形のもの(58×48×24)が確認され、南壁際中央部からは拳大の礫や白玉1点が出土した楕円形の落ち込み(88×68×4)が確認されている。						
遺構名	1-4 J c	図版番号	3、4、59	平面形態	不明	排水溝の有無	不明

規模(大きさ×深さ)	深さ20	面積	不明	棟方位	S－82°－W	炉跡形態	b住参照
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	23×19	貯蔵穴形態	b住参照	規模	b住参照
重複関係	1－4 J a・b・1・2 Kと重複している。					位置	C－2グリッド
観察	b住居跡と重なっているため、形態など不明な点が多い。主柱穴はA－B・C－D断面ライン上に位置している。						
※1－4 Jについては主柱穴数からすると3軒の竪穴住居跡が重複しているものと思われる。そのため、南側のものをa住居跡、北側のものをb住居跡、小型のものをc住居跡として記述している。							

遺構名	1-5 J	図版番号	4、59	平面形態	隅丸方形	排水溝の有無	有
規模(大きさ×深さ)	486×456×0	面積	17.6	棟方位	S-83°-W(変換)	炉跡形態	不明
主柱穴数	不明	規模(大きさ×深さ)	不明	貯蔵穴形態	不明	規模	不明
重複関係	1-4・5 D・1 Kと重複し、1-2 K(排水溝)が1-3 Jと重複。					位置	C-3グリッド
観察	北側を二線引により深く攪乱されており、また、他の遺構とも重複しているため不明な点が多い。小穴は多く確認されたが、どれも小さくて浅く、主柱穴になるとは思われない。北東コーナー付近から1-2 Kが北側へと伸びており、周溝との連結は確認されていないが、排水溝になるものと思われる。						

遺構名	1-6 J	図版番号	10、11、59	平面形態	隅丸長方形	排水溝の有無	有
規模(大きさ×深さ)	384×280×0	面積	7.4	棟方位	S-13°-W	炉跡形態	不明
主柱穴数	無	規模(大きさ×深さ)	—	貯蔵穴形態	不明	規模	不明
重複関係	当遺構→1-7 K・2・3・11 D・6 H。					位置	C-5グリッド
観察	北側を二線引により深く攪乱されており、炉跡や貯蔵穴の有無は不明である。北西コーナーからは排水溝が2-7 Jの排水溝へと伸びており、途中、二又に分かれているが、当初はなんらかの施設を避けて南側へと曲がっていたものと思われる。排水溝内からは弥生土器片が1点と拳大の礫が底面からやや浮いた状態で比較的多く出土している(2-11 J参照)。						

遺構名	2-1 J	図版番号	14、15、59	平面形態	方形	排水溝の有無	不明
規模(大きさ×深さ)	524×508×50	面積	21.5	棟方位	S-63°-W	炉跡形態	不明
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	30×28	貯蔵穴形態	楕円形	規模	138×94×24
重複関係	当遺構→2-27 D。					位置	J-4グリッド
観察	中央部分を二線引により深く攪乱されており、炉跡の有無は不明である。貯蔵穴は南壁際中央部に位置し、上層からは古墳時代中期の土師器高坏脚部が1点出土している。西側コーナー付近には2-27 Dが存在するが、その覆土の状態や礫が上層から多量に出土していることから、別の遺構と考えられる。						

遺構名	2-2 J a	図版番号	14、59、60	平面形態	楕円形	排水溝の有無	有
規模(大きさ×深さ)	674×(550)×28	面積	(26.6)	棟方位	S-72°-W(変換)	炉跡形態	不明
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	25×28	貯蔵穴形態	不明	規模	不明
重複関係	当遺構→2-2 J b。					位置	I-5グリッド
観察	西側部分を二線引により深く攪乱されている。主柱穴は棟と壁の方位がややずれるが、E-						

F・G-H断面ライン上に位置しているものと思われる。南西コーナー付近からは浅い落ち込みが確認されているが、b住居跡を切っているため、当遺構には伴う施設ではない。南壁付近の床面からは弥生時代後期の壺が1点出土し、下層からは焼土や炭化材が多く確認されている。また、排水溝中層からは弥生時代後期の壺・甕・高坏の破片が出土している。

遺構名	2-2 J b	図版番号	14、59、60	平面形態	方形？	排水溝の有無	有
規模(大きさ×深さ)	(530)×(490)×28	面積	(21.2)	棟方位	S-62°-W(変換)	炉跡形態	地床炉
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	26×30	貯蔵穴形態	不明	規模	不明
重複関係	2-2 J a→当遺構、排水溝が2-1 Dと重複している。					位置	I-5 グリッド
観察	西側部分を二線引により深く攪乱されている。主柱穴はI-J・K-L断面ライン上に位置し、炉跡は中央部やや北側にある。南側はa住居跡確認時に掘り過ぎてしまったが、周溝は全周するものと思われる。覆土内からは古墳時代中期の土師器片が多量に出土したが、とくに中層からは焼土や炭化物と共に、大型の礫が多く出土した。						
※2-2 Jについては2軒の竪穴住居跡が重複しているため、大型の住居跡をa住居跡、小型の住居跡をb住居跡として記述している。							

遺構名	2-3 J a	図版番号	8、13、14、60	平面形態	方形	排水溝の有無	不明
規模(大きさ×深さ)	462×450×34	面積	18.4	棟方位	S-59°-W	炉跡形態	地床炉 2
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	29×23	貯蔵穴形態	円形	規模	52×40
重複関係	2-9 J→当遺構→2-3 J b→2-33D。					位置	H-3グリッド
観察	周溝は部分的に途切れた状態で確認され、南西コーナー付近の深い小穴は貯蔵穴になる可能性がある。焼土（破線のものを除く）は5箇所を確認されたが、集中範囲からすると、2箇所の炉跡と考えて良いだろう。主柱穴はI-J・K-L断面ライン上に位置し、底面には古墳時代中期の土師器高坏坏部や礫が置かれていた。覆土内からは古墳時代中期の土師器片が少量出土している。b住居跡に関連する可能性もあるが、周囲には2-2 Kが巡っている。						

遺構名	2-3 J b	図版番号	8、13、14、60	平面形態	方形	排水溝の有無	不明
規模(大きさ×深さ)	560×530×20	面積	27.6	棟方位	S-61°-W	炉跡形態	地床炉 2
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	28×31	貯蔵穴形態	観察参照	規模	観察参照
重複関係	2-9 J→2-3 J a→当遺構→2-33D。					位置	H-3グリッド
観察	周溝は北壁際で一部のみ確認された。東側と南側では床面の硬化範囲（破線の内側）の外側で壁が立ち上がっている。焼土（破線のもの）は3箇所を確認されたが、基本的には炉跡は2箇所と考えて良いであろう。主柱穴についてはE-F・G-H断面ライン上に位置し、貯蔵穴については北東コーナー付近からは円形のもの（70×31）が、南壁際中央部からは楕円形のもの（82×70×29）が確認されている。南西コーナー付近の小穴（94×52×13）からは磨石が1点出土している（a住居跡参照）。出土遺物はわずかで、覆土上層からは古墳時代中期の須恵器や土師器の破片が出土している。2-33Dについては、覆土の状態や上層から礫が出土していることから別の遺構と考えられる。						

※2-3 Jについても2軒の竪穴住居跡が重複しているため、a・b住居跡に分け、小型の住居跡をa住居跡として記述している。

遺構名	2-4 J	図版番号	13、14、60	平面形態	隅丸方形	排水溝の有無	有
規模(大きさ×深さ)	460×414×16	面積	12.8	棟方位	S-72°-W(変換)	炉跡形態	地床炉?
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	31×21	貯蔵穴形態	無	規模	——
重複関係	排水溝が2-3 Jと重複している。					位置	H-4グリッド
観察	当初は弥生時代後期の土器片が床面から出土していたため、弥生時代に属するものと考えていたが、その形態から判断すると古墳時代に属する可能性もありうる。南側の壁の張り出し部分は壁の崩落によるもので、実際には直線的であった。東側の張り出し部分は風倒木痕であろう。北側の2個隣接する柱穴や南側の平行する周溝から判断すると、建て替えられている可能性もある。中央部には焼土が確認されたが、炉跡としては小規模である。また、北壁際中央部中層からは焼土が出土している。2-31Dについては、主柱穴と重複していることから別の遺構と考えられる。						

遺構名	2-5 J	図版番号	12、13、60	平面形態	隅丸長方形	排水溝の有無	有
規模(大きさ×深さ)	446×(350)×15	面積	(12.5)	棟方位	S-78°-W	炉跡形態	地床炉
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	22×30	貯蔵穴形態	不明	規模	不明
重複関係	2-8 J→当遺構→2-1 H。					位置	G-5グリッド
観察	北側は二線引により深く攪乱されている。周溝は途中で途切れているが全周するものと思われる。また、周溝内やその直上から多量の炭化材が出土している。炉跡は中央部やや東側に位置し、その直上からは弥生土器片が出土し、周囲には焼土粒子（破線範囲）が集中している。床面上からは弥生時代後期の土器片が少量出土している。						

遺構名	2-6 J	図版番号	12、60	平面形態	方形	排水溝の有無	有
規模(大きさ×深さ)	478×458×0	面積	19.2	棟方位	S-87°-W	炉跡形態	地床炉
主柱穴数	4?	規模(大きさ×深さ)	28×25	貯蔵穴形態	円形	規模	62×42
重複関係						位置	F-4グリッド
観察	中央部は二線引により深く攪乱されている。中央部西側には小溝が存在するが、確認時のプランはかなり不明瞭で、周溝になるかは疑問である。周溝は全周していた可能性が高い。貯蔵穴はプラン確認時には方形であったことから、蓋受けのための掘り込みがあったものと思われる。北壁際中央部の床面上からは古墳時代中期の土師器甕が1点出土している。						

遺構名	2-7 J	図版番号	11、12、18、60	平面形態	隅丸長方形	排水溝の有無	有
規模(大きさ×深さ)	590×430×(28)	面積	19.0	棟方位	S-88°-W	炉跡形態	地床炉
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	25×39	貯蔵穴形態	無	規模	——
重複関係	上層部に古墳時代中期の土坑が存在していた可能性が高い。					位置	E-6グリッド
観察	上層部は茶園の改植により深く攪乱されているが、白玉や須恵器などが少量出土しており、古墳時代中期の土坑が重複していた可能性がある。下層からは焼土や炭化材が多量に出土しており、焼失家屋であると考えられる。床面上に焼土が3箇所確認されているが、壁際の2箇所は家屋焼失時のものと思われる。北東コーナー付近の床面上からは弥生時代後期の小型の壺や高坏などが出土している。排水溝は2-11 Jを避けて北へと伸び、1-6 Jと2-11 Jの排水溝と繋がっている。その排水溝内からは完形に近い壺が1点出土している（2-11 J参照）。						

遺構名	2－8 J	図版番号	12、13、60	平面形態	隅丸長方形	排水溝の有無	不明
規模(大きさ×深さ)	(500)×438×0	面積	(16.7)	棟方位	S－66°－W(変換)	炉跡形態	地床炉
主柱穴数	4 ?	規模(大きさ×深さ)	17×27	貯蔵穴形態	不明	規模	不明
重複関係	当遺構→2－5 J→2－1 H。					位置	G－4 グリッド
観察	北側は斜面地であり、また、二線引により深く攪乱されているため、規模などに不明な点がある。主柱穴はA－B断面ライン上に位置しているが、規模は小さい。2－5 Jの排水溝に切られて炉跡が確認され、その付近からは弥生時代後期の壺の口縁部が1点出土している。						

遺構名 2-9 J		図版番号 14、60		平面形態 隅丸長方形		排水溝の有無 不明	
規模(大きさ×深さ) (430)×358×14		面積 (11.7)		棟方位 S-76°-W		炉跡形態 地床炉	
主柱穴数 4 ?		規模(大きさ×深さ) 30×24		貯蔵穴形態 不明		規模 不明	
重複関係 当遺構→2-3 J a・b。						位置 I-4 グリッド	
観察	東西を深く攪乱されており、規模など不明な点が多い。						

遺構名	2-10 J a	図版番号	7、13、60	平面形態	不明	排水溝の有無	不明	
規模(大きさ×深さ)	不明	面積	不明	棟方位	S-80°-W(変換)	炉跡形態	不明	
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	(38)×(47)	貯蔵穴形態	観察参照	規模	――	
重複関係	2-10 J bと重複している。						位置	H-3グリッド
観察	周溝と貯蔵穴になる可能性のある2-1・2(各2小穴)・3Pは、a、bどちらの住居跡に伴うかは不明。ちなみに、それらの小穴からは古墳時代中期の土師器が出土しており、1P下層からは坏と壺の底部が各1点出土し、3P下層からは高坏片などが出土している。							
遺構名	2-10 J b	図版番号	7、13、60	平面形態	不明	排水溝の有無	不明	
規模(大きさ×深さ)	不明	面積	不明	棟方位	S-80°-W	炉跡形態	不明	
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	(41)×(47)	貯蔵穴形態	a住参照	規模	――	
重複関係	2-10 J aと重複している。						位置	H-3グリッド
観察	2-10 J a参照。							
※2-10 Jについては上層部を深く攪乱されており不明な点が多いが、小穴群と西側の周溝状の小溝から竪穴住居跡を想定して記述している。その際、A-B・C-D断面ライン上に主柱穴を有するものをa住居跡、E-F・G-H断面ライン上に主柱穴を有するものをb住居跡として記述している。								

遺構名	2-11 J	図版番号	11、12、18、19、60	平面形態	楕円形？	排水溝の有無	有
規模(大きさ×深さ)	(455)×(390)×0	面積	(13.1)	棟方位	S-62°-W(変換)	炉跡形態	地床炉
主柱穴数	4？	規模(大きさ×深さ)	——	貯蔵穴形態	不明	規模	不明
重複関係	2-6・13Hと重複、当遺構→2-5・6・7 D。					位置	E-5 グリッド
観察	南側を二線引により深く攪乱されており、また、プラン確認がかなり難しかったことから、不明な点も多い。周溝は部分的にしか確認できなかったが、全周していた可能性が高く、主柱穴になる可能性のある小穴が炉跡の南側に2個存在しているが、規模はやや小さい。排水溝は1-6 Jと2-7 Jの排水溝が合流しており、当住居跡とは関係しないかもしれないが、下層から中層にか						

けて弥生時代後期の壺や台付甕の破片が出土している。また、底面が熱により赤化している地点もある。

遺構名	3-1 J a	図版番号	25、33、61	平面形態	不明	排水溝の有無	不明
規模(大きさ×深さ)	深さ12	面積	不明	棟方位	S-63°-W	炉跡形態	不明
主柱穴数	不明	規模(大きさ×深さ)	不明	貯蔵穴形態	不明	規模	不明
重複関係	当遺構→3-1 J b→3-1 J c。					位置	O-8グリッド
観察	3-1 J b・cとの重複により不明な点が多い。覆土内からは焼土や炭化物が多量に確認されている。						

遺構名	3-1 J b	図版番号	25、33、61	平面形態	隅丸方形	排水溝の有無	不明
規模(大きさ×深さ)	658×636×20	面積	36.0	棟方位	S-69°-W(変換)	炉跡形態	不明
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	40×34	貯蔵穴形態	楕円形	規模	128×112×45
重複関係	3-1 J a→当遺構→3-1 J c。					位置	O-8グリッド
観察	主柱穴についてはA-B・C-D断面ライン上に位置し、東側のものはc住居跡の柱穴（大型のもの）と重複し、西側のものはc住居跡の柱穴より約1 m内側の小穴が主柱穴になると思われる。貯蔵穴は南壁際中央部に位置し、北側にテラス状の平坦面を有している。その覆土下層からは古墳時代中期の土師器片が、上層からは白玉が2点出土している。						

遺構名	3-1 J c	図版番号	25、33、61	平面形態	隅丸長方形	排水溝の有無	不明
規模(大きさ×深さ)	(838)×758×20	面積	(57.8)	棟方位	S-69°-W	炉跡形態	地床炉3
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	46×39	貯蔵穴形態	不明	規模	不明
重複関係	3-1 J a→3-1 J b→当遺構。					位置	O-8グリッド
観察	西側を二線引により深く攪乱されており、規模など不明瞭な点がある。主柱穴はA-B・C-D断面ラインに位置し（b住居跡参照）、南西部の柱穴は2個以上の柱穴が重複しており、建て替えられている可能性もある。北側の周溝は斜面地に位置していたため、明確にプランを掴むことができなかったが全周していたものと思われる。炉跡は3箇所を確認され、それらの内側からは、下層から中層にかけて白玉が6点出土している。また、中央部の炉跡の東側上層からは石製模造品（管玉）と須恵器高坏の坏部片が各1点ずつ出土している。その他、古墳時代中期の遺物が床面上から出土しており、須恵器甕胴部片、土師器高坏や甕の破片や小型埴が出土している。						

※3-1 Jについては、3軒の竪穴住居跡が重複しているものと思われるため、南側に周溝が張り出している小型のものをa住居跡、内側に周溝が巡っているものをb住居跡、外側に周溝が巡っている大型のものをc住居跡として記述している。							
---	--	--	--	--	--	--	--

遺構名	3-2 J a	図版番号	24、25、61	平面形態	不明	排水溝の有無	不明
規模(大きさ×深さ)	深さ22	面積	不明	棟方位	S-22°-W	炉跡形態	不明
主柱穴数	不明	規模(大きさ×深さ)	不明	貯蔵穴形態	不明	規模	不明
重複関係	当遺構→3-1 J b→3-1 J c。						位置 N-7グリッド
観察	図面整理の段階で竪穴住居跡である可能性に気が付いたため、十分な調査が行き届いておらず不明な点が多い。b・c住居跡の東外側から人頭大の礫や古墳時代中期の土師器高環の破片が出土しているが、それらは当住居跡の覆土上層で確認されたものである。西側周溝際からは古墳時代						

中期の須恵器甕胴部片が出土している。							
遺構名 3-2 J b		図版番号 24、25、61		平面形態 方形？		排水溝の有無 不明	
見模(大きさ×深さ) (600)×598×16		面積 (32.6)		棟方位 S-49°-W(変換)		炉跡形態 不明	
主柱穴数 4		規模(大きさ×深さ) 35×33		貯蔵穴形態 不明		規模 不明	
重複関係 3-1 J a→当遺構→3-1 J c。						位置 N-7グリッド	
観察		斜面地に位置し、c住居跡と重複しているため不明な点が多い。また、中央部は二線引により深く攪乱されている。覆土はa住居跡と同様に黄褐色土でプラン確認が難しかった。主柱穴はC—D・E—F断面ライン上に位置している。					
遺構名 3-2 J c		図版番号 24、25、61		平面形態 方形？		排水溝の有無 有	
見模(大きさ×深さ) (550)×548×20		面積 (26.8)		棟方位 S-45°-W(変換)		炉跡形態 地床炉2	
主柱穴数 4		規模(大きさ×深さ) 31×35		貯蔵穴形態 不明		規模 不明	
重複関係 3-1 J a→3-1 J b→当遺構。						位置 N-7グリッド	
観察		斜面地に位置し、北側の周溝や壁は明確に把握できなかった。また、中央部は二線引により攪乱されている。主柱穴はG—H・I—J断面ライン上に位置し、炉跡は北側中央部に2箇所確認されている。覆土下層からは焼土や炭化物が多量に確認されており、南西コーナー付近の焼土はそれらと関連するものであろう。中央部下層からは拳大の礫が古墳時代中期の土師器片と共に出土している。					
※3-2 Jについても3軒の竪穴住居跡が重複しているものと考えられるため、a・b・c住居跡に分け、竪穴中央部に周溝を有するものをa住居跡、西側のものをb住居跡として記述している。							

遺構名	3-3 J a	図版番号	32、61	平面形態	方形？	排水溝の有無	不明
見模(大きさ×深さ)	340×(310)×8	面積	(7.6)	棟方位	S-72°-W(変換)	炉跡形態	不明
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	31×29	貯蔵穴形態	不明	規模	不明
重複関係	当遺構→3-3 J b。					位置	M-8グリッド
観察	西側を二線引により深く攪乱されており不明な点が多い。周溝は比較的広く、主柱穴はE-F・G-H断面ライン上に位置している。						
遺構名	3-3 J b	図版番号	32、61	平面形態	方形	排水溝の有無	有
見模(大きさ×深さ)	500×490×12	面積	20.3	棟方位	S-32°-W(変換)	炉跡形態	不明
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	31×27	貯蔵穴形態	楕円形？	規模	短径70、深20
重複関係	3-3 J a→当遺構。					位置	M-8グリッド
観察	西側を二線引により深く攪乱されており、炉跡の有無などは不明である。主柱穴はA-B・C-D断面ライン上に位置するものと思われ、西側コーナーの小穴が貯蔵穴になる可能性が高く、そのコーナーから排水溝が伸びている。北壁際中央部付近からは古墳時代中期の土師器甕や高坏脚部が床面上から出土している。						
※3-3 Jについては2軒の竪穴住居跡が重複しているものと考えられるため、a・b住居跡に分け、小型のものをa住居跡として記述している。							

遺構名	3-4 J	図版番号	23、61
平面形態	方形?	排水溝の有無	不明

規模(大きさ×深さ)	南北348、深さ0	面積	不明	棟方位	S－76°－W	炉跡形態	不明
主柱穴数	4 ?	規模(大きさ×深さ)	(36)×31	貯蔵穴形態	不明	規模	不明
重複関係						位置	L－7グリッド
観察	西側を二線引により深く攪乱されており不明な点が多い。床面上からは白玉が1点出土している。						

遺構名	3-5 J a	図版番号	16、22、23、61	平面形態	隅丸方形	排水溝の有無	有
規模(大きさ×深さ)	400×368×26	面積	10.8	棟方位	S-57°-W(変換)	炉跡形態	不明
主柱穴数	4 ?	規模(大きさ×深さ)	22×23	貯蔵穴形態	不明	規模	不明
重複関係	当遺構→3-5 J b→3-5 J c。					位置	K-6グリッド
観察	西側を二線引により深く攪乱されており不明な点が多い。主柱穴はG-H断面ライン上に位置している。覆土下層からは焼土や炭化物が多量に確認されており、焼失家屋の可能性もある。また、周溝内からは弥生時代後期の甕の破片が出土している。						

遺構名	3-5 J b	図版番号	16、22、23、61	平面形態	長方形	排水溝の有無	不明
規模(大きさ×深さ)	(726)×634×3	面積	(41.0)	棟方位	S-45°-W(変換)	炉跡形態	不明
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	45×48	貯蔵穴形態	観察参照	規模	観察参照
重複関係	3-5 J a→当遺構→3-5 J c。					位置	K-6グリッド
観察	斜面地に位置し、また、西側を二線引により攪乱されており不明な点が多い。主柱穴はC-D・E-F断面ライン上に位置し、貯蔵穴の可能性のあるP1・2は当住居跡に伴うものと思われる。P1は80cm×50cmで、P2は134cm×122cm×10cmである。P1中層からは古墳時代中期の土師器高坏が1点出土している。周溝は周溝下からも確認されており、重複しているものと考えられる。						

遺構名	3－5 J c	図版番号	16、22、23、61	平面形態	長方形	排水溝の有無	不明	
規模(大きさ×深さ)	588×492×10	面積	25.6	棟方位	S－53°－W(変換)	炉跡形態	観察参照	
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	不明	貯蔵穴形態	不明	規模	不明	
重複関係	3－5 J a→3－5 J b→当遺構。						位置	K－6グリッド
観察	斜面地に位置し、また、西側を二線引により深く攪乱されており不明な点が多い。主柱穴については、不明な点が多く、おそらく4個存在すると思われ、東側のものはA－B断面ライン付近に位置し、西側のものについては確定できない。周溝は東側で2重に巡っており、中央部南側床面上からは焼土(破線のもの)が5箇所を確認されているが、炉跡は通常北側に位置するため、それらが炉跡になるかは不明である。南東壁際には小穴が存在するが、深さは10～20cmと浅い。北側コーナー付近からは古墳時代中期の土師器高環が出土し、東側中層からは石製模造品(管玉など)が出土している。							

※3-5 Jについては複数の竪穴住居跡が重複しているものと考えられるため、周溝が3辺以上で確認された小型のものをa住居跡、大型のものをb住居跡、中型のものをc住居跡として記述している。

遺構名	3-6 J	図版番号	29、61	平面形態	楕円形	排水溝の有無	有
規模(大きさ×深さ)	516×(422)×0	面積	(16.1)	棟方位	S-84°-W(変換)	炉跡形態	地床炉
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	27×25	貯蔵穴形態	無	規模	—

重複関係	3-13D(奈良時代)と重複、当遺構→3-22H→3-14H。	位置	I-8グリッド
観察	東側を二線引により攪乱されている。中央部の炉跡は柱穴により攪乱されているが、北側のものは掘り込みがあり、その覆土は埋め戻されたような黄褐色土で、南側のものには掘り込みは認められなかったが、直上から弥生時代後期の土器片が出土している。周溝は北側で2重に巡っていたような箇所がある。主柱穴は南側のものがやや浅いが、A-B・C-D断面ライン上に位置している。		

遺構名	4-1J	図版番号	34、35、62	平面形態	方形	排水溝の有無	有
規模(大きさ×深さ)	686×636×16	面積	36.8	棟方位	S-65°-W	炉跡形態	地床炉
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	34×37	貯蔵穴形態	楕円形	規模	24
重複関係	排水溝が4-2Jと重複している。					位置	Q-9グリッド
観察	周溝は北側で一部確認できなかったが、おそらく全周していた可能性が高い。周溝の内側では細溝が確認されているが、これは当住居跡に伴うものと思われ、周溝と同様に北端は貯蔵穴に繋がっている。主柱穴はE-F・G-H断面ライン上に位置し、焼土は4箇所を確認されている。出土遺物は古墳時代中期に属するもので、北壁際中央部に位置している貯蔵穴内からはほぼ完形の土師器甕が2点、南壁際の小穴内からは胴部下半を欠いた須恵器甕が1点、その他、床面上から土師器高坏や白玉1点などが出土している。						

遺構名	4-2J	図版番号	34、35、62	平面形態	方形?	排水溝の有無	不明
規模(大きさ×深さ)	580×(546)×12	面積	(25.0)	棟方位	S-54°-W	炉跡形態	地床炉2
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	36×37	貯蔵穴形態	不明	規模	不明
重複関係	4-1Jの排水溝と重複している。					位置	Q-8グリッド
観察	北側は斜面地に位置しており、規模など不明瞭な点がある。南西コーナー付近には深さ20cmの小穴が存在するが、主柱穴に接近し過ぎており貯蔵穴になるかは不明である。ただし、その覆土からは攪乱とは断定できなかった。炉跡は2箇所を確認され、北側の炉跡付近からは土師器片が多く出土している。						

遺構名	4-3J	図版番号	35、43、62	平面形態	隅丸方形	排水溝の有無	有
規模(大きさ×深さ)	504×494×20	面積	18.3	棟方位	S-32°-W	炉跡形態	地床炉
主柱穴数	4	規模(大きさ×深さ)	25×37	貯蔵穴形態	楕円形	規模	86×80×20
重複関係	当遺構→4-7D。(4-7D参照)					位置	Q-9グリッド
観察	古墳時代中期に属する遺物が多く出土しており、下層から土師器(高坏4点など)、人頭大の礫1点、白玉5点、焼土と炭化材が、中～上層から須恵器高坏蓋片1点、土師器片、人頭大の礫4点、石製模造品(勾玉や白玉少量)などが出土している。周溝は南東壁際で一部確認できなかった。また、周溝の内側からは細溝が確認され、その溝内からは床面上から出土した土器と同一個体の土器が出土しており、細溝は当住居跡に伴うものと考えられる。炉跡は北西壁側に寄っており、排水溝は貯蔵穴に繋がっている。						

遺構名	4-4Ja	図版番号	43、62	平面形態	不明	排水溝の有無	有
規模(大きさ×深さ)	1辺434、深さ28	面積	不明	棟方位	S-52°-E(変換)	炉跡形態	不明

主柱穴数	不明	規模(大きさ×深さ)	不明	貯蔵穴形態	不明	規模	不明
重複関係	当遺構→4－4 J b。					位置	R－10グリッド
観察	西側を二線引により深く攪乱されており不明な点が多い。排水溝は北側コーナーから北へと伸びている。						
遺構名	4－4 J b	図版番号	43、44、62	平面形態	方形	排水溝の有無	不明
規模(大きさ×深さ)	438×404×22	面積	14.0	棟方位	S－53°－W(変換)	炉跡形態	不明
主柱穴数	4 ?	規模(大きさ×深さ)	22×23	貯蔵穴形態	不明	規模	不明
重複関係	4－4 J a→当遺構、4－9 Dと重複している。					位置	R－10グリッド
観察	東側を二線引により深く攪乱されており不明な点が多い。西側コーナー付近に深さ 6 cmの楕円形の小穴が位置している。焼土は床面上から 2 箇所を確認されたが、いずれも主柱穴や壁に接近しており、炉跡になるとは思われない。北東壁際下層からは古墳時代中期の高坏脚部が 3 点出土し、その付近の周溝上から白玉が 1 点出土している。						
※ 4－4 J については 2 軒の竪穴住居跡が重複しているものと考えられるため、a・b 住居跡に分け、東側のものを a 住居跡として記述している。							

遺構名	4-5 J	図版番号	34	平面形態	不明	排水溝の有無	不明
規模(大きさ×深さ)	不明	面積	不明	棟方位	S-67°-W	炉跡形態	不明
主柱穴数	4 ?	規模(大きさ×深さ)	不明	貯蔵穴形態	不明	規模	不明
重複関係	観察参照。					位置	P-8グリッド
観察	上層部は深く攪乱されており不明な点が多い。柱穴数から判断すると竪穴住居跡が重複している可能性もある。						

4) 土坑の詳細

遺構名	1-1 D	図版番号	17、18、62	規模(大きさ×深さ)	(354)×298×8
平面形態	楕円形	面積	(8.1)	重複関係	南側で1-2 Hと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、古墳時代中期の土師器片が多く出土しており、とくに、高環脚部が6点と比較的目立つ。				

遺構名	1-2 D	図版番号	11、62	規模(大きさ×深さ)	194×158×8
平面形態	不整形	面積	2.4	重複関係	1-6 J排水溝(弥生時代後期)→当遺構。
観察	覆土は暗褐色が強く、土師器甕の破片が比較的多く出土している。				

遺構名	1-3 D	図版番号	10、62	規模(大きさ×深さ)	198×134×14
平面形態	楕円形	面積	(2.6)	重複関係	1-6 J排水溝(弥生時代後期)→当遺構→1-1 H。
観察	覆土は暗褐色が強く、古墳時代中期に属する土師器片が多く出土しており、とくに、高環脚部が6点と比較的目立つ。平面形態は長方形に近い楕円形である。				

遺構名	1-4 D	図版番号	4、62	規模(大きさ×深さ)	(144)×90×12
-----	-------	------	------	------------	-------------

平面形態	楕円形	面積	(1.0)	重複関係	1-5 J と重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、土師器片が少量出土している。				

遺構名	1-5 D	図版番号	4、62	規模(大きさ×深さ)	128×(104)×22
平面形態	楕円形	面積	1.0	重複関係	1-5 J と重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、土師器片が少量出土している。北側はテラス状の段を有している。				

※ 1-6 D については 1-2 J a 参照。

遺構名	1-7 D	図版番号	9、62	規模(大きさ×深さ)	(132)×108×16
平面形態	楕円形	面積	(1.1)	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、土師器片が少量出土している。				

遺構名	1-8 D	図版番号	11、62	規模(大きさ×深さ)	270×74×28
平面形態	靴底形	面積	1.7	重複関係	
観察	覆土は黄褐色が強く、下層から中層にかけて弥生時代後期の壺、台付甕や高坏の破片が拳大の礫と共に少量出土している。また、下層からは焼土や炭化物が多量に発見されている。底面は凹凸が著しく、段状をなしている。主軸方位は S-3°-W である。				

遺構名	1-9 D	図版番号	11、62	規模(大きさ×深さ)	150×88×5
平面形態	靴底形	面積	1.0	重複関係	1-6 H と重複している。
観察	凹凸のある底面部分のみが確認された。覆土は黄褐色が強く、主軸方位は S-59°-E である。				

遺構名	1-10 D	図版番号	5、11、62	規模(大きさ×深さ)	80×50×(50)
平面形態	楕円形	面積	0.3	重複関係	1-3 H → 当遺構。
観察	覆土は暗褐色が強く、底面からは拳大の礫の下から銭貨が 2 点出土している。壁は垂直気味に立ち上がり、断面形態は逆台形を呈している。主軸方位は S-28°-E である。				

遺構名	1-11 D	図版番号	11、62	規模(大きさ×深さ)	南北110、深さ17
平面形態	不明	面積	不明	重複関係	1-6 J 排水溝(弥生時代後期) → 当遺構。
観察	覆土内からは焼土や炭化物が多量に確認され、少量の骨片も出土している。壁は垂直気味に立ち上がり、断面形態は逆台形を呈している。主軸方位は S-25°-E である。				

遺構名	1-12 D	図版番号	4、62	規模(大きさ×深さ)	144×94×26
平面形態	楕円形	面積	1.3	重複関係	1-1 J a・b と重複している。
観察	覆土は暗褐色が強い。				

遺構名	2-1 D	図版番号	14、62	規模(大きさ×深さ)	340×236×8
平面形態	不整形	面積	6.1	重複関係	当遺構確認後に 2-2 J b の排水溝が発見された。
観察	覆土は暗褐色が強く、古墳時代中期の土師器片が多く出土し、とくに、高坏脚部が 7 点と目立つ。その他、人頭大の礫 3 点が出土している。				

遺構名	2-2D	図版番号	7、13、62	規模(大きさ×深さ)	180×99×30
平面形態	楕円形	面積	1.3	重複関係	2-2K・10J周溝と重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、中層からは弥生土器片や拳大の礫1点が出土している。底面は凹凸が著しく、段状をなしている。主軸方位はS-75°-Eである。				

遺構名	2-3D	図版番号	18、26、63	規模(大きさ×深さ)	398×276×16
平面形態	楕円形	面積	8.8	重複関係	観察参照。
観察	覆土は暗褐色が強く、下層からは弥生時代後期の壺口縁部や高坏の破片が各1点、白玉1点、古墳時代中期の土師器片と拳大の礫が南半部から多く出土している。上層部は茶園の改植により深く攪乱されており不明な点も多いが、弥生時代の遺構が重複していた可能性もある。				

遺構名	2-4D	図版番号	18、63	規模(大きさ×深さ)	248×136×42
平面形態	靴底形	面積	2.9	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、土師器片が少量出土している。底面には凹凸があり、東側はかなり深い。				

遺構名	2-5D	図版番号	12、63	規模(大きさ×深さ)	深さ16
平面形態	不明	面積	不明	重複関係	1-6J・2-7・11J排水溝(弥生後期)→当遺構。
観察	覆土は暗褐色が強く、土師器片が少量出土している。攪乱が著しく形態など不明な点が多い。				

遺構名	2-6D	図版番号	12、63	規模(大きさ×深さ)	234×79×7
平面形態	靴底形	面積	1.6	重複関係	2-11J(弥生時代後期)→当遺構。
観察	覆土は黄褐色が強く、プラン確認が困難であった。弥生時代後期の壺口縁部や肩部片と小型の礫が出土している。ただし、礫については地山内の礫との判別が困難であった。主軸方位はS-62°-Wである。				

遺構名	2-7D	図版番号	12、63	規模(大きさ×深さ)	238×114×6
平面形態	靴底形	面積	2.2	重複関係	2-11J(弥生時代後期)→当遺構。
観察	覆土は黄褐色が強く、プラン確認が困難であった。甕胴部片、白玉1点と小型の礫が出土している。ただし、2-6D同様、礫については地山内の礫との判別が困難であった。主軸方位はS-71°-Wである。				

遺構名	2-8D	図版番号	12、63	規模(大きさ×深さ)	120×70×14
平面形態	楕円形	面積	0.6	重複関係	
観察	覆土は黄褐色が強く、上層から弥生土器片1点と小型の礫が3点出土している。底面は凹凸が著しい。北側には壁面が熱により赤化した小穴が位置している。主軸方位はS-8°-Wである。				

遺構名	2-9D	図版番号	20、63	規模(大きさ×深さ)	190×106×14
平面形態	靴底形	面積	16.4	重複関係	東側で土坑と重複している可能性がある。
観察	覆土は黄褐色が強く、中層から弥生時代後期の土器片と小型の礫が出土し、下層からは焼土				

が確認されている。底面は西側が深く、緩やかに傾斜している。主軸方位はS-76°-Wである。

遺構名	2-10D	図版番号	28、63	規模(大きさ×深さ)	128×106×14
平面形態	楕円形	面積	1.1	重複関係	南側で1-9Hと重複している。
観察	覆土は黄褐色が強く、中層から弥生時代後期の土器片が、下層から拳大の礫が少量出土している。西側の壁面は緩やかに傾斜している。主軸方位はS-13°-Wである。				

遺構名	2-11D	図版番号	28、63	規模(大きさ×深さ)	180×100×20
平面形態	靴底形	面積	1.2	重複関係	2-8・9Hと重複している。
観察	覆土は黄褐色が強く、中層から弥生土器片が、下層から拳大の礫が少量出土している。底面は凹凸が著しく、段をなしている。主軸方位はS-13°-Wである。				

遺構名	2-12D	図版番号	28、63	規模(大きさ×深さ)	132×110×18
平面形態	靴底形	面積	1.1	重複関係	複数の土坑が重複しているものと考えられる。
観察	覆土は黄褐色が強く、プラン確認が難しかった。下層からは小型の礫が出土している。底面は凹凸が著しく、段をなしている。主軸方位はS-84°-Eである。				

遺構名	2-13D	図版番号	21、63	規模(大きさ×深さ)	170×80×23
平面形態	靴底形	面積	1.0	重複関係	2-14D→当遺構。
観察	覆土は黄褐色が強く、底面は段状をなし、中層からは弥生時代後期の高坏片が出土している。				

遺構名	2-14D	図版番号	21、63	規模(大きさ×深さ)	不明
平面形態	不明	面積	不明	重複関係	当遺構→2-22H→2-11H。当遺構→2-13D。
観察	覆土は黄褐色が強く、他の遺構と重複しているため不明な点が多い。				

遺構名	2-15D	図版番号	14、63	規模(大きさ×深さ)	深さ24
平面形態	不明	面積	不明	重複関係	
観察	覆土は褐灰色が強く、遺物は白玉が1点のみ出土している。				

遺構名	2-16D	図版番号	21、63	規模(大きさ×深さ)	184×72×7
平面形態	靴底形	面積	1.0	重複関係	
観察	覆土は黄褐色が強く、プラン確認がかなり困難であった。主軸方位はS-66°-Wである。				

遺構名	2-17D	図版番号	21、63	規模(大きさ×深さ)	178×76×14
平面形態	靴底形	面積	1.1	重複関係	2-22H→2-11H→当遺構。
観察	覆土は黄褐色が強く、東側がやや深く、底面は熱を受けて赤化しているかのようであった。主軸方位はS-87°-Eである。				

遺構名	2-18D	図版番号	21、63	規模(大きさ×深さ)	126×60×18
平面形態	靴底形	面積	0.6	重複関係	

観察	覆土は黄褐色が強く、底面は段をなしている。主軸方位はS-75°-Wである。
----	---------------------------------------

遺構名	2-19D	図版番号	21、63	規模(大きさ×深さ)	195×86×28
平面形態	靴底形	面積	1.3	重複関係	2-20H・20・21・29Dと重複。(2-21D参照)
観察	覆土は黄褐色が強く、中層からは弥生時代後期の壺の破片と拳大の礫が少量出土している。				
	底面は段をなし、主軸方位はS-76°-Eである。				

遺構名	2-20D	図版番号	21、53	規模(大きさ×深さ)	120×100×33
平面形態	長方形	面積	1.1	重複関係	2-20H・19D(弥生時代後期)と重複している。
観察	当遺構確認後に2-20H・19Dが発見された。覆土は黒褐色が強く、底面からは四角い木杵状の痕跡が確認されている。壁面は垂直気味に立ち上がり、断面形態は逆台形を呈している。主軸方位はS-6°-Wである。				

遺構名	2-21D	図版番号	21、53	規模(大きさ×深さ)	深さ8
平面形態	靴底形?	面積	不明	重複関係	2-20H・19D(弥生後期)と重複、当遺構→2-22D。
観察	覆土は黄褐色が強く、他の遺構と重複しているため不明な点が多い。2-19D確認後に当遺構が発見された。主軸方位は推定でS-20°-Eである。				

遺構名	2-22D	図版番号	21、53	規模(大きさ×深さ)	266×184×16
平面形態	不整形	面積	3.5	重複関係	2-21D→当遺構、2-20Hと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、下層から古墳時代中期の土師器高坏脚部が1点出土している。				

遺構名	2-23D	図版番号	21、63	規模(大きさ×深さ)	370×200×12
平面形態	靴底形	面積	5.6	重複関係	東側で2-30Dと接している。
観察	覆土は暗褐色が強く、弥生時代後期の土器片が少量出土している。当遺構確認後に2-30Dが発見された。				

遺構名	2-24D	図版番号	21、22、63	規模(大きさ×深さ)	(238)×170×14
平面形態	不整形	面積	(3.4)	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、弥生時代後期の土器片が少量出土している。				

遺構名	2-25D	図版番号	14、21、63	規模(大きさ×深さ)	深さ14
平面形態	楕円形	面積	不明	重複関係	2-26Dと重複している。
観察	底面の状態から当遺構と26Dの2基の土坑に分離したが、1基の可能性もあり、出土した弥生時代後期の土器片もどちらに伴うものかは不明。覆土は暗褐色が強い。				

遺構名	2-26D	図版番号	14、63	規模(大きさ×深さ)	深さ14
平面形態	楕円形	面積	不明	重複関係	2-25Dと重複(2-25D参照)している。
観察	2-25D参照。				

遺構名	2-27D	図版番号	15、59、63	規模(大きさ×深さ)	90×72×(20)
平面形態	楕円形	面積	0.5	重複関係	2-1J→当遺構。(2-1J参照)
観察	覆土は暗褐色が強く、中層から上層にかけて拳大の礫が6点出土している。底面は平坦で、断面形態は逆台形を呈している。主軸方位はS-40°-Eである。				

遺構名	2-28D	図版番号	21	規模(大きさ×深さ)	118×94×16
平面形態	楕円形	面積	0.9	重複関係	2-21H・30Dと重複している。
観察	覆土は黄褐色が強く、主軸方位はS-38°-Eである。				

遺構名	2-29D	図版番号	21、63	規模(大きさ×深さ)	180×76×4
平面形態	靴底形	面積	1.0	重複関係	2-19Dと接している。
観察	覆土は黄褐色が強く、プラン確認が困難であった。主軸方位はS-85°-Eである。				

遺構名	2-30D	図版番号	21	規模(大きさ×深さ)	深さ18
平面形態	靴底形	面積	不明	重複関係	2-23Dと接し(23D参照)、2-28D・21Hと重複。
観察	覆土は黄褐色が強く、西側がやや深い。主軸方位は推定でS-68°-Wである。				

遺構名	2-31D	図版番号	13	規模(大きさ×深さ)	78×60×29
平面形態	不整形	面積	0.4	重複関係	当遺構確認後に2-4Jの主柱穴が発見された。
観察	覆土は暗褐色が強く、上層から古墳時代中期の高坏脚部が1点出土している。(2-4J参照)				

遺構名	2-32D	図版番号	14	規模(大きさ×深さ)	94×48×12
平面形態	靴底形	面積	0.3	重複関係	
観察	覆土は黄褐色が強く、上層からは弥生時代後期の台付甕台部片が出土している。主軸方位はS-60°-Eである。				

遺構名	2-33D	図版番号	14、63	規模(大きさ×深さ)	58×44×22
平面形態	楕円形	面積	0.2	重複関係	2-3J→当遺構。
観察	覆土は暗褐色が強く、上層からは人頭大の礫が1点出土している(2-3Jb参照)。主軸方位はS-24°-Eである。				

遺構名	3-1D	図版番号	33、63	規模(大きさ×深さ)	180×158×10
平面形態	楕円形	面積	2.1	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、下層からは古墳時代中期の甕、台付甕、小型埴や拳大の礫が少量出土している。底面は熱により赤化している。				

遺構名	3-2D	図版番号	32、33、63	規模(大きさ×深さ)	550×340×26
平面形態	靴底形	面積	13.9	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、古墳時代中期の遺物が多数出土している。出土遺物には土師器壺、甕、高坏の破片、須恵器甕や坏身の破片、白玉や焼土塊などがあり、とくに土師器高坏脚部が多く出土				

している。

遺構名	3－3 D a	図版番号	24、25、32、33、63	規模(大きさ×深さ)	深さ12
平面形態	不明	面積	不明	重複関係	北側で3－3 D bと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、土師器片と拳大の礫が少量出土している。東側は二線引により深く攪乱されており、形態など不明な点が多い。				
遺構名	3－3 D b	図版番号	24、25、63	規模(大きさ×深さ)	南北(220)、深さ14
平面形態	不明	面積	不明	重複関係	南側で3－3 D aと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、土師器片が多く出土し、下層からは焼土と共に炭化材や礫が出土している。東側を二線引により深く攪乱されており、形態など不明な点が多い。				
遺構名	3－4 D a	図版番号	24、63	規模(大きさ×深さ)	(414)×240×20
平面形態	靴底形	面積	7.5	重複関係	南側で3－4 D bと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、古墳時代中期の土師器片が多く出土しており、高坏脚部の出土数が比較的多い。下層からは焼土と共に炭化材や被熱礫が多く出土している。また、白玉もわずかではあるが発見されている。				
遺構名	3－4 D b	図版番号	24、32、63	規模(大きさ×深さ)	深さ12
平面形態	不明	面積	不明	重複関係	北側で3－4 D aと、東側で3－5 Dと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、下層からは古墳時代中期の土師器片、須恵器甕口縁部片、拳大の礫や白玉が少量出土している。西側は二線引により深く攪乱されており、また、他の土坑との重複により不明な点が多い。平面形態から判断すると2基以上の土坑が重複しているものと思われる。				
遺構名	3－5 D	図版番号	24、63	規模(大きさ×深さ)	252×206×18
平面形態	楕円形	面積	4.0	重複関係	西側で3－4 D bと、東側で3－6 Dと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、下層からは古墳時代中期の土師器高坏脚部4点と大型の礫2点が出土している。				
遺構名	3－6 D	図版番号	24、63	規模(大きさ×深さ)	224×164×14
平面形態	楕円形	面積	3.2	重複関係	西側で3－5 Dと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、土師器片がわがかに出土している。				
※3－3～6 Dに関しては斜面地に位置し、土師器片を多く包含した厚い暗褐色土が上層に堆積しておりプラン確認が困難であったため、底面の掘り込みから判断して遺構名を付している。また、3・4 Dに関しては2基以上の土坑が重複しているものと思われるため、a・bに分けて記述している。					

遺構名	3-7D	図版番号	31、32、63	規模(大きさ×深さ)	(330)×206×26
平面形態	靴底形	面積	(5.2)	重複関係	
観察	覆土は黄褐色が強く、土師器片、須恵器片、拳大の礫が少量出土している。				

遺構名	3－8 D	図版番号	23、24、63	規模(大きさ×深さ)	深さ 5 ～15
平面形態	不明	面積	不明	重複関係	当遺構→3－2 K。
観察	覆土は暗褐色が強く、古墳時代中期の土師器片、須恵器片、白玉や小型の礫がわずかに出土している。いくつかの土坑が南北に繋がっているものと思われる。				
※ 3－8 D に関しては上層に厚く暗褐色土が堆積しており、プラン確認が困難であった。そのため、底面の掘り込みの状況から判断して、便宜的に南から a ・ b ・ c 土坑としたが、不確定要素が多いため、ここではまとめて記述している。					

遺構名	3-9D	図版番号	23、63	規模(大きさ×深さ)	182×158×14
平面形態	楕円形	面積	2.2	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、中層からは古墳時代中期の土師器片、白玉や小型の礫が少量出土している。				

遺構名	3-10D	図版番号	31、32、63	規模(大きさ×深さ)	(570)×408×56
平面形態	楕円形	面積	17.9	重複関係	西側で3-19Dと重複している。
観察	覆土下層は粘土質の黄褐色土で、中～上層は暗褐色土である。出土遺物は古墳時代中期の遺物が多量に出土しており、上層からは奈良時代の土師器甕も出土している。古墳時代の出土遺物には土師器片、須恵器片、石製模造品(勾玉、白玉)などがあり、土師器片の中では高坏の数が比較的多いが様々な器種がある。須恵器片はもっとも出土数の多い土坑であり、蓋坏、高坏や甕が出土し、高坏脚部片は同一個体が4-6Dから出土している。底面は凹凸が著しく、南側には高まりが認められた。西側で3-19Dと重複しているが、上層部で当遺構の覆土が19Dを切っていたため別の土坑と判断したが、同一の遺構であった可能性がある。				

遺構名	3-11D	図版番号	30、31、63	規模(大きさ×深さ)	198×136×16
平面形態	不整形	面積	1.9	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、下層からは白玉が集中して発見され、上層からは古墳時代中期の土師器片が多量に、須恵器片が3点出土している。				

遺構名	3-12D	図版番号	30、63	規模(大きさ×深さ)	360×192×18
平面形態	楕円形	面積	5.5	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、上層からは古墳時代中期の土師器片が多く出土し、白玉も少量出土している。				

遺構名	3-13D	図版番号	29、63	規模(大きさ×深さ)	124×86×22
平面形態	楕円形	面積	0.9	重複関係	3-6J(弥生時代)→当遺構、3-14・22Hと重複。
観察	覆土は暗褐色が強く、高盤が2点、人頭大の礫が1点出土している。				

遺構名	3-14D	図版番号	29、63	規模(大きさ×深さ)	深さ10
平面形態	楕円形?	面積	不明	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、白玉4点、土師器片と小型の礫が少量出土している。西側は二線引に				

より深く攪乱されており、形態など不明な点がある。

遺構名	3-15D	図版番号	25、63	規模(大きさ×深さ)	(296)×214×14
平面形態	楕円形?	面積	(4.4)	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、中層から土師器片と小型の礫が焼土と共にわずかに出土している。北側は二線引により深く攪乱されており、形態など不明な点がある。				

遺構名	3-16D	図版番号	24、64	規模(大きさ×深さ)	100×74×22
平面形態	楕円形	面積	0.6	重複関係	
観察	覆土は黒褐色が強く、遺物は出土していない。壁面は垂直気味に立ち上がり、主軸方位はS-61°-Wである。				

遺構名	3－17D	図版番号	37	規模(大きさ×深さ)	東西140、深さ19
平面形態	不明	面積	不明	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、中層から拳大の礫が多量に出土している。底面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がり、断面形態は逆台形を呈している。				
※〔訂正〕 I－11グリッドに位置している 3－20Dを17Dに変更した。また、3－18Dは欠番。					

遺構名	3-19D	図版番号	32、64	規模(大きさ×深さ)	深さ24
平面形態	溝状	面積	不明	重複関係	3-10Dと重複している。(3-10D参照)
観察	覆土は暗褐色が強く、中層から白玉が5点出土している。西側がやや深く、北西部の小穴は3-27Hの柱穴になる可能性もある。				

遺構名	3-20D	図版番号	31、64	規模(大きさ×深さ)	150×130×20
平面形態	楕円形	面積	1.4	重複関係	
観察	覆土は黒褐色が強く、中層から古墳時代中期の土師器高坏1点が出土している。底面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がり、断面形態は逆台形を呈している。(3-17D参照)				

遺構名	3-21D	図版番号	38、39、64	規模(大きさ×深さ)	238×196×14
平面形態	不整形	面積	3.0	重複関係	
観察	覆土は黒褐色が強く、遺物は出土していない。底面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がり、断面形態は逆台形を呈している。				

遺構名	3-22D	図版番号	39	規模(大きさ×深さ)	南北156、深さ(15)
平面形態	不明	面積	不明	重複関係	
観察	覆土は黄褐色混じりの暗褐色で、底面のみが確認され、遺物は出土していない。				

遺構名	3-23D	図版番号	40、64	規模(大きさ×深さ)	134×112×12
平面形態	楕円形	面積	1.1	重複関係	
観察	覆土は暗褐色で、遺物は出土していない。底面付近が確認され、南東部がやや深い。				

遺構名	3-24D	図版番号	40、64	規模(大きさ×深さ)	576×302×16
平面形態	靴底形	面積	15.4	重複関係	北側で3-1Hと接している。
観察	覆土は黒褐色が強く、土師器片がわずかに出土している。底面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がり、断面形態は逆台形を呈している。				

遺構名	3-25D	図版番号	40、64	規模(大きさ×深さ)	96×60×20
平面形態	楕円形	面積	0.5	重複関係	西側で3-31Hと接している。
観察	覆土はやや黒褐色が強く、遺物は出土していない。底面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がり、断面形態は逆台形を呈している。主軸方位はS-37°-Eである。				

遺構名	3-26D	図版番号	32、33、64	規模(大きさ×深さ)	364×70×10
平面形態	溝状	面積	2.1	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、土師器片がわずかに出土している。底面は平坦で、南側の3-9Hの桁側柱筋に平行している。				

遺構名	3-27D	図版番号	29、64	規模(大きさ×深さ)	(300)×100×11
平面形態	溝状	面積	(2.4)	重複関係	3-14・22Hと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、古墳時代後期の須恵器片が出土している。				

遺構名	3-28D	図版番号	22、64	規模(大きさ×深さ)	南北236、深さ20
平面形態	不明	面積	不明	重複関係	3-19・21H・29Dと重複している。
観察	覆土は黒褐色が強く、土師器片や山茶碗片が1点出土している。西側を二線引により深く攪乱されているため形態など不明な点が多いが、底面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がり、断面形態は逆台形を呈している。				

遺構名	3-29D	図版番号	21、22、64	規模(大きさ×深さ)	深さ6
平面形態	不明	面積	不明	重複関係	3-19・20・21H・28Dと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、西側で3-28Dと重複しているため、形態など不明な点が多い。				

遺構名	3-30D	図版番号	22、64	規模(大きさ×深さ)	186×50×24
平面形態	溝状	面積	0.8	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、底面は比較的平坦で壁面は垂直気味に立ち上がっている。主軸方位はS-5°-Wである。				

遺構名	3-31D	図版番号	15、64	規模(大きさ×深さ)	(230)×146×10
平面形態	不明	面積	(2.88)	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強い。斜面地に位置しており、プラン確認が困難であった。				

遺構名	4-1D	図版番号	44、64	規模(大きさ×深さ)	198×176×22
平面形態	楕円形?	面積	2.9	重複関係	

観察	覆土は暗褐色が強く、中層から古墳時代中期の様々な器種の土師器片が多量に出土している。その他、須恵器胴部片、拳大の礫がわずかに出土している。西側はテラス状に張り出ている。
----	--

遺構名	4-2D a	図版番号	41、48、64	規模(大きさ×深さ)	(450)×(248)×30
平面形態	靴底形	面積	(8.9)	重複関係	4-2D bと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、古墳時代中期の遺物が多量に出土している。土師器片は多量に出土し、高坏の出土数が比較的やや多く、中層からは須恵器蓋坏の蓋と身がまとまって出土している。その他、白玉や大型の礫が出土しているが、とくに、底面からは礫が多量に確認されている。西側は二線引により深く攪乱されており、やや不明な点が残る。				
遺構名	4-2D b	図版番号	41、64	規模(大きさ×深さ)	(430)×(260)×34
平面形態	靴底形	面積	(9.6)	重複関係	4-2D a・c・仮13Dと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、古墳時代中期の土師器片が多量に出土している。土師器片は高坏の出土数が比較的多いが、様々な器種がある。その他、拳大の礫が少量出土している。				
※4-2Dに関しては複数の土坑が重複しているものと考えられるが、ここでは底面の掘り込みから形態の分かる2基の土坑をa・b土坑とし、南側のものをa土坑として記述している。					

遺構名	4-3D	図版番号	42、64	規模(大きさ×深さ)	712×364×40
平面形態	靴底形	面積	18.7	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、古墳時代中期に属する遺物が多量に出土し、下層から上層にかけて白玉が2,000点以上が土師器片と共に発見された。その他、勾玉形の石製模造品や須恵器片が少量、土製支脚などが出土している。中央部南側は二線引により深く攪乱されており、西と北側にはテラス状の張り出しが認められる。				

遺構名	4-4D	図版番号	41、64	規模(大きさ×深さ)	490×200×20
平面形態	靴底形	面積	(6.9)	重複関係	4-5D(古墳時代中期)・2Hと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、北端のやや深い部分(30cm)の中層からは古墳時代中期の土師器高坏1点が出土している。この落ち込み部分は別の遺構とも考えられるが、覆土の状況からははっきりしなかった。中央部は二線引により深く攪乱されている。この土坑から南へ3-2・3Hを避けるかのように土坑群が繋がっている。覆土内からは古墳時代中期の須恵器片が少量出土している。				

遺構名	4-5D	図版番号	41、64	規模(大きさ×深さ)	356×326×26
平面形態	楕円形	面積	(7.7)	重複関係	4-2D c・4D・仮15D(古墳時代中期)と重複。
観察	覆土は暗褐色が強く、下層から古墳時代中期の土師器高坏や甗の破片、須恵器高坏片や拳大の礫がわずかに出土している。				

遺構名	4-6D	図版番号	41、64	規模(大きさ×深さ)	(680)×300×16
平面形態	靴底形	面積	(15.6)	重複関係	3-10H・4-2Hと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、古墳時代中期の遺物が多く出土している。下層から土師器壺、長頸壺、高坏や甗の破片、土製支脚片、須恵器高坏片や拳～人頭大の礫がわずかに出土し、白玉約10点も発				

見されている。中～上層にかけては土師器片が少量と白玉が約10点出土している。東側は二線引により攪乱され、南側には小溝が伸びている。

遺構名		4 - 7 D	図版番号		43、64	規模(大きさ×深さ)		深さ12～16	
平面形態			靴底形？	面積		——	重複関係		4 - 3 J → 当遺構。
観察		覆土は暗褐色が強く、古墳時代中期の土師器片が多量に、須恵器片が少量出土している。北側では4 - 3 J と重複しているが、その接点から同一レベルで遺物が出土していることから当遺構の方が新しいものと考えられる。							
※ 4 - 7 D 付近の上層部は古墳時代中期の遺物を包含した暗褐色土が厚く堆積しており、プラン確認が困難であった。そのため、4 - 7 D に関しては便宜的にその形態から a ・ b ・ c の 3 基の土坑に分けて調査したが、ここでは、それらをまとめて記述している。									

遺構名	4-8D	図版番号	43、64	規模(大きさ×深さ)	(266)×116×28
平面形態	不整形	面積	(1.9)	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、下層から古墳時代中期の土師器片や拳大の礫1点が出土している。南東側へと浅く溝状に伸び、小穴と重複している。				

遺構名	4-9D	図版番号	43、64	規模(大きさ×深さ)	124×(112)×10
平面形態	楕円形	面積	(1.0)	重複関係	4-4Jと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、土師器片が少量と拳大の礫2点が出土している。				

遺構名	4-10D	図版番号	41、64	規模(大きさ×深さ)	(330)×82×22
平面形態	溝状	面積	(2.1)	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、中層から白玉1点と須恵器片がわずかに出土している。4-2Hの約1.5m北側にあり、その棟に平行するかのように位置している。				

遺構名	4-11D	図版番号	43、64	規模(大きさ×深さ)	126×124×40
平面形態	楕円形	面積	1.2	重複関係	
観察	覆土は黒褐色が強く、上層から拳～人頭大の礫が5点、下層から銭貨が出土している。主軸方位はS-37°-Eである。				

遺構名	4-12D	図版番号	41、48、64	規模(大きさ×深さ)	104×86×28
平面形態	楕円形	面積	0.7	重複関係	南北に走る畦間よりも新しい。
観察	覆土は黒褐色が強く、底面から鉄製鎌1点と紐に通されていたかのような状態で銭貨が出土している。平面形態は長方形に近く、底面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がり、断面形態は逆台形を呈している。主軸方位はS-34°-Eである。				

遺構名	4-13D	図版番号	48、64	規模(大きさ×深さ)	92×72×32
平面形態	楕円形	面積	0.5	重複関係	南北に走る畦間よりも新しい。
観察	覆土は黒褐色が強く、底面から銭貨が出土している。平面形態は長方形に近く、底面は平坦				

で、壁面は垂直気味に立ち上がり、断面形態は逆台形を呈している。主軸方位はS-33°-Eである。

遺構名	4-14D	図版番号	49、64	規模(大きさ×深さ)	96×78×18
平面形態	楕円形	面積	0.6	重複関係	
観察	覆土は黒褐色が強く、底面から銭貨が出土している。平面形態は長方形に近く、底面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がり、断面形態は逆台形を呈している。主軸方位はS-35°-Eである。				

遺構名	4-15D	図版番号	43、64	規模(大きさ×深さ)	88×54×34
平面形態	長方形	面積	0.4	重複関係	
観察	覆土は黒褐色が強く、底面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がり、断面形態は逆台形を呈している。主軸方位はS-43°-Eである。				

遺構名	4-16D	図版番号	42	規模(大きさ×深さ)	108×88×24
平面形態	楕円形	面積	0.7	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、古墳時代中期の土師器片がわずかに出土している。				

遺構名	4-17D	図版番号	42	規模(大きさ×深さ)	100×88×10
平面形態	楕円形	面積	0.6	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、古墳時代中期の土師器高坏4点と拳大の礫2点が出土している。				

遺構名	4-仮1D	図版番号	47、48、65	規模(大きさ×深さ)	(388)×330×20
平面形態	楕円形	面積	(9.7)	重複関係	西側で4-仮3Dと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、古墳時代中期の土師器片と須恵器片が少量出土し、とくに中～上層にかけては白玉や拳大の礫が多量に出土している。				

遺構名	4-仮2D	図版番号	48、65	規模(大きさ×深さ)	東西280、深さ22
平面形態	靴底形?	面積	不明	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、下層からは白玉が2点出土している。北側は二線引により深く攪乱されているが、4-仮10Dと同一の土坑になる可能性もある。				

遺構名	4-仮3D	図版番号	48、65	規模(大きさ×深さ)	612×306×26
平面形態	靴底形	面積	14.8	重複関係	東側で4-仮1Dと、西側で4-仮8Dと重複。
観察	覆土は暗褐色が強く、下層からは古墳時代中期の遺物が多く出土している。出土遺物には土師器片、須恵器片、白玉や拳～人頭大の礫などが出土しており、その内、人頭大の礫には磨痕が認められた。上層部西側からは白玉が集中して発見されている。				

遺構名	4-仮4D	図版番号	48、65	規模(大きさ×深さ)	(572)×254×12
平面形態	靴底形	面積	(10.7)	重複関係	西側で4-仮5Dと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、下層からは古墳時代中期の土師器壺、甕や高坏の破片、白玉と拳大の礫が少量出土しており、上層部東側からは古墳時代中期の須恵器高坏や礫の破片が多く白玉と共に				

出土している。

遺構名	4-仮5D	図版番号	48、65	規模(大きさ×深さ)	200×(170)×10
平面形態	楕円形	面積	(2.2)	重複関係	東側で4-仮4Dと、西側で4-仮6Dと重複。
観察	覆土は暗褐色が強く、下層からは古墳時代中期の土師器片と白玉1点が出土している。				

遺構名	4-仮6D	図版番号	48、65	規模(大きさ×深さ)	144×126×10
平面形態	楕円形	面積	(1.6)	重複関係	東側で4-仮5Dと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、下層からは古墳時代中期の土師器片がわずかに出土している。				

遺構名	4-仮7D	図版番号	48、65	規模(大きさ×深さ)	(340)×(294)×16
平面形態	不整形	面積	(7.0)	重複関係	東側で4-仮8・仮9Dと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、下層からは古墳時代中期の土師器片と拳大の礫がわずかに出土している。				

遺構名	4-仮8D	図版番号	48、65	規模(大きさ×深さ)	(462)×(324)×22
平面形態	靴底形	面積	(11.6)	重複関係	4-仮7・仮9Dと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、中層から拳大の礫が多く、土師器片や須恵器片が少量出土している。				

遺構名	4-仮9D	図版番号	48、65	規模(大きさ×深さ)	(414)×(318)×20
平面形態	靴底形	面積	(9.6)	重複関係	4-仮7・仮8Dと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、上層から古墳時代中期の土師器片、白玉や拳大の礫がわずかに出土している。				

遺構名	4-仮10D	図版番号	48、64、65	規模(大きさ×深さ)	東西266、深さ22
平面形態	不明	面積	不明	重複関係	4-仮11・仮13Dと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、下層から古墳時代中期の土師器片、白玉や拳大の礫が少量出土している。南側は二線引により深く攪乱されており、形態など不明な点が多く、南側に位置する4-仮2Dと同一の土坑になる可能性もある。				

遺構名	4-仮11D	図版番号	47、48	規模(大きさ×深さ)	深さ15
平面形態	不明	面積	不明	重複関係	4-仮10・仮12・仮13Dと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、下層から古墳時代中期の土師器片がわずかに出土している。南側は二線引により深く攪乱されており、また、掘り込みも浅いため形態など不明な点が多い。				

遺構名	4-仮12D	図版番号	40、41、47、48、65	規模(大きさ×深さ)	(494)×(260)×24
平面形態	靴底形	面積	(9.7)	重複関係	西側で4-仮11Dと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、下層から古墳時代中期の土師器片や白玉がわずかに、人頭大の礫1点が出土している。南側は二線引により深く攪乱されている。				

遺構名	4－仮13D a	図版番号	41、48、64	規模(大きさ×深さ)	(312)×(210)×20
平面形態	靴底形	面積	(5.3)	重複関係	4－仮13D bと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、下層から古墳時代中期の土師器甕口縁部片3点、高坏脚部片5点、甕片1点、白玉1点や拳大の礫4点などが出土している。上層からは須恵器大甕片が出土している。				
遺構名	4－仮13D b	図版番号	41、48、65	規模(大きさ×深さ)	(380)×(256)×26
平面形態	楕円形	面積	(7.6)	重複関係	4－仮10・11D・13D aと重複、当遺構→4－仮14D。
観察	覆土は暗褐色が強く、下層から古墳時代中期の土師器壺口縁部片1点、甕口縁部片3点、高坏脚部片4点、白玉1点や拳大の礫2点などが出土している。上層からは須恵器大甕片が多数出土している。				
※4－仮13Dに関しては複数の土坑が重複しているものと考えられるため、ここでは便宜的に北側をa土坑、南側をb土坑として記述している。					

遺構名	4-仮14D	図版番号	48、64	規模(大きさ×深さ)	96×92×32
平面形態	楕円形	面積	0.8	重複関係	4-仮13D b→当遺構。
観察	覆土は黒褐色が強く、下層から土師器小皿1点が出土している。主軸方位はS-44°-Eである。				

遺構名	4-仮15D	図版番号	41、64	規模(大きさ×深さ)	(360)×(306)×10
平面形態	楕円形	面積	(8.1)	重複関係	4-2D cと重複している。
観察	覆土は暗褐色が強く、下層から人頭大の礫1点と古墳時代中期の土師器片がわずかに出土している。				

遺構名	4-仮16D	図版番号	40、41、65	規模(大きさ×深さ)	358×188×5
平面形態	靴底形	面積	(4.4)	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、土師器片がわずかに出土している。				

遺構名	4-仮17D	図版番号	47、65	規模(大きさ×深さ)	深さ14
平面形態	靴底形?	面積	不明	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、下層から古墳時代中期の土師器片や拳大の礫がわずかに出土している。				

遺構名	4-仮18D	図版番号	47	規模(大きさ×深さ)	114×92×8
平面形態	楕円形	面積	0.7	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強い。				

遺構名	4-仮19D	図版番号	47、65	規模(大きさ×深さ)	328×158×22
平面形態	靴底形	面積	6.4	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、古墳時代中期の土師器片、白玉や礫が少量出土している。				

遺構名	4-仮20D	図版番号	48、65	規模(大きさ×深さ)	90×82×8
-----	--------	------	-------	------------	---------

平面形態	楕円形	面積	0.5	重複関係
観察	覆土は暗褐色が強い。			

遺構名	4-仮21D	図版番号	48、65	規模(大きさ×深さ)	180×152×8
平面形態	楕円形	面積	2.0	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強い。				

遺構名	4-仮22D	図版番号	47	規模(大きさ×深さ)	南北136、深さ5
平面形態	不明	面積	不明	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強く、下層から古墳時代中期の土師器壺片1点が出土している。東側は二線引により深く攪乱されているため、形態など不明な点が多い。				

遺構名	4－仮23D	図版番号	47、65	規模(大きさ×深さ)	深さ12
平面形態	不明	面積	不明	重複関係	
観察	覆土は暗褐色が強い。掘り込みが浅く、形態など不明な点が多い。				
※ 4－仮1D以降については複数の土坑が重複しているものと考えられるため、底面の掘り込みの状態によって便宜的に番号を付している。また、上層部は古墳時代中期に属する遺物を多量に包含する暗褐色土が厚く堆積しているが、ここでは主に下層から出土した遺物について記述している。					

IV まとめ

古墳時代の建物群の検討

古新田遺跡の建物群に、ある種の規格・企画性が存在するらしいことは、概報で記した。これらは、建物の方位の近似や配置から指摘したものである。

1区及び2区東半の建物群は、方位の近似性ではC群としたものであるが、1-1・2・3H、2-1・2・3・4・5Hの8棟の建物が「口」字状に配置されている。3区の西半のD群とした建物群は一見すると、3-1Hを中心として「コ」字状の配置である。この他にも、3区東半には一定の範囲に機能の異なる建物が配置され、一定の区画を作っているように見える。また、4区西端にも建物の方位からA群とした建物が「コ」字状に配置されている。

このような建物群は、それぞれがまた、関連性をもっているように思われる。

表-2 古墳時代掘立柱建物の方位と群別

番号	遺構名	方位	群別	番号	遺構名	方位	群別	番号	遺構名	方位	群別
1	1-1	19°E	C	22	2-22	11°E	B	43	3-21	2°E	A
2	1-2	22°E	C	23	2-22	12°E	B	44	3-22	20°E	C
3	1-3	24°E	C	24	2-23	41°E	E	45	3-24	31°E	D
4	1-4	64°E	E	25	3-1	32°E	D	46	3-26	61°E	E
5	1-5	5°W	A	26	3-2	36°E	D	47	3-27	48°E	E
6	1-7	12°E	B	27	3-3	36°E	D	48	3-28	36°E	D
7	2-1	23°E	C	28	3-4	39°E	D	49	3-29	32°E	D
8	2-2	19°E	C	29	3-5	37°E	D	50	3-30	40°E	竪穴?
9	2-3	25°E	C	30	3-6	39°E	D	51	3-31	4°E	E
10	2-4	22°E	C	31	3-7	37°E	D	52	3-32	22°E	C
11	2-5	22°E	C	32	3-8	34°E	D	53	4-1	17°E	C(C2)
12	2-6	4°E	B	33	3-9	26°E	D(D2)	54	4-2	6°E	B
13	2-7	76°E	E	34	3-10	29°E	D(D2)	55	4-3	20°E	C
14	2-8	6°E	B	35	3-11	26°E	D(D2)	56	4-4	1°W	A
15	2-9	6°E	B	36	3-13	23°E	C	57	4-5	3°E	A
16	2-10	12°E	B	37	3-14	2°E	A	58	4-6	8°E	B
17	2-11	5°E	B	38	3-15	9°E	B	59	4-7	3°W	A
18	2-12	9°E	B	39	3-16	15°E	C(C2)	60	4-8	18°E	C(C2)
19	2-13	69°E	E	40	3-17	2°E	A	61	4-9	3°W	A
20	2-14	6°E	B	41	3-19	17°E	C(C2)	62	4-10	72°E	E
21	2-18	7°E	B	42	3-20	19°E	C	63	4-13	4°W	A

※ 本表の計測値は、観察表の棟方位を基準にして、建物の配置を検討する目的で全てが90°以内に収まるように換算してある。

※ 概報の表には一部誤記があったためにここで訂正した。

※ 時期の明確でないものの内、建物配置の検討に用いた建物の方位はこの表に含めた。
したがって、弥生時代の建物の表と重複している例もある。

各建物の方位による群別は、「ロ」字状配置の建物群8棟における方位のずれである 6° を基準として行ったものであるが、この分類がどの程度有効であるかは課題として残っていた。

したがって、ここでは方位の近似した建物群と、その群の配置の規格・企画性という点から遺跡全体の中から特定の区画を発見し、その後、これに含まれない建物群の区画も検討し、さらにこれらの同時性や機能について検討したい。

検討の方法

住居跡などが群在するかのようにみえる集落跡において、その集落の構成を検討するのは、八王子市中田遺跡(1)などのように、検討の方法によっては幾つかの結論が導き出され(2・3・4・5)、その評価が容易でないことをうかがわせている。

したがって、ここで行う方法も絶対的なものではなく、最終的な考察への過程として位置付けている。

検討の方法は次のようである。

第1段階 古墳時代中期に属さない遺構を削除した。また、所属の不明確なものは検討の対象として残しておいた。

第2段階 主として掘立柱建物跡の棟方位を計測した後に、「コ」字状、「ロ」字状配置などの棟を直交させる建物配置を想定して、方位角を 90° のブロックに収まるように換算した。たとえば、2-4Hは、南優先で棟方位を測定するとS- 68° -Wとなるが、これは 22° Eに換算される。ただし、デスクワークとして、南向きに対する多少の東西のずれは、基本的には南向きと理解した。したがって、1-5Hは、S- 85° -Eとはしないで、 5° Wとした。

次に、概観から一定の規格・企画性があると認められる「コ」、「ロ」字状配置の建物群の最大方位差を測定し、これを基準にA・C・D群を設定した。さらに、C・D群は近似したものをそれぞれC2・D2群とした。B・E群は、それらの設定後に残ったものを群別したもので、確たる基準はない。

したがって、この建物方位による群別は、当初からある種の規格・企画性を前提にしている。

第3段階 特定の区画を作成した。これは、松野遺跡(6)を始めとして、小深田遺跡(7)、大平遺跡(8)などの4-6世紀の遺跡の中に、方形の区画を持つ例が少なからず存在するという事実にしたがって、遺構としての区画は存在しないが、規格・企画としての区画を予測したものである。

第4段階 規格・企画性が顕著とみられる例について区画の設定が可能か否かを確認して見た。これは、第I-III区画としたものであり、原則的には区画の設定が可能であるという結論を得た。

第5段階 第I-III区画の設定方法を利用して、同一の群が集中する部分を区画した。これは、第1-4区画であるが、第1-3区画については第I・III区画との関連も配慮した。

第6段階 以上の作業の中で、どの区画にも属さなかった資料を対象にして、集中性、規則性、傾向などを検討して区画の設定を行った。これは、第5・6・8区画などである。

第7段階 すべての建物跡に区画を設定した。

第8段階 各区画の中で、遺構の重複や切り合いを利用して遺構の変遷を検討した。

区画の設定

1) 群倉域

「ロ」字状配置の建物群の外郭を一定の大きさで区画してみる。

この区画は、一般的にみられる柵・塀・土塁・堀といった施設を想定したものであるが、当遺跡で

は、外郭の施設がほとんど発見できなかったという特徴を逆に利用して、便宜的に外郭を設定してみた。

「口」字状配置の建物群を、一定の長さ（ここでは25.5cmとする。）を1単位として、東西200単位、南北160単位の長方形で囲った。この囲みを外区画と仮に呼ぶ。

外区画線から40単位内側に区画線を引いたのが、第1図の破線である。この破線を内区画線とし、内区画線に囲まれた部分を内区画と仮称する。また、外区画線と内区画線とで囲まれた部分を側区画と呼び、側区画の内の四隅は特に隅区画と仮称する。

このような区画（第I区画）を行うと、8棟の建物は全て側区画に配置されていることが解る。

さらに外区画の二等分線を引き、それぞれを縦中軸線、横中軸線と仮称する。

この縦中軸線を基準に見ると、決して左右対称ではないが、左右に等質の建物が同数存在していることが解る。

この2点と、四隅に何にもなく、かつ、中央にも何にもないという点が、一見して規格・企画性を感じさせる原因になっているように思われる。

前面の側区画には2棟の庇付き建物、左右の側区画には中型の倉庫、あるいは神殿、高殿風の建物が各1棟、奥の側区画には倉庫4棟が配置されているわけであるが、ここにも一定の規格・企画性が見られる。

次に、個々の建物同士の関連や、区画と個々の建物との関連を見ると次のようなことが指摘できる。

① 1-2Hと2-5Hは類似した建物であるが、約100単位の中に納まる。しかし、中軸線に対しては左右対称ではなく、柱通りも若干ずれる。



第4図 第I区画 (1:400)

- ② 1-3 H、2-1 ~ 3 Hは倉庫と思われる建物であるが、100単位の中に4棟が並んでいる。これらの4棟の内、1-3 H、2-1・2 Hは柱通りが一致する。
- ③ 2-1 Hと2-3 Hの間は40単位である。
- ④ 同様に1-3 Hと2-2 Hの間も40単位である。
- ⑤ 2-4 Hは、横中軸線と棟通りが一致するが、1-1 Hはすべてが横中軸線より前に配置されており、強いて言えば2-4 H南東隅柱と、1-2 H南西隅柱が対称の位置になるが、その間は138単位と端数になる。
- ⑥ 2-5 H南側柱通りと、2-1 H棟通りはほぼ一致し、この間は約100単位である。
- ⑦ ⑥の線の間(50単位)から直角に西に30単位の所に2-4 Hの棟がある。

このように見て行くと、ある種のモジュールによって区画され割付けが行われていたと理解できる。しかし、一方では建物の規模はここで考えているモジュールとはほとんど一致しないし、建物と建物の間隔なども端数になることの方が多い。

以上のような状況を見ると、②、③、④などから4棟の倉庫は同時に建てられたと見るよりも、2-1 Hと2-3 H、2-2 Hと1-3 Hとがある程度時間を置いて建てられたとみた方がよいのかも知れない。また、相対的には縦中軸線の西側の建物の方が規則性を持っているように思われる。

2) 居館域

第5図は、C群に属する建物6棟、A群に属する建物3棟が集中している3区東半部に外区画を設定したものである。

C群の場合には「口」字状配置の建物群との関連も考慮に入れた。

「口」字状配置の建物群の東外区画線を南に延長し、そこから10単位北にずらした部分をC群の東外区画線とし、6棟すべてが囲めるようにすると、「口」字状配置の建物群の西外区画線から40~50単位の所に群の東外区画線が設定できる。

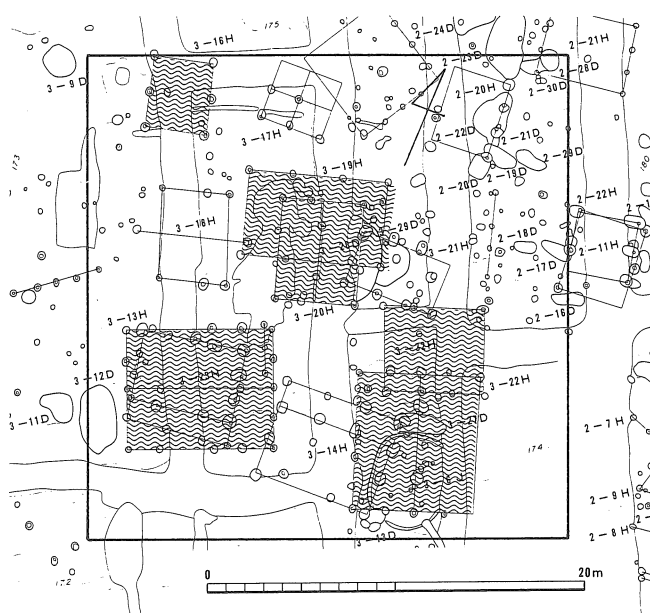
図では、40単位西を東外区画線として、100単位の正方形を外区画(第1区画)とした。

C群の場合、6棟の建物は重複しないように3棟ずつに分けることができる。この二者を第1段階(3-13・32・19)、第2段階(3-14・20・16)とする。

第1段階の建物は、100単位の外区画の中に収まるが、周囲に十分な余裕があり、外区画をさらに縮めても良い状況である。第2段階の建物は、南北の外区画には全く余裕はないが、東西の外区画には余裕がある。

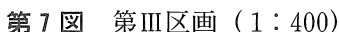
したがって、この外区画は小さくするか、「口」字状配置の建物群との関連を検討し直す必要があるかも知れない。

A群の外区画(第2区画)は、4区西端のA群に属する「コ」字状配置の建物群の東外区画線を、北に140単位移動した部分を西外区画線としたもので、南外区画線は「コ」字状配置の建物群の北外区画線を80単位移動した。区画の大きさはC群になら



第5図 第I区画(1:400)

しかし、3-24Hは、3-14・22・23H・4-4Hなどと共に大型に属する建物であり、無視でき



ない。3-10・11・28・29 Hなども群を構成する一部と考えたい状況にある。

この群は、比較的大型の建物が多い点と、近接していることから、わずかな方位の違いでも図上ではかなりずれているようになるが、現地ではあまり方位のずれを感じさせない。これは、3-2・3・4・5・6・7 Hがきわめて近い方位を持ち、3-1 Hはこれらと比較するとややずれるわけであるが、隣接する4-6・3-24 Hなどとは近似し、3-28 Hが両者の中間に入ることによって均衡が保たれた形になっているためであろう。

基準になる建物として3-1 Hを選んだが、あくまでも、3-1 Hを中心とした「コ」字状配置の建物群があるという前提である。

4区西端の「コ」字状配置の建物群と同様の方法を用いたが、東西140単位、南北120単位の外区画（第Ⅱ区画）とした。また、内区画は他の例と同様に外区画から40単位内側に設けた。

この結果、側区画には3-1・3・5・6・7・8 Hが含まれ、隅区画には3-10 Hと4-6 Dが含まれた。「コ」字状配置を前提にした場合の3-2・4 Hは、側区画と隅区画とにまたがっている。また、類似した方位を持つ3-27・28 Hも同様であり、3-11 Hは内区画に含まれた。

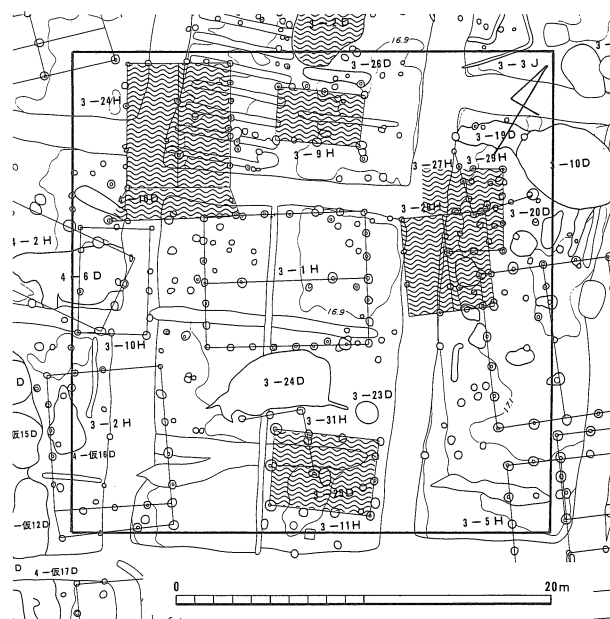
次に、3-1 Hと3-24 Hは、重複の仕方が双方を規制しあっているため、両者の間には有機的つながりを持った新古関係があると考え、3-24 Hを中心とした区画を考えてみた。

3-24 Hを中心に「コ」字状配置の区画を作ることとは不可能であるために、3区東半の建物群のように、100単位四方の区画（第3区画）を設定した。この区画には、先の「コ」字状配置の区画に適合しなかった内の3-2・4 Hを除いたものが含まれる。

したがって、ここでは二つの区画が考えられ、3-24 Hを中心とした区画は、第1・2区画に類似



第8図 第Ⅱ区画 (1:400)



第9図 第3区画 (1:400)

してくる。

この両区画の変遷は後に記す。

4) その他の区画

「ロ」字状配置の建物群、「コ」字状配置の建物群など、概観から何らかの規格・企画性が想像される例を中心にして、区画を設定し、その区画との整合性を検討して見た。また、これまでの外区画の設定で区画内に取り込まれたのは、方位からA・C・D群としたものであるが、これらの群に属してはいるが、除外されたのは1-5H・4-5H(A群)、4-1・8H(C群)の4棟である。したがって、高い確率で区画内に取り込まれたと見て良いことになる。

3区東半に見られた第1・2区画や、3区西半の第3区画は、この作業の途中で考えたものであるが、次に、以上の区画内に収まらない建物について、方形区画を前提に検討する。

方形外区画内で、群を形成する形態としては、次のようなものを予測した。

① 「ロ」字状配置の建物群の内区画に所在する2-6J、2-6・13・14Hは、周辺から孤立しており、一つの群であろう

この前提に立つと、掘立柱建物と竪穴住居とで群を形成する可能性がある。

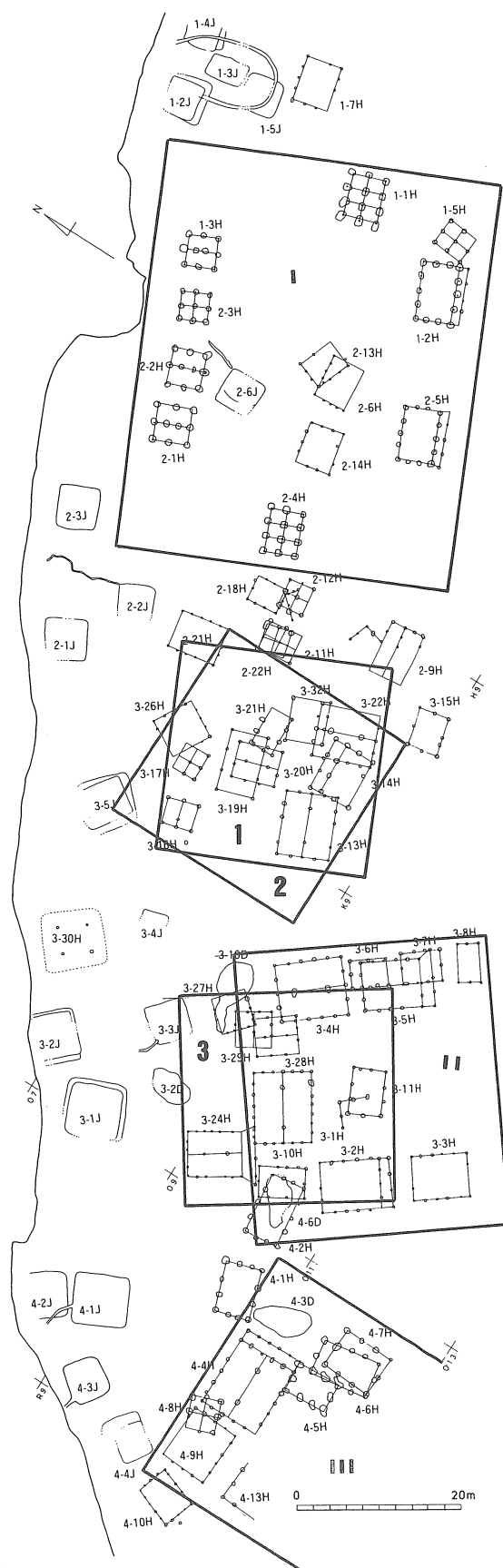
② すでに設定した方形外区画から、掘立柱建物だけの群がある。この群では異なった機能を持つと思われる建物同士で群を作るが、大別すると、総柱の建物を含む群と含まない群とがある。

③ 竪穴住居が北縁に集中しているが、この部分には掘立柱建物の分布が希薄である。したがって、竪穴住居だけで群を作ることもあり得る。

この区画を考えるには、建物の方位は、他の遺跡の事例で見られるように、極端な規制はなかったという前提を置いた。また、外区画は80・100・120・140単位四方を基準で行ったが、これは、すでに設定した区画で用いた長さである。

区画の概要

第4区画 3区東半のB群が密集している地区の南端にある。区画の設定が困難な場所である



第10図 第I～III、1～3区画設定状況

が、2-11・12・22Hを取り込んで総柱建物のある区画を予測した。

2-8・9・11・12・22H、3-15Hの他に、2-7Hが所在するが、方位のずれが大きい。また、弥生時代に含めた2-10Hは方位的にはこの群に含めることができる。

区画の方位はB群に類似する。

第5区画 「ロ」字状配置の建物群内にある。2-6・13・14H、2-6Jから構成される。しかし、2-13Hは、極端に方位が違っているため、別の群を構成する可能性が高い。また、弥生時代に含めた1-9Hは、この群に含まれる可能性もある。

区画の方位はB群に類似する。

第6区画 1区東端にある。1-7H、1-2～5Jが含まれるが、弥生時代とした1-1Jは、古墳時代の竪穴住居と完全に重複している可能性もあるので、これも含める。また、弥生時代に含めた1-8Hも所在する。

2-3Jは、竪穴自体は小型だが、1-1Kが周堤帯に関する溝と考え、一部竪穴構造の住居跡とした。

区画の方位はB群に類似する。

第7区画 第4区画の北側にある。2-18・21Hが含まれる。

2-21Hは、梁間4間、桁行5間になる可能性が高い。2-11・22Hは、総柱建物の可能性が高い。第4区画との重複の状態を見ると、別の区画の設定も可能なように思われる。

区画の方位はB群に類似する。

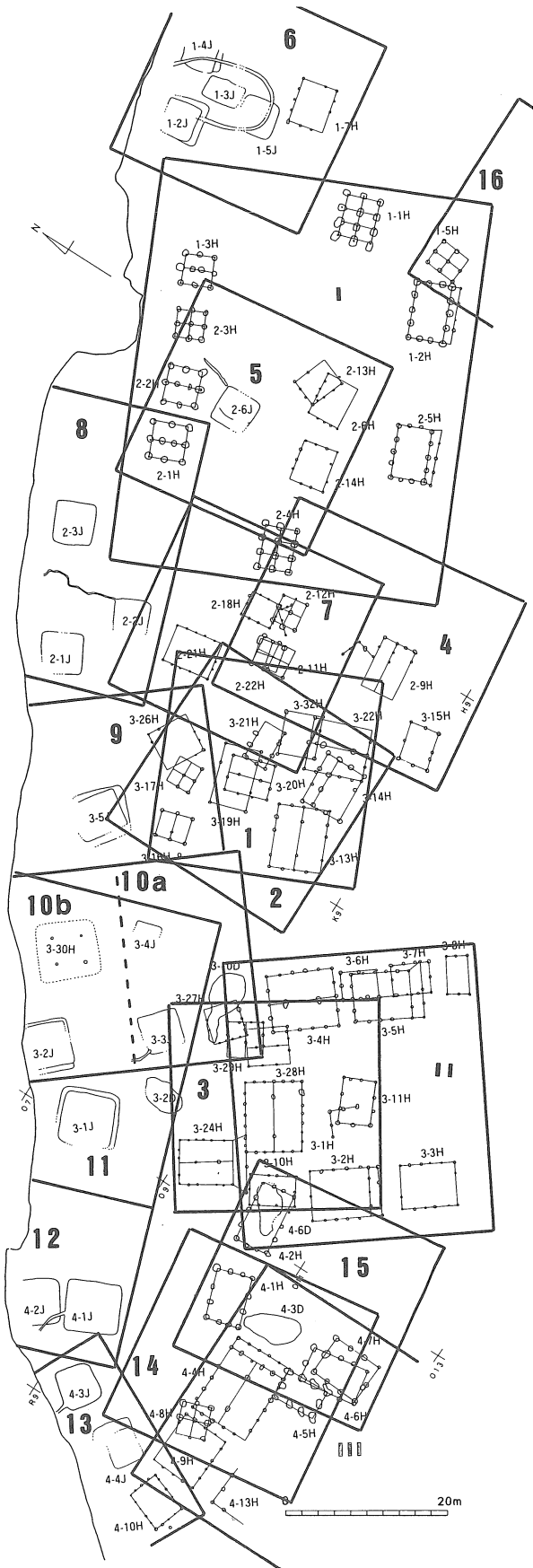
第8区画 2区の北端に所在する。2-1・2・3・10Jが含まれる。

2-10Jは、深耕による攪乱を受け、柱穴が残存しているだけである。

2-1・2・3Jは、方位の類似した竪穴である。区画内には、方位の類似した掘立柱建物は所在しない。

区画の方位はC群に類似している。

第9区画 3-5J、3-26Hを取り込む形で設定した。



第11図 各区画の設定状況

区画の方位はD群に類似している。

第10区画 3-13Hの北西側に5本の小穴が直線的に並ぶ部分があり、この方位は3-2・3Jや3-30Hと類似しているためにこれを区画の基準に考えてみたが、南北が140単位程度になる。

3-30Hは、竪穴の柱穴だけが残存した例であろう。また、北半と南半とに別けることが可能とも思われる。

区画の方位はD群に類似している。

第11区画 3-8Da~3-8Dcにかけて、6本の小穴がほぼ直線的に並ぶため、これを区画の基準にした。この区画の方位とは、4-1・2J、3-1・4Jが類似している。しかし、これらを囲むと東西が220単位程度になるために二つの区画に別けた。

この区画は、東西140単位、南北100単位の区画とした。区画の中には3-1・4Jが含まれる。大半が第10区画と重複しているため、区画内に含まれる建物は多いが、方位の類似性から3-1・4Jがこの区画に伴うと考えた。

区画の方位はC群に類似している。

第12区画 第11区画の西側に設定した。東西80単位の小さな区画であるが、4-1・2・5Jが含まれる。

4-1Jと第11区画に含まれる3-1Jは、規模の類似した竪穴であると共に方位も類似している。

区画の方位はC群に類似している。

第13区画 4区西端に所在している。4-10H、4-3・4Jが横一直線に並んでいる。同じ区画のなかに4-11Hが含まれるが方位のずれが大きい。また、この建物は、奈良時代の須恵器を出土している4-12Hと類似した方位をもっているために、奈良時代に属する可能性がある。

区画の方位が類似するものがない。これは、自然地形の制約によるものと理解している。

第14区画 方位がC群に属する4-1・3・8Hを取り込む形で100単位四方の区画を作った。A群に属する4-5Hもこの群を構成するものであろう。

周辺の建物との調和を考えると、区画の方位はB群に類似する。

第15区画 第14区画を移動した形で設定した。4-2・7Hの2棟で群を作ると考えられる。

区画の方位はB群に類似する。

第16区画 1-2H東側に一部が調査用地外となった総柱建物が1棟所在する。この建物は用地南側に続く区画の一部と考えて区画を設定した。

区画の方位はA群に類似する。

各区画の関連性

古新田遺跡から発見した建物群に一定の区画を設けて、それとの適合性を検討してみた。この区画は、「ロ」字状配置の建物群、「コ」字状配置の建物群、有力と思われる建物を内在している第Ⅰ~Ⅲ、第1~4区画では蓋然性を強く感じることができた。また、これらを援用する形で行った第5区画から第16区画に関しては、妥当と思われる部分と、無理を感じる部分があった。これには、すべてを方形の区画に統一して規格的に考えたため生じた無理もあったであろうし、設定の基準に無理があった場合もあろう。

次に、各区画の関連性を整理したいが、事前に区画の特徴を整理する。

区画内の建物の特徴

① **方形区画Ⅰ類** 「ロ」字状配置の区画である。外区画（側区画、隅区画）と内区画とがあり、内区画は広場として機能する。隅区画には建物はなく、側区画だけに限定して建物がある。第Ⅰ区画が

該当する。

② 方形区画Ⅱ類 「コ」字状配置の建物群の区画である。外区画と内区画とがあるのはⅠ類と同じだが、正面の側区画はない。内区画は広場として機能する。建物は側区画と隅区画とにあるが、隅区画のどちらかに、大型の土坑を伴っている。第Ⅱ・Ⅲ区画が該当する。

③ 方形区画Ⅲ類 Ⅳ類と類似しているともいえるが、比較的大型の建物を背後におき、中央に広場的空間を持っている例でⅡ類とも類似した部分がある。土坑を伴う可能性が高い。

第3区画が該当する。

④ 方形区画Ⅳ類 比較的大型の建物を主家として、数棟で1群を構成する例で、総柱の建物を伴うものと伴わないものがある。土坑を伴う可能性が高い。

第1・2・4区画が該当する。

⑤ 方形区画Ⅴ類 掘立柱建物数棟で群を構成する例で、総柱の建物を伴うものと伴わないものがある。

第7・14・15区画が該当する。

⑥ 方形区画Ⅵ類 掘立柱建物と竪穴の建物とで群を構成する例で、掘立柱建物が多い場合と少ない場合とがある。

第5・6・9・10・13区画が該当する。

⑦ 方形区画Ⅶ類 竪穴だけで群を構成する例である。

第8・11・13区画が該当する。

区画として捉えた場合に7類が認められたが、これらの内で、Ⅲ～Ⅶ類は階層差を意味していると考えられる。しかし、総柱の建物を伴うか伴わないかという点は、Ⅳ類とⅤ類の双方に該当する要因であり、Ⅳ類とⅤ類では、はっきりとした差異が認められることから、その1点からでは階層差を指摘できない。また、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類は、それ自体がより高い階層を予測するものではあるが、単独で考えられるものではなく、他の区画との組み合わせで考えなくてはならないものであろう。

遺構の切り合い関係

遺構の切り合いは少なからず見られるが、確認できた例は極めて少ない。今、確認できた例を掘立柱建物に限って上げると次の5例である。

2-22Hと2-11Hでは、2-11Hの方が新しい。3-7Hは3-5Hよりも古い。3-14Hと3-22Hは1箇所では柱穴の切り合いが確認され、3-14Hの方が新しい。4-4Hは4-5Hよりも古い。4-7Hと4-6Hの柱穴の切り合いは、2箇所では確認できたが、いずれも4-6Hの方が新しい。

集落の変遷

以上の資料だけでは集落の構成状況は把握できないために、建物の方位の類似性や規則性、あるいは区画の設定による群別を行う他に、多くの仮説を立ててみた。

方位の類似性では、区画を設定する前提になったように、建物の構築にあたって意図的に方位を統一したとみることができた。きわめて不安定な方位をもつE群も、区画を設定することで2-13H、3-26・27H、4-10Hなどは区画の中に取り込むことができた。しかし、なお数棟が所属不明のままとなっている。この所属不明の例は改めて検討すると、所属する区画が予測できたものを中心に集落の構成状況を検討する。

方位による群別と、それに伴って行った区画の設定では、A・C・B群は数の差はあっても、遺跡の全域に分布していることが理解できるが、D群は3区に限定されて分布している。また、A群に属

する区画は、居住域には見られない。

D群の分布は、3区に限定されているわけだが、これらの内で第Ⅱ・3区画とした部分の掘立柱建物を特に注意してみると、この部分にはA・B・C群がまったくみられないで、D群単一になっている。このことは、他の建物がこの区画を避けて建てられているとも理解できる。

この前提に立つと、第Ⅱ・3区画は遺跡の存続している大半の期間存在したといえることになる。事実、第Ⅱ・3区画は2～3期は存続したと理解できる重複関係を示しているが、これは、翻って考えれば、同じ時期に方位を異にする群も存在した可能性があるともみなくてはならないし、それは、第Ⅱ・3区画と他の区画との係わりに限定される必然性もない。

表－3は、これまで続けてきた作業に基づいて、集落の消長を予測したものである。この集落は、基本的には5世紀後半でもTK208型式の存続期間程度しか存在しないわけであり、その意味では各期は非常に短いことになるが、3期には別けることが可能である。また、各期には幾つかの段階が存在するようであるが、その中でも比較的顕著な部分に限って段階を定めた。

期と段階とに区別して集落の状況をみると、現実には方形区画Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ類は無意味同然になる部分もある。また、竪穴の方位の一致、不一致は時期の差とは直接的には関連しないで、家族単位の内容であることが解る。

次に各期と段階の状況を表－3と第12～14図を参考にして記すが、これは、すでに記した内容の整理である。

I 期

いわゆる豪族居館の体裁を整える時期である。「ロ」字状配置や「コ」字状配置の建物群は内的・発展段階的に成立するとみるよりは、当初からある程度計画されたものと考えた方が妥当と考え、矛盾のない範囲でこれを優先した。

建物の重複関係から二つの段階を考えた。

I 期第1段階 3区西半に、主館域としての「コ」字状配置の建物群が出現する。

「コ」字状配置の建物は、当初、3－1・3・6・7・8Hと4－6Dで構成したが、3－6・7Hは3－5Hに建て替えられる。また、この時、3－8Hは廃止された可能性がある。

3区東半に居館域が成立する。この部分ではC群の方がA群より古いことは指摘できるが、C群に属する6棟の組み合わせや新古関係は解らない。したがって、あくまでも予測である。

1・2区の群倉域は、成立していたとも考えられるし、4棟の倉庫の配置関係などをみると、一部がこの段階に建てられたともいえる。

居住域では第13区画、第10区画南半、第9区画が存在したと考えられる。

I 期第2段階 主館域では3－2・4Hが建てられ、4－6Dは3－10Dに移動し、4－6Dの跡には3－10Hが建てられる。

「コ」字状配置の建物群はこの段階に完成する。

居館域では、3棟すべてが建て替えられて、3－22Hを主屋として3－20・16Hが伴う。この建て替えによって、主屋の棟の方位が90°変わることになった。

群倉域の建物はすべて完成し、「ロ」字状配置の建物群となった。

居住域では、新たに第8・11・12区画が出現するが、第11区画は第10区画と重複する。また、従来の区画では、それぞれに建物の移動・建て替えなどが行われる。この段階で消滅する区画はなく、第10区画だけが北半に移動する。



第12図 I期の集落 (左I a期、右I b期)

II期

基本的には、I期と同様に主館域・居館域・群倉域・居住域にわかれた居館構造を示すが、後半には居住域の建物の減少、群倉域の廃棄ないしは移動など衰退化の傾向になる。

主館域が4区西端（第Ⅲ区画）に移動する。この部分は、4-4Hを主屋とし、4-7・9・13Hが伴う。また、4-3Dも伴うと考えられる。

3区西半の主館域には、3-24Hを主屋として3-9・11・28・29H、3-2Dからなる区画（第3区画）が成立する。この区画では、3-28・29Hが重複しており、小段階がある。

居館域も同じ場所ではあるが、すべてA群の方位を持った建物に建て替えられる。

群倉域の動向は不明であるが、第16区画が出現するころには廃棄されたと考えられる。

居住域では、新たに出現する区画はなく、従来の区画内で建て替え・移動が行われるが、第9・13区画は廃棄される。

III期

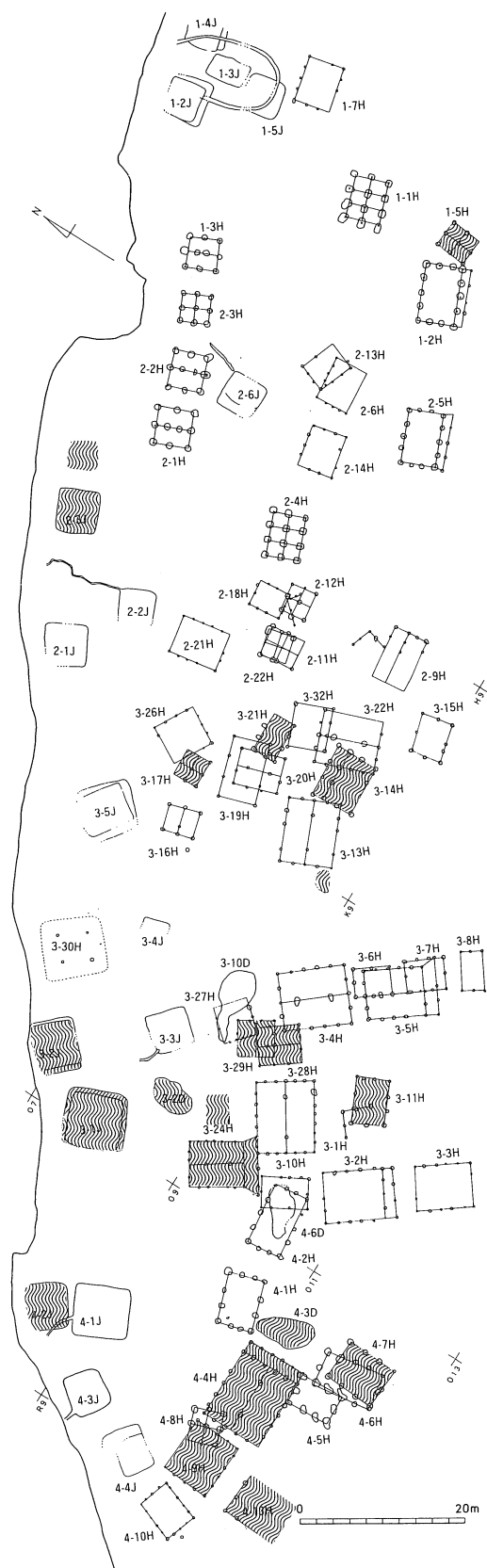
III期は、建物の重複関係などから二つの段階に別けられる。この時期には、古新田遺跡を象徴した「コ」字状配置の建物群や、「ロ」字状配置の建物群は消滅し、いわゆる豪族居館としての体裁に大きな変化が見られる。第6区画のように一般的な集落には所在しないであろう区画もあるが、この区画も後半にはなくなり、集落の規模も小さくなる。

III期第1段階 II期に所在したすべての建物群は廃棄され、すべてが新しくなる。

第4区画は、3-15・1-10・3-11Hが規格性のある配置をみせ、2-11・12・22Hが背後の倉庫として所在する。この区画が正しい設定であるという前提では、居館域の延長と考えられる。

第15区画は2棟の掘立柱建物から構成されるが、その位置は主館域の中にあり、やはり主館域の変化と見ることも可能である。

第5区画は竪穴1軒、掘立柱建物2棟の群で



第13図 II期の集落



第14図 III期の集落 (左III a 期、右III b 期)

あるが、群倉域の内区画にある点は興味深い。

第6区画は、遺構の切り合い関係が解らないために、群の構成が定かではない。しかし、2段階以上あることは充分考えられる。

Ⅲ期第2段階 第6・7・14区画だけになる。

第14区画は三つの区画の中では最も有力な区画であるが、かつての面影はない。

古新田遺跡の評価

古新田遺跡の建物群についてはこれまでに記したように、規格・企画性のある建物群によって構成されると共に、最新構造の建物の存在など、少なくともⅠ・Ⅱ期においては、農耕ないしはそれに準ずる生業に従事している集落の普遍的姿とは考えられない。だからといって直ちに居館であるとするものではないが、これまでに発表された古新田遺跡の評価を整理する。

宮本長二郎氏は、住居としての伏屋式竪穴住居（B1）、住居としての地床式掘立柱建物（D1）、公共の場としての掘立柱建物（D2）、倉庫としての高床式建物（E3）、祭儀の場としての高床建物（E4）から構成される集落とした。各建物群では、「コ」字状配置の建物群を主館域、方形区画Ⅳ類を居館域、「ロ」字状配置の建物群を群倉および管理棟域の三つのブロックに分け、北縁部を竪穴住居の範囲とされた。「ロ」字状配置の建物群の内、左右の側区画にある総柱建物を神殿あるいは高殿と考えた。また、この種の建物の一部は、古墳時代中期に入って、新たに朝鮮半島から移入されたものとされた。さらに、原之城遺跡や三ツ寺遺跡は古新田遺跡の系統を引継ぐものと規定された（注9）。

建物群の機能を意識した名称が付けられた最初であり、当報告書でもこの用語を用いている他、建物群の一部が古墳時代中期に移入された新進のものである点や、三ツ寺遺跡などとの系譜が示された点などきわめて有意義であると考えられる。

また、同じ時に、橋本博文氏は「古新田遺跡では、倉庫址とその管理棟址と思われる建物址が複数左右対称に配置され、しかも静岡県地方最古式の須恵器が大量に出土し、一般集落とはとても考えがたい。周囲に濠・土塁・柵列等の外郭施設は確認されなかったが、群馬県赤堀茶臼山古墳の家形埴輪群に対比され、これも居宅と呼ぶことはできないのか。」とされている。

居館の概念から見た場合の古新田遺跡の問題点は、この指摘の中にある（注10）。

石野博信氏は、まず左右対称に近い建物配置の重要性を指摘している。「コ」字状配置の建物群と、「ロ」字状配置の建物群が同時に存在し得たとすれば、前者は、政治的空間をもつものであり、後者は、庇付建物を仲介として祭祀と経済の空間を持つものであらうとされた（注11）。

各群の名称はないが、機能を明確に指摘したものである。

小笠原好彦氏は、「コ」字状配置の建物群と「ロ」字状配置の建物群は、家形埴輪に象徴された居館

表-3 建物群の消長

期 区画名	Ⅰ		Ⅱ	Ⅲ		備 考
	1a	1b		3a	3b	
Ⅰ		○	→			群倉域
Ⅱ	○	○				主館域
Ⅲ			○			
1	○	○				居館域
2			○			
3			○			
4				○	→	
5				○		居住域
6				○	○	
7					○	
8		○	→			
9	○	→				
10	○	○	→			
11		○	→			
12		○	→			
13	○	→				
14					○	
15				○		
16			○			

の空間構成が、二分割して配置されたとみなしうるかも知れない。と考えられている（注12）。

さらに、「ロ」字状配置の建物群に含まれる床束が2本の例や、柱穴が方形の例なども加えて、畿内から導入された諸技術によって構築されたとみなしてよいとされた。また、「他の豪族居館と異なり、堀・柵などの区画施設が見つからないが、豪族居館と同じ性格のものとみなしてよいであろう。」と指摘されている（注13）。

安部義平氏は、極めて慎重な考えをされているようである。これは、居館の定義を考えた時に、外郭施設が発見されていないことからくる疑問と思われる（注14）。

藤田和尊氏は、豪族居館をA型とB型に分けているが、古新田遺跡はB型に含められている。B型は、「幅の広い濠を伴わない邸宅というべきもの」と規定され、この中には松野遺跡や大園遺跡集落Aなどが含まれている（注15）。

この見解は安部氏に近いように思われる。

鈴木敏則氏は、「現状では総柱建物は古墳時代中期以降、県内では浅羽古新田遺跡の段階から普及すると考えておいた方がよいだろう。」との見解を示し、県内での総柱建物出現期の遺跡として古新田遺跡を位置付けた（注16）。

以上の諸氏の他にも、辰巳和弘氏（注7）、植木 久氏（注8）、平野吾郎氏（注9）らもそれぞれの見解を示されている。

柴田は、規格・企画性のある建物群は、3区西半の「コ」字状配置、1・2区の「ロ」字状配置の他にも4区西端の「コ」字状配置や3区東半の建物配置が存在し、それらが数期に渡って変遷していることを指摘した（注20）。また、古新田遺跡の建物群は、いわゆる豪族居館として理解するが、それは集落全体の中の一隅に出現したもので、傑出したものではない。また、遠江地方の古墳築造の動向からは、その支配領域は浅羽平地程度であり、さらに有力な居館が存在することを予測した（注21）。

このように、発掘調査が終了して間もない時期ではあるが、すでに古新田遺跡の評価が相当鮮明に現れている。これらの評価に対しては悉く納得できるものであり、前段で行った建物群の整理は、その見解に従って補強を行ったものに他ならない。

したがって、ここではさしたる考察は必要としないが、古新田遺跡が高度な規格・企画性に基づいて成立した遺跡であったことは指摘しておきたい。これが、いわゆる豪族居館として理解されるのか否かについては絶対的確認はないが、5世紀代の遠江地方にあって、高位の階層との関連なくして成立したとは考えられないとすれば、いわゆる豪族居館に類する例としなくてはならないであろう。

注

注1 八王子市中田遺跡調査会 『八王子中田遺跡』資料編1・II・III 八王子市文化協会 1966～1968

注2 中井貞夫 「古墳時代後期の集落－東国を中心として」 『考古学研究』20－1 考古学研究会 1973

注3 服部敬史 「関東地方における古墳時代後期の集落構成」 『考古学研究』25－1 考古学研究会 1978

注4 小笠原好彦 「古墳時代竪穴住居集落にみる単位集団の移動」 『国立歴史民俗資料館研究報告』第22集 第一法規出版 1988

注5 都出比呂志 『日本農耕社会の成立課程』 岩波書店 1989

- 注6 千種 浩 『松野遺跡』発掘調査概報 神戸市教育委員会 1983
- 注7 焼津市教育委員会 『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅲ 焼津市教育委員会 1984
- 注8 鈴木敏則 「静岡県大平遺跡」 『季刊 考古学』36 雄山閣 1990
- 注9 宮本長二郎 「古墳時代の集落構成－豪族館を中心に」 『古代豪族と居館』第5回歴博フォーラム 国立歴史民俗博物館 1990
- 注10 橋本博文 「東日本の居宅と関連遺構」 『古代豪族と居館』第5回歴博フォーラム 国立歴史民俗博物館 1990
- 注11 石野博信 「1 総論」 『古墳時代の研究』2 集落と豪族居館 雄山閣 1990
- 注12 小笠原好彦 「豪族居館研究の課題」 3 居館の構成と機能 『季刊 考古学』36 雄山閣 1991
- 注13 小笠原好彦 「第4章 集落遺跡からみた古代の大型倉庫群」 『クラと古代王権』 ミネルヴァ書房 1991
- 注14 安部義平 「居館研究の現状と展望」 『古代豪族と居館』第5回歴博フォーラム 国立歴史民俗博物館 1990
- 注15 藤田和尊 「近畿の豪族居館」 『季刊 考古学』36 雄山閣 1990
- 注16 鈴木敏則 「静岡県の掘立柱建物の概要」 『弥生時代の掘立柱建物』－資料（東日本）編－埋蔵文化財研究会 1991
- 注17 辰巳和弘 『高殿の古代学－豪族の居館と王権祭儀』白水社 1990
- 注18 植木 久 「豪族居館の建物構造」 『季刊 考古学』36 雄山閣 1990
- 注19 平野吾郎 「22 静岡県」 『日本考古学年報』42 日本考古学協会 1991
- 注20 柴田 稔 「東海の豪族居館」 『季刊 考古学』36 雄山閣 1990
- 注21 柴田 稔 「豪族のくらし」 『静岡の文化』22 静岡県文化財団 1990

写真図版



「コ」字状配置の建物群(3-1~5H)



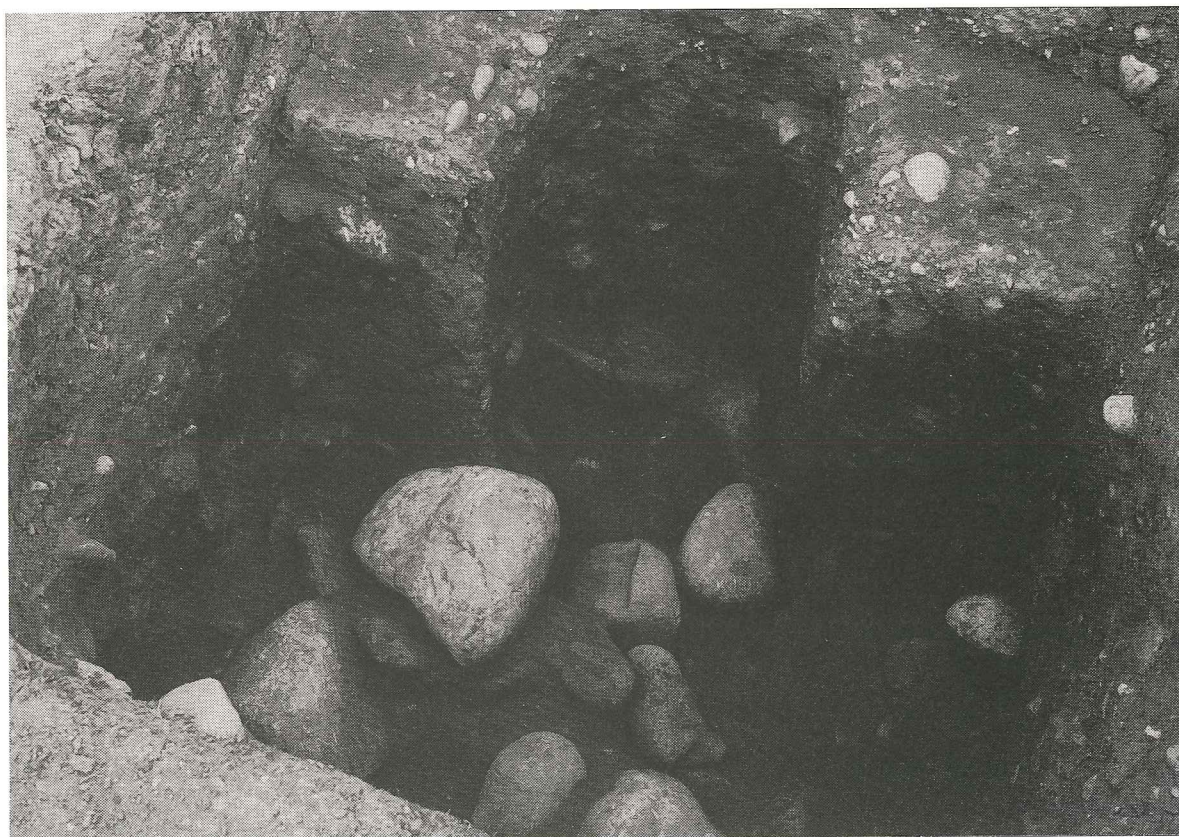
「口」字状配置の建物群(1-1~3H、2-1~5H)



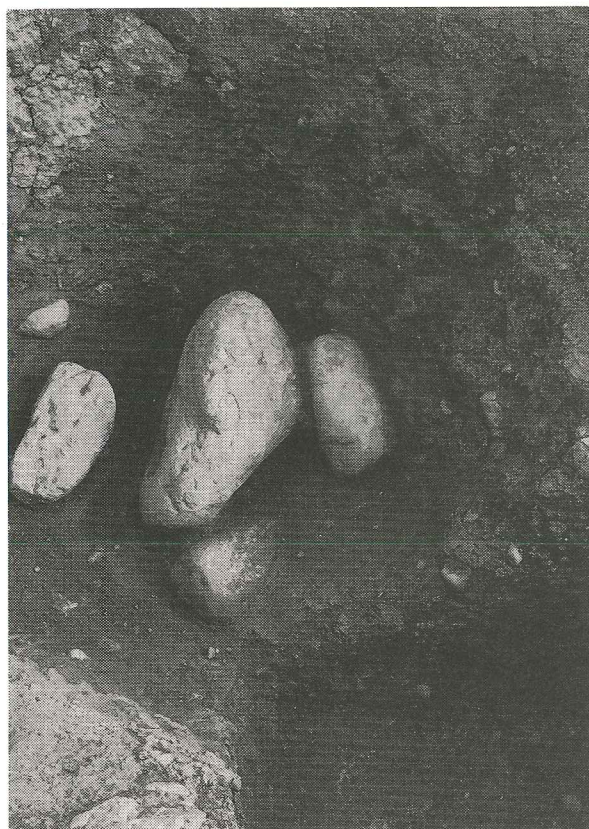
溝に囲まれた竪穴住居跡(1-3 J)とその周辺



1-1 H、1-3 D (南から)



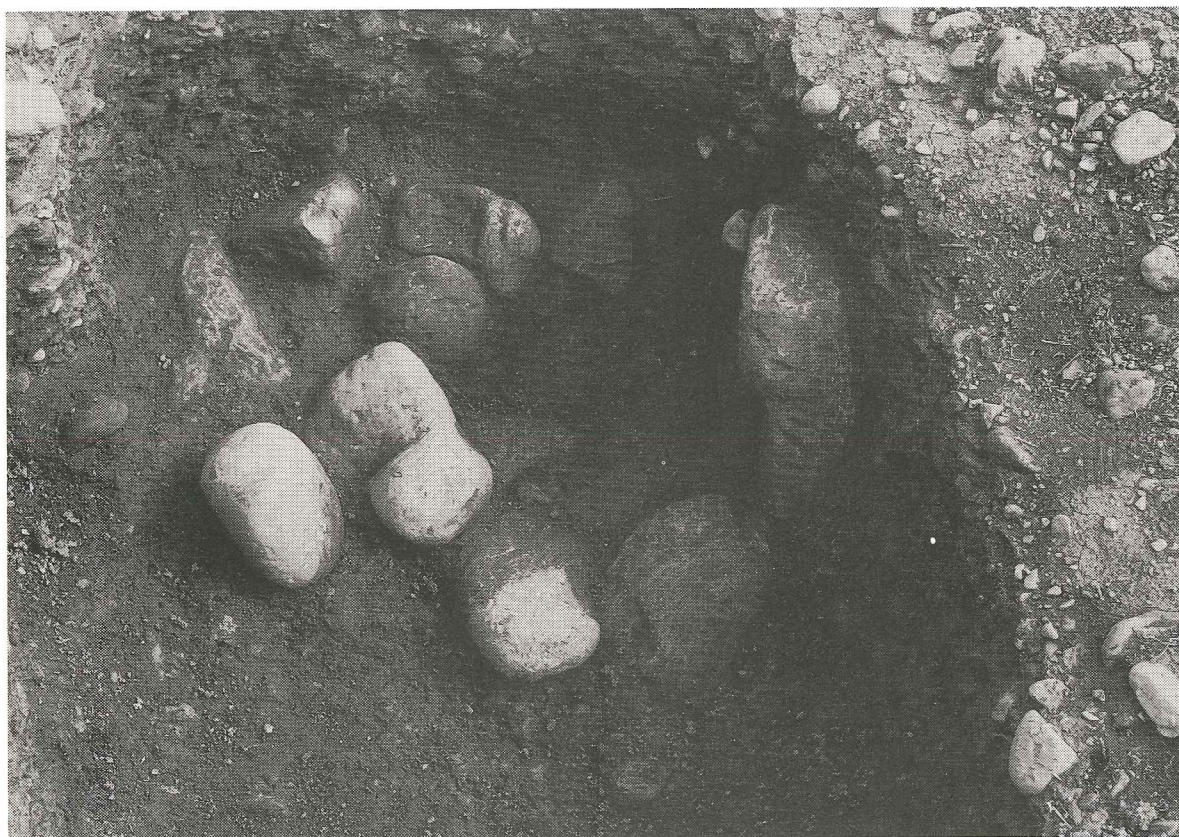
1-1 H・1-ロ P 柱痕と根巻石 (柱痕は割断)



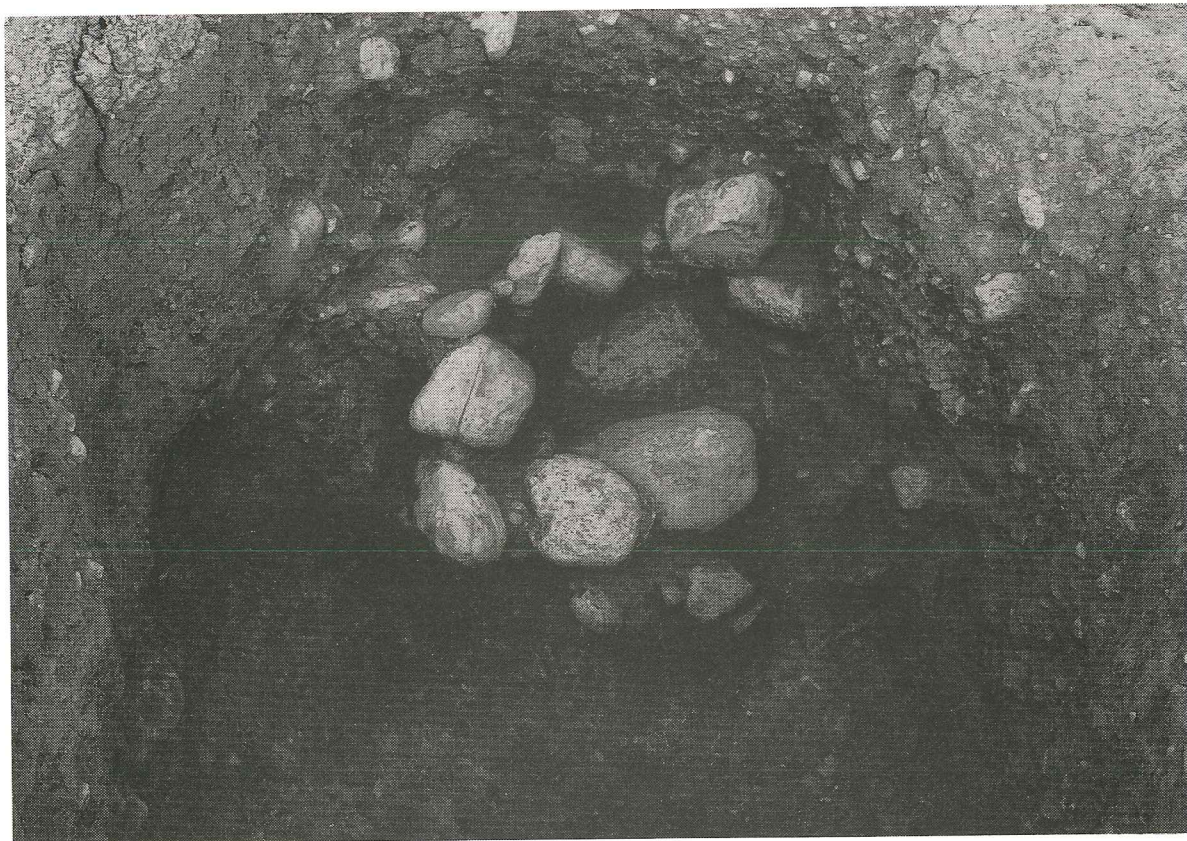
1-1H・3-ハP根巻石



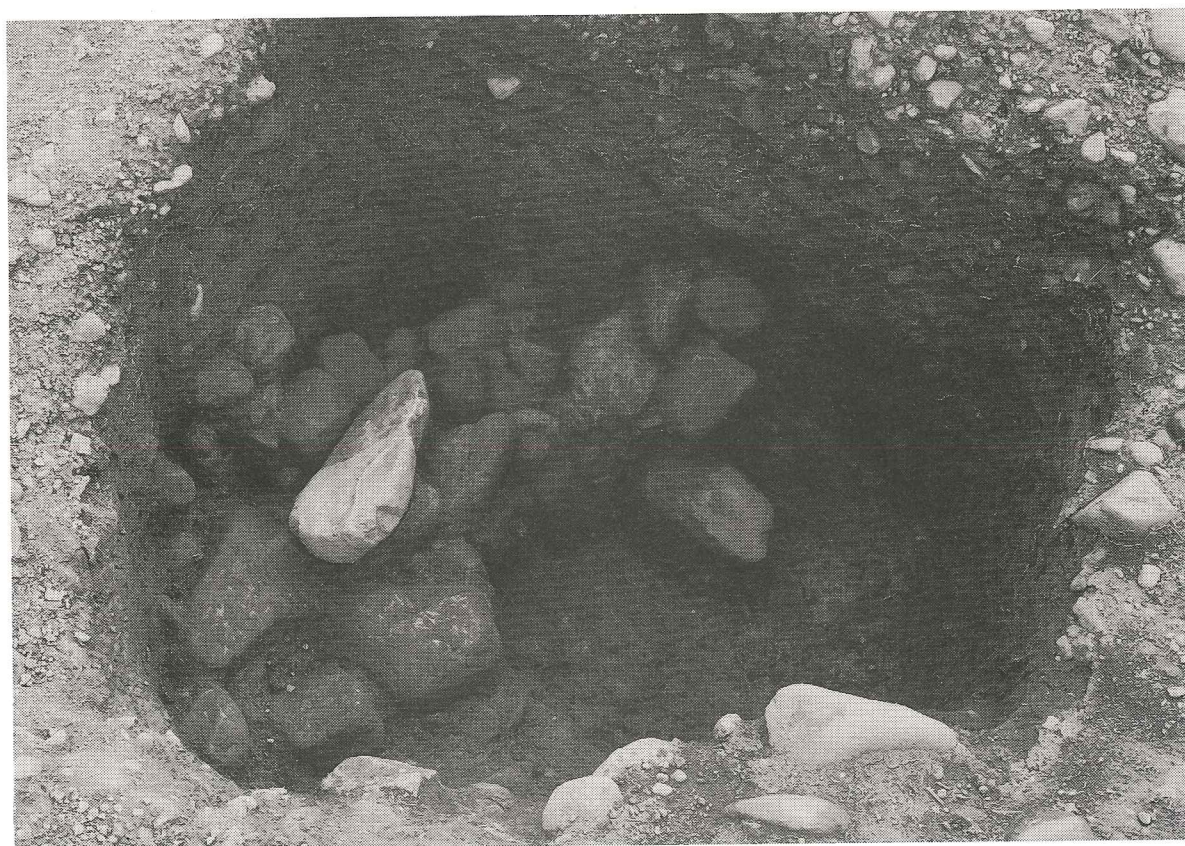
1-1H・1-ニP柱痕、基礎石と根巻石



1-1H・3-イP基礎石と根巻石



1-1H・1-ハP基礎石と根巻石



1-1H・2-イP柱痕と根巻石



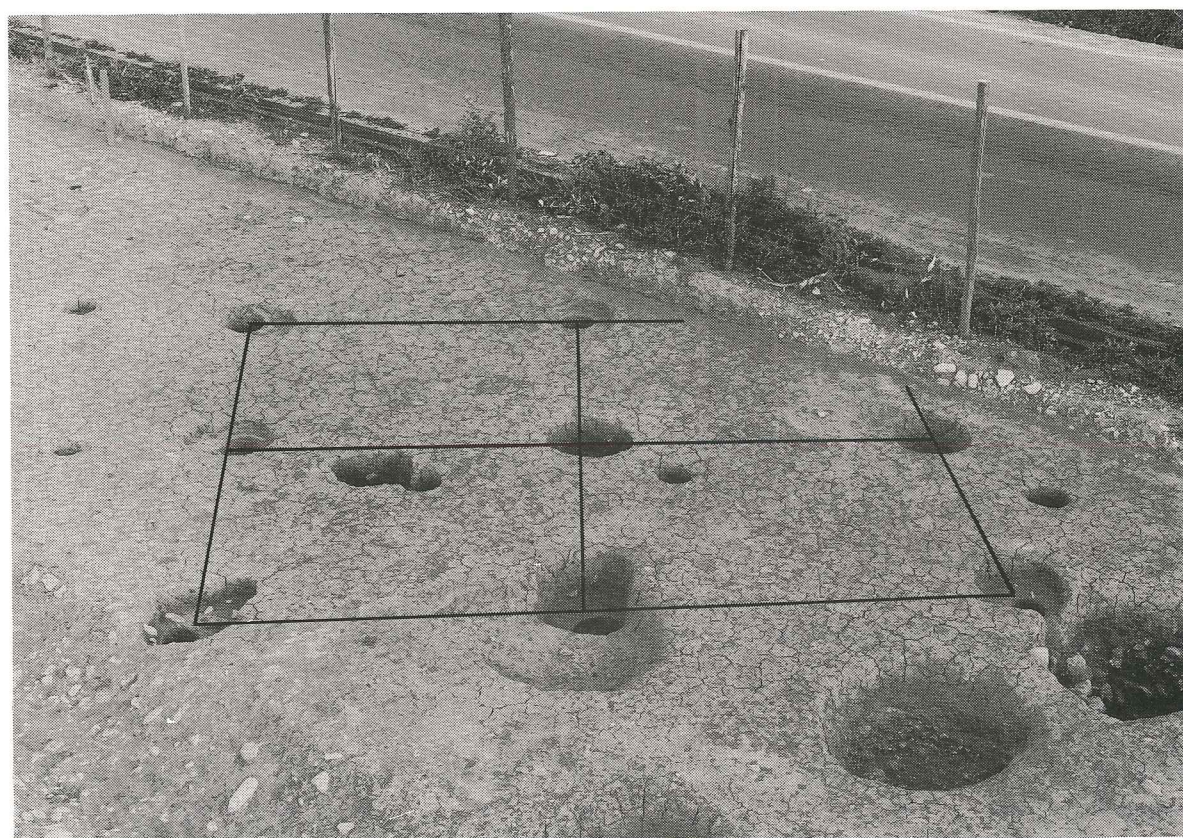
1-2H(北から)



1-2H・1-ホP断面(下半の明るい部分は底面)



1 - 3 H (南から)



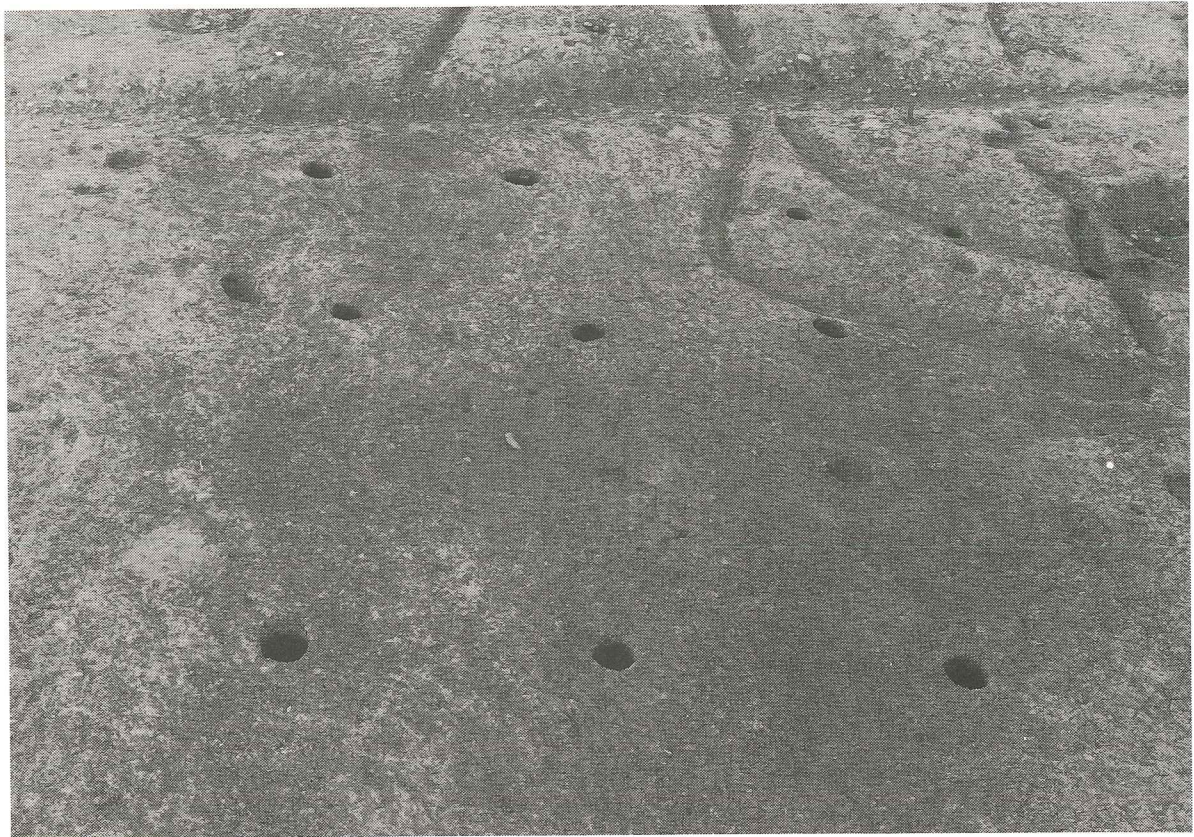
1 - 5 H (西から)



1 - 6 H (南から)



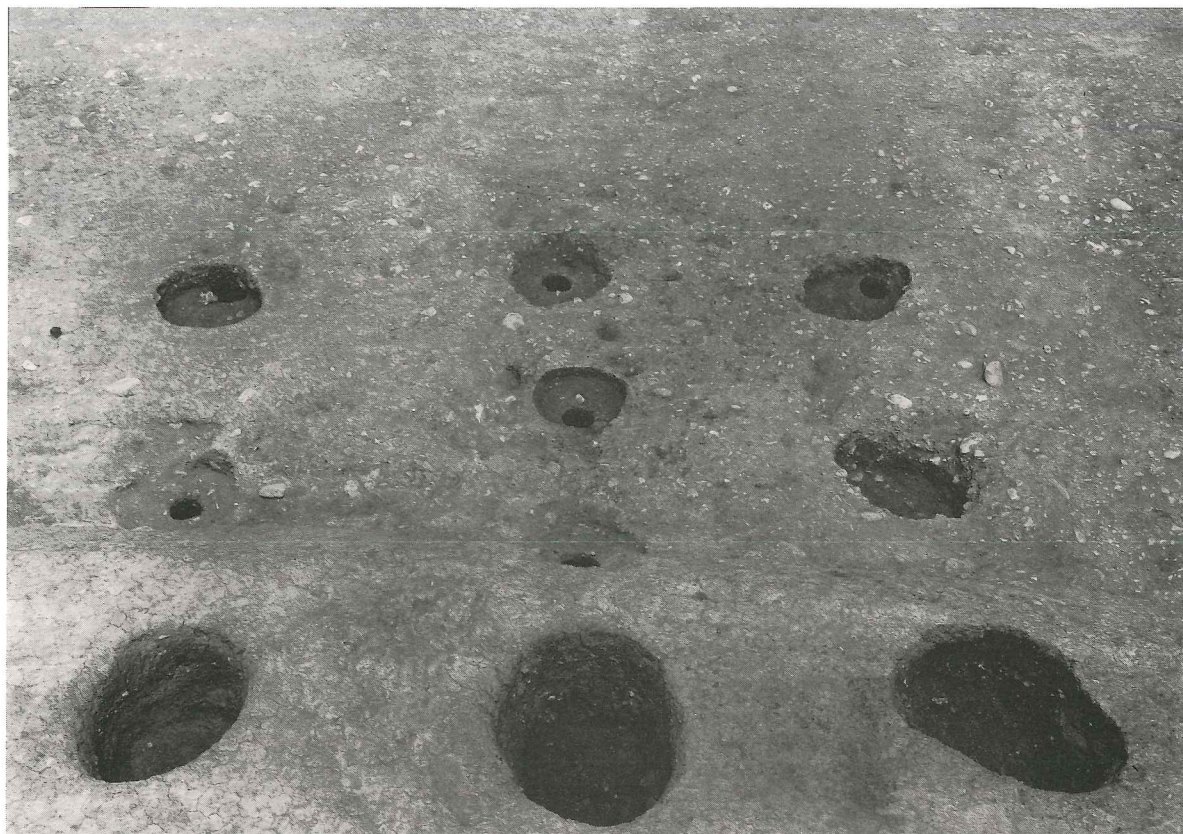
1 - 7 H (南から)



1 - 8 H (南から)



2 - 1 H (奥)、2 - 2 H (手前、西から)



2 - 2 H (南から)



2 - 3 H (南から)



2-4 H (南から)



2-4 H・3-ハP 遺物出土状況 (須恵器・白玉)



2-4 H・3-ロP 柱痕内遺物出土状況 (勾玉)